

文久元年 (1861)

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
文久元年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」
(紙数九十一枚)の記載あり〕

目録

参考 樺山資之日記鈔

〔年頭ノ歌〕

樺山資之黒田清綱柴田東五郎ト会話

樺山資之等肥藩有志者ト会話

樺山資之水戸藩美濃部某ニ会ス

水藩武田彦九郎烈公ノ書ヲ樺山資之ニ贈ル

島津左衛門御親書ヲ邸中ニ布達ス

樺山資之寺師宗道ト鮫洲ニ遊歩ス

樺山資之儒者東條某等ニ会話

樺山資之水戸奸党退斥ノコトヲ聞ク

樺山資之等長藩桂幸五郎ニ初テ面晤ス

樺山資之長藩久坂玄瑞ト初テ会話

橋口傳蔵出府

日下部祐之進^{〔天〕}一週年祭

島津左衛門襄田傳兵衛帰国ノ途ニ就ク

樺山資之内田仲之助桂幸五郎等ト会話

樺山資之長藩山縣半蔵ト会話

樺山資之柴田東五郎ト飛鳥山ニ遊歩ス

樺山資之水長藩士ト義挙ヲ議ス

樺山資之町田久成等水長藩士会話

樺山資之ニ久坂玄瑞君主ノ言行ヲ語ル

樺山資之神田橋某ト会ス

樺山資之伊集院次左衛門ト川上式部ト会話

藩邸御納戸蔵焼亡

樺山資之橋口傳蔵福井藩村田己三郎等ニ会ス

樺山資之關山糺カ木屋ニ川越藩山肥前等会話

樺山資之益満等ト横井平四郎ヲ訪フ

魯人對州乱妨ノ説

樺山資之町田久成小塚原日下部橋本等ノ墓ニ詣ツ

魯人對州乱妨ノ再報

樺山資之久坂玄瑞ト會藩秋月梯次郎ト初テ会ス

異星出頭

異国人殺害セラル

日下部ノ家族時山其他ト舟遊

水戸藩士邸門ニ屠腹ス

神田橋某忌諱ニ触レ帰国セシム

日下部家族帰国ヲ望ム及ヒ和歌

樋渡神田橋ノ二名大廻船ヨリ帰国セシム

水戸藩士三十七名帰邸ス

久坂玄瑞攘夷ノ歌

樺山資之久坂玄瑞等柴田東五郎カ宅ニ会ス

樺山資之帰国準備

樺山資之還俗ノ意旨

樺山資之長藩周布政之助ニ会ス

樺山資之高知藩武市半平太ニ会ス

樺山資之日下部家族ト帰国ヲ命セラル

樺山資之帰国出願

武市半平太帰国

樺山資之別離ノ歌

樺山資之橋口傳藏久保田治部右衛門ヲ訪フ

樺山資之日下部家族ト有村次左衛門等ヲ千住回向院ニ

拜ス

樺山資之寺師宗道内田仲之助日下部ノ家族ヲ訪ヒ尋テ

平田鐵胤ヲ訪フ

樺山資之日下部家族帰国ノ途ニ就ク

樺山日下部途ニ鎌倉ニ遊フ

樺山日下部着京

樺山日下部大坂着

樺山日下部下ノ關着

樺山資之島津登出府ノ途ニ逢フ

樺山資之途ニ母ノ訃ヲ聞ク

以上六十条

参考 樺山資之日記鈔

三九二〔年頭ノ歌〕

萬延二辛酉年

正月

正 月

元日 晴

今朝ハ空晴、旭サシ出、殊ノ外長閑ニモナリヌレハ、
ワケテコ、ロモアラタマルコ、チセリ、甲冑ナト飾付
モノ、ソノ道ニ備ルマコ、ロハ、サケ佩太刀ニ、梓弓
引打ハナスヒトスチハ、神ノ恵モ有ヌレハ、祝ヒシ松
モ幾千代カ、イヨイヨ匂フ日ノ本ノ、カシミ棚引サク
ラ花、カホリテ色モウツクシク、筆トリ初メトテモノ
シケル、

新ることろいよくますらをの

はなの盛りとなりにしものを

四ツノ比ヨリ簾下拝礼、夫ヨリ邸中ノホトリ相廻リ、
ナカ山トモニニシムコツ(ツカ)ヘ参リ、暮ニモナリヌレハ、
(清徳)黒田ヌシヘ寄り帰侍ル、

二日 晴

例ニマカセ未明ヨリ出タチ、下馬見ニ赴キ、夫ヨリ半
(都下代田区)蔵門ノ前ヲ過小石川(文京区)ヘ至、昌平館(台東区)ノ後ヨリ上野ノ如ク
参リ、雁店ニテ飯トモ喰、淺草ヨリ吉原ノホトリヲ見
物イタシ、東橋ヲ打渡リ(墨田区)両國橋ノ茶店ニ相休ミ、シナ
シナノ見物ニテ日入過ニ帰ケレハ、湯ヘ参リイト心ヨ
カリシ所ナリ、

三日 雪降

八ツ過ニ帰候処、肥藩木原士被参、中途ニテ逢ヌレハ
共ニ帰、肥後ノアソヘ奉納ノ太刀ノ写ナト贈ラレケル、
外ニモ右被用候哉ノ事モ有之、暮前ニ被帰候事、
書入肥後阿蘇社(池カ)ヘ菊地ノ城(宮ラカ)ヘ奉謹上候節、彼ノ社ヘ御
奉納ノ太刀写ナリ、金物都テ金銀唐草ノ彫、

四日 雪積曇

八ツヨリ(国勢)椎原・森岡同伴ニテ、相馬ノ邸岡部氏明日發
足帰国ノ由故差越、櫻田辺茶店ヘ赴キ饒別ノ興トモ相
催、暮ニ帰候事、

五日 晴

湯入ヨリ(東京都中央区)水天宮辺致歩行候事、

六日 晴

西日下ノ所(目下郡)ヘ赴、森岡参暮ニ帰ナリ、

七日

薬湯ヘ入参歩ノ事、

八日

入湯直ニ帰、中原主ニ赴キ夫ヨリ椎原士(周介尚綱)ヘ立寄同道、
河上太夫(式部久美)ヘ参リ美能多士(兼田佐兵衛)モ無程被参、汾陽氏(彦次郎)モ参殿、
彼是ト四ツ過ニ引取候事、

九日

八ツ半比ニ西向田中へ越候へハ、大野来、(水吉) 日下ニテ猶亦参察ノ事モ有之、書物トモ被贈候テ暮ニ帰候事、(家妙)

十日

肥藩木原士外ニ馬淵慎介ト申方同道ニテ被参、武重ノ摺約束致置候処持参ニテ候、日入過ニ被帰候事、(堀池)

十一日

今日ハ御蔵祝ニテ、八ツ後ヨリ致歩行暮前ニ帰、又々賑々敷候、

十二日

今日ハ四ツ過ヨリノ企ニテ遊参ニ赴キ、暮過ニ帰候事、

三九三 樺山資之黒田清綱柴田東五郎ト会話

十三日

昨日柴田(東五郎)へ申越置候処、八ツ過ヨリ赤羽根店楼ニテ致面会、旁ノ事モ及演説、黒田子誘有之参候故相分レ、夫ヨリ歩行致シ暮ニ帰候事、(清綱)

三九四 樺山資之等肥藩有志者ト会話

十四日 晴

肥藩ノ方へ約定致置候故、(國幹) 椎原・森岡・永山誘、八ツ過ヨリ木原氏へ参り候処、無程馬淵子モ被参、尤外ニ兼坂熊四郎・平山平九郎・松田次郎右衛門・狩野藤吉ノ人々モ入来ニテ、段々ト正談モ有之、日入過ニ帰、夫ヨリ椎原氏モ立寄、伊牟田ニモ参り、四ツ過ニ引取候事、(茂時)

先夜ニハ中原氏へ差越及熟談ニ、四ツ時分ニ帰候、(肩介) 老へモ追々ト談和ノ事モ有之ヌ、(田兵衛長鹿)

無余儀訳合ノ事有之、貞吉ト申者一条ニ付、八ツヨリ西向へ参り、旁承候テ帰、湯へ赴キ直ニ帰也、

十五日

十六日 雨
西向ヨリ芝居見物ニ神明前ニ可差越トノ事故、八ツ過ヨリ出掛候処、込合候トテ空敷引取候処、重ノ物トモ贈リ被呉候、

十七日 雨

八ツ過ヨリ(義田)ミノ子同道ニテ、神明へ芝居見物ニ赴キ候事、

三九五 樺山資之水戸藩美濃部某ニ会ス

三九五 樺山資之水戸藩美濃部某ニ会ス

三九五 樺山資之水戸藩美濃部某ニ会ス

十九日 薄雪積ル

今日ハ柴田方へ可參トノ趣故、四ツ前ヨリ出懸、道アシク候テ、小石川ヨリ〔東京都文京区〕護國寺前ニ出、大塚ノ様廻リ差

越、未水藩〔尾定〕美野部士モ不被參故、暫時刻ヲ移候へハ被參候、始会ノ事候へトモ、兼テ為人事モ聞及ヌレハ、

事情モ徹シ、大キニ力ヲ得候気味ニモ相成、面白カリケルニ、遠方殊ニ時剋モ過候テ無致方、日入比ニ引取

候処、六ツ過ニ歸候事、

廿日

今日昨日ノ一条モ有之、衰老へ差越ヌ、出勤掛太郎〔相良甚之丞〕甚

子へ立寄候へハ、御国ヨリノ飛脚昨日当着迄參候ノ由ニ付、方承及候、八ツ過ニ都テ着ニ相成、同宿鎌田子

被參直左右共承ヌ、尤書状モ相届キ、〔新納嘉藤次立夫旧名〕兄君御広敷番ノ頭へ御役替被仰付候儀申来、最早拾年余、更ニ母公ノ

御心奉歎事モ無之、一筋ニ此事ノミ案侍リケルニ、細々申參嘸々御歎奉察ノ余リ、泪催カネテ何モ思捨候、

我ナカラモ唯々孝ノ一スチト奉思モ、情ノ厚トモ言へシ、心祝ノ事モ考ヌレト、着ニテ世話敷候へハ、其事モカナワサリシ、

廿五日 空晴

四ツ過ヨリ致御暇、重久・有馬両子同道、〔東京都新宿区〕四谷ノ様致

參歩、一興相催面白、日入時分ニ引取、中途ニテ飯トモ喰暮ニ歸候事、

廿六日 晴

今日島津〔久敬〕左衛門殿出府有之候事、

廿七日

今日ハ同宿蓑田へ饑別ノ企有之、四ツ過ヨリ〔東京都品川区〕鮫洲へ同席中差越暮ニ歸候、然処水仁〔久九〕大野可參トノ事故、早日

ニ存ナカラ及遅刻、帰掛西向へ立寄候処、唯今歸トノ事故歸候事、

三九六 水藩武田彦九郎烈公ノ書ヲ樺山資之ニ贈

ル

廿八日 晴

八ツ過ヨリ糺合方左傳ノ積儀式日ニ付、相濟候テ西向ノ様差越、未不參故暫待居、無程被參候、左之儀モ承

リ愈武田〔水戸武田彦九郎〕出府ノ由ナトモ承リ、老公真跡ノ摺掛物、〔吾郎〕外ニ武田へ鞠歌トテ、先年武田嘶承致候処、是ニモ老公〔烈公〕

ヨリ被下候歌ナリトテ被贈候、用向モ畢候テ暮過ニ被歸候事、

三九七 島津左衛門御親書ヲ邸中ニ布達ス

廿九日 晴

今日ハ書状認方ニテ他出不致候、

(島津左衛門久盛) (島津茂久)

昨日左州着ニ付、君ハ公ヨリ御筆ノ仰出有之、拜聴被仰渡候事、

三九八 樺山資之寺師宗道ト鮫洲ニ遊歩ス

二月

朔日 大晴

八ツ後ヨリ寺師子誘ニテ致歩行、鮫洲辺迄參歩、茶店

(宗連)

ニテ飯トモ喰候テ帰候ヘハ、道具屋ニテ楠公ノ文摺掛

物相求、暮ニ帰候事、

二日 晴

三日

四ツ過ヨリ寺師・蓼田同道ニテ、(東京都新宿区)四谷ノ内銀世界ヘ梅

見ニ赴キ、帰ニ中途ヨリ雨降候テ茶店ヘ立寄候処、不

(実善丸)

岡中山殿藩士ヘ面会、段々嘶ニ寄り馳走トモ有之、宮
帯刀ト申仁ノ由、暫彼是ト承候処、空モ晴候故引取、

與ニ任青梅ノ一興催、日入前ニ帰候事、

四日 晴

今日ハ大野士約束ニテ、西向ニテ取会、暮ニ被帰候事、

五日 雪積

今日同宿(為悦)ミノ田出立、飛脚被差立書状等仕舞候事、

七日 晴

西向家内衆誘ニ寄、(目黒)椎原・森岡同道ニテ四ツ過ヨリ打

(東京都大田区)

立、池上ノ様差越、中途ニテ飯トモ喰、諸方梅モ盛、

イト長閑ニモナリヌレハ、一入路モ面白、池上ニテ茶

店ヘ暫円居、酒トモ汲候ヘハ段々興モ相成、家内衆モ

余程楽ノ儀ニ被察、風景何ヤラ久々ニ嬉シク慰侍リケ

レハ、

心さへ嬉しき春になりけり

霞める野辺の草もへつつ

長閑なる心うかれてもろとも

うきを忘るゝけふにも有哉

日モ傾候故打立、道スカラ色々ト慰、暮ニ帰候事、

八日 晴

(目下郡)

ニシ向・柴田参リシト申来、七ツ過直ニ赴キ、彼是ト

承ヌ、夫ヨリ日下ノ所ニテ事モ畢ヌレハ、湯ヘ差越、

日入過ニ帰ヌ、

九日 曇

八ツ過ヨリ(太郎左衛門)田中氏へ差越、夫ヨリ同道肥藩平山子へ赴キ暫相嘶、日入過ニ帰候事、

三九九 樺山資之儒者東條某等ニ会話

十一日 晴

(京都千代田区)辰ノ口細川侯邸兼坂士へ八ツ過ヨリ差越、相尋候テ緩々致面会、馳走ナト有之、日入前ニ引取、西向へ立寄、小出氏へ始テ相尋緩々致面会、帰ニ東條ト申儒者、是モ初会ニテ暫相嘶、夫ヨリ西向へ立寄候処、大野被参居候テ暮ニ帰候事、

十三日 晴

(同前)推原・中原・内田・田中・森岡同道ニテ(京都渋谷区)廣尾草庵へ差越、カタカタ面白嘶毛畢、暮ニ引取候事、

十四日 晴

四ツ過ニ致御暇、有馬・鎌田ノ列ニテ(東京都大田区)蒲田梅屋敷へ差越、イマタ花毛有之詠モオモシロク、帰ニハ中途へ両人参居候テ一興ヲナシ、暮過ニ帰候事、

十六日 晴

八ツ後ヨリ久保田(新次郎)新殿誘ニ寄、田中氏(太郎左衛門)毛同道、廣尾ノ

ヨウ参歩、梅本トイヘルニ立寄暫カタラヒ、帰ニ中途乙女子ナト若草ナトツミ候サマ面白、空モ長閑ニ打カスミ、四方ノ山辺ノ梅ノ花色ナツカシキコ、チセリ、日モ傾ヌレハ暮過ニ帰ヌ、

四〇〇 樺山資之水戸奸党退斥ノコトヲ聞ク

十七日

七ツ過ヨリ西向へ差越、大野士被参、水ノ奸党退役ノ事承候、右ニ付内密奔走ノ訳モ有之、快ナリヌ、旁ノ儀毛畢、暮過ニ帰候事、

十八日 晴

八ツ過ヨリ(宗道)寺師・高島同道ニテ(京都港区)高輪御蔵へ御道具シラへニ差越、夫ヨリ麻布辺ヨリ櫻田ノ方へ致步行、日入比ニ帰候事、

四〇一 樺山資之等長藩桂幸五郎ニ初テ面晤ス

十九日 晴

四ツ過ヨリ森岡氏相誘、辰ノ口細川侯邸中成兼坂熊四郎殿所へ差越、約束致置候ニ付、夫ヨリ同道致、長州邸桂幸五郎殿へ相尋、兼テ承置候へハ、情実ノ儀毛有

之、吉田ノ門人ナル由ニテ、彼是ノ事モ聞侍リヌ、年

廿六日 曇

些不快故不致出勤候事、

兼坂士モ相別レ候テ、相馬侯屋敷大龜彌左衛門ト申方
先程被參、尤岡部方ノ書状モ被届候故、見舞ノ処、留
守ニテ書状迄頼置、暮ニ帰候事、

四〇三 橋口傳藏出府

廿七日 雨

今日ハ橋口傳藏殿着ノ段申參、中途迄迎ニ差越合ノ処、

廿日
八ツ後稽古場へ出席致ヌ、

不塩梅ニテ不相叶、御長屋ノ一条トモ計置、左候テ大
野氏參候段西向ヨリ申来、差越候テ暮前ニ引取、帰ニ
橋口へ立寄、五ツ時分ニ帰候事、

廿一日 晴

(嘉右衛門清綱)

昼過ヨリ黒田嘉右同道ニテ致歩行、用向有之候テ、相
馬侯屋敷大龜ト申方へ差越候処、山田五郎大夫ニモ被

廿八日

參、此程引取、夫ヨリ道具ナト見物致、茶店へ立寄候
テ暮過ニ帰候事、

今日モ不致出勤候処、町田直五郎トノ・江夏彦左衛門
殿着ニテ見舞被參候事、

廿二日 雨

今日御国元ヨリノ飛脚着書状相届候、

廿九日

今日迄モ同断、

四〇二 樺山資之長藩久坂玄瑞ト初テ会話

廿五日 晴

(目下部)

七ツ比ヨリ西向へ差越候処、長州藩淺下玄瑞ト申方被

(久坂ナラン)

參居、兼テ承置又同藩杉山九一ト申仁モ同道ニテ、イ

晦日 雨

ツレモ初会、暮過ニ帰候事、

肥後兼坂国元へ帰ルト申參候故、暇乞ノ一輪遣置ヌ、

八ツ過ヨリ湯へ参り、雨降りヌレハ青柳ノ色イトナツ
カシク覺侍リテ、

打わたす沢辺にもゆる青柳の

色なつかしき春雨を降る

うちかすむ遠山のさくら咲初て

野辺の若草もへ出にけり

三月 文久元年

朔日 曇 文久ト改ム

七ツ時分ヨリ湯へ参候へハ、相知レル人々モ被参、神
明前ノホトリニ参歩イタシ、暮前ニ帰侍ル、

四〇四 日下部祐之進一週年祭

二日

八ツ過ニ寺師子誘ニマカセ、(宗道)
(東京都港区)御殿山ノホトリニ歩行セ

シケルニ、雨ナト催シケレハ早クモ帰又、夫ヨリ西向

ヨリ申参事モ候ハ、赴ケレハ、町田氏モ被参居、(重五郎)
(祐之進)悴ノ

信憑 忌日ナレハソノ事モアリヌ、暫相咄暮前ニ帰候事、

既ニ明日去年ノ忌日一回ニモ当リヌレハ、述懐ナトノ

心ニテ書終リ置、
(概方)

追悼

しのふるも殊更けふハさまくと、真心おもへハます
ら雄か、すめら御国の為に社、やむにやまれぬ一筋ハ、
中々袖そ濡しける、何を手向んこゝろして、おもひを
述侍るものになぬ、

大君の為に碎しますらをの

真心おもへハなみたしなかる

過しよをおもへハけふハ夢に似て

うつゝにしのふことそうらめし

けふといへハ猶しのふにもなかくに

やむにやまれぬ我なみた哉

年経てハ猶しのはるゝ事社あれ

けふの涙を手向にそする

町田・森岡ノ両士モ被参、去年上巳ノ一回ナト屢歎烈

ニ及、(日下部惣)氏娘おまつトノ歌、又ハ下女かねノ歌トモ左

ニ記置又、

まつ子

わかれにしその日ハけふも廻り来て

またも涙にそてそぬれける

過し事おもひいてゝハなかくに

心もちゝにかなしくおおもふ

下女かね

はやくまのひとゝせさきのけふの春

かわくまもなしぬるゝ春雨

暮時分迄相漸帰候事、

五日 晴

四ツ過ヨリ余多ノ列合ニテ花見ノ企、〔東京都台東区〕北區上野ヨリ飛鳥山

へ赴キ、海老亭ニテ昼飯喰、夫ヨリ向島へ廻リ、イツレモ満盛ニテ見物ノ人々何ニテモ賑々敷、中途ヨリ段々列合モ有之、是迄御門六ツ迄ト申事ニテコソ心急キケルニ、今日ヨリ本ノ通四ツ限リト聞侍リ、心ユルヤカニナリケレハ、湯へモ入暮過ニ帰候事、

四〇五 島津左衛門蓼田傳兵衛帰國ノ途ニ就ク

六日 曇

今日蓼田〔伝兵衛長忠〕〔久松〕、島津左州へ付出立候故、暇乞トシテ今朝差

越候、八ツ過ヨリ橋口傳蔵トノ・黒田嘉右衛門トノ同

道ニテ、目黒ノ様致参歩、暮ニ帰候事、

七日 晴

〔東京都港区〕高輪御蔵へ御道具入方ニテ、八ツ後ヨリ同役中両三人

差越、夫ヨリ大井御屋敷ノ如ク差越、下役トモ差越起居

候テ、御二階ニテ暫眺望、サクラ最中ニテ殊更詠モ有

之、帰ニ〔同上〕鮎洲ノ様廻リ、茶店へ寄り候テ一興催暮ニ引

取、列モ面々ニテ、酔興ニマカセ立円居、花見ノ慰マ

タカク有ヘキニヤ、無程引取候故、糺合方久保田〔新次〕新所

へ参り候テ、サマサマノ談話ニテ四ツ過ニ帰候事、

八日 雨

緩々読書トモ致侍リケルニ、益満新八郎被参、少年ニ

ハ志モ面白暮ニ被帰候、

九日 晴

七ツ時分ヨリ黒田・奥清左衛門・有馬同道ニテ、〔寛徳〕廣尾

ヨリ日黒新富士ノ様致歩行、花見ノ人々賑々敷乙女ナ

ト舞躍シテ赴キ、イカニモ遊興ノ限り、夫ヨリ道スカ

ラ慰、帰ニ立寄一酒ナトカタフケ、五ツ頃ニ帰候事、

十日 晴

〔久成旧名〕町田助太郎殿被参候、

四〇六 樺山資之内田仲之助桂幸五郎等ト会話

十一日 曇

七ツ過ヨリ櫻田邸内田仲之助殿へ参り候処、外出故谷

十六日

候、又々西向へ差越五ツ過ニ帰候事、
八ツ過ヨリ湯へ参り、夫ヨリ致参步行、掛物ナト求帰

十五日 晴

終日稽古場ニテ過シ候、
十四日

へ寄り候処、大野被参居暫相嘶、五ツ過ニ帰候事、
ノ方へ差越、稍立寄候テ雨モヤミ候故引取、帰ニ西向

十三日

橋口傳・森岡・益満誘ニテ外出致候故、臺町細川侯邸
中木原氏へ見舞候へトモ、留守ニテ有之、夫ヨリ山辺

様参歩致、暮過ニ帰候事、

十二日 晴

久保田新・有馬同道ニテ、七ツ半比ヨリ廣尾辺目黒ノ
シ、五ツ過ニ帰候故、椎原氏へ寄り四ツ過ニ帰候事、

ノ嘶モ承り、画像ナト有之、寅士自筆ノ書ナト被贈、
申方ニモ参り被申、互ニ真情ノ興トモ至り、吉田人傑

玄瑞殿へ参り候へハ、桂氏モ被参、外ニ時山直八郎ト
山士大脇仲左衛門へ参り無程引取、夫ヨリ長州邸久坂

廿日 雨

候テ、暮過ニ帰又、
七ツ半過ヨリ田中氏へ見舞ニ差越、日下部氏へモ参り

十九日 晴

ナトニテ、暮ニ帰候事、
屋敷ノ如ク廻り、永井某ノ所へ差越候処、段々ノ馳走

大殿へ参り、平山氏ニモ立寄候テ、夫ヨリ廣尾澁谷御
八ツ後ヨリ橋口・森岡同道ニテ臺町細川侯邸中木原橋

十九日 晴

口合ノ趣モ有之候テ、彼是周旋ノ訳トモ細々相述、五
ツ過ニ帰候事、

ハ、大野子モ被参居暮前ニ被帰候、伊集院次左衛門へ
先頃取会尋行候処、外出故引取、帰ニ日下氏へ参候へ

十八日 晴

夕方ヨリ日下氏へ差越、五ツ前ニ帰又、
七ツ半比ヨリ麻布毛利侯ノ邸へ、時山直八郎ト申方へ

十七日 雨

随分鬱散ノ心ニモ相成、五ツ時分ニ帰候事、
り、夫ヨリ鮫洲へ参歩、梅屋ト申セシ店ニテ暫相休、

八ツ半比ヨリ永山萬齋・有馬龍悦相誘目黒ノシトク廻

四〇七 樺山資之長藩山縣半蔵ト会話

廿一日 曇

八ツ後ヨリ橋口同道、奥清左衛門ヨリ吳々ト聞候へハ、
(東京都北区)
赤羽根東條文蔵儒者へ差越、無程引取、長州桂士へ参
り候へトモ留守故、(八戸磯田名)山縣半蔵殿へ参り、久々振ニテ馳
走モ有之、(通武)帰ニ久坂氏へ差越暫嘶モ有之、(直塞)時山氏へ嘶
置候上巳ノ一条、(直長、水戸藩士)森士へ聞書ノ一冊遣シ被呉候、暮過
ニ帰、(札、在邸番頭)關山殿へ約束故参り候へトモ、(田舎)客人故椎原氏へ
モ申置候間差越、九ツ時分ニ帰候事、

廿二日 曇

湯へ参り、帰り候テ橋口所へ差越居候処、長藩桂子西
向ヨリ帰ノ様子見受候故、直ニ赤羽根迄参り候へトモ、
不逢故日下ノ様差越、彼是ト承り、五ツ前ニ帰候事、

四〇八 樺山資之柴田東五郎ト飛鳥山ニ遊歩ス

廿三日 晴

四ツ半比ヨリ致御暇、(東五郎)大塚柴田へ差越候処、昨日返答
致置候故被待居候、(東京都北区)飛鳥山へト被申候付、直ニ同伴イ
タシ候へハ、最早青葉ニモナリ、殊更風景面白、ヲキ

ヤナル茶店ニテ緩々嘶トモ及、日入前ニ引取、四方ノ
ナカメ乙女子ナト遊ヒツトヘルサマ、流石ニ未太平カ
ト物語トモ致シ、青々タル広原ニテヤ、立マトヒ、隅
田河ナカレ木ノ間ニ見得渡り、ワキテ若葉シゲリタル
ヲ見テ、

殊更に心にとまるこゝちして

みるも若葉はなつかしき哉

きのふはや花の名残りとおもひしに

若葉にかわるけふにやはある

マタ、サマサマニ被忍、懐旧ノ心ニテ、

慰る心なからもかなしきは

過し人社おもほるゝかも

夢の世とおもひし事もあわれなり

しのふむかしそなつかしきかな

夫ヨリ又々柴田へ立寄候処、野口玄兵衛殿モ被参、一
昨年別レ候迄ニテ、久々ニ面会イタシ、(其九)則ヨリ高談、感
心ノ事トモ有之、既ニ暮ニ及ヌレハ、(藤田)東湖先生ノ正気
ノ歌墨摺ナト被贈、マタ長吉田ノ詩歌トモ聞ケレハ写
貫又、暮ニ引取候処、五ツ前ニ帰ル、(乳金巻)關山氏へ江夏彦・
(兼徳)橋口ナト申合置候故、彼ノ所へ差越候へハ早参居、四

ツ過ニ帰候事、

廿五日 晴

大野子被參、西向ニテ面会、暮ニ被帰候事、

廿六日 晴

今日ハ久保田新丞(マコ)約束ノ所、故障ノ由故有馬龍殿誘、

六ツ半比ヨリ池上ノ様差越、茶店ニテ飯トモ喰、夫ヨ

リ新田宮ヘモフデ、玉川ノ如ク廻リ、川崎ヘ至リ、暫

相休ミ慰ミ事トモナシ、七ツ半時分ニ引取、山本ニテ

飯喰、暮ニ帰湯ヘ入候テ、西向ヘ差越、五ツ半比ニ帰

候事、

四〇九 樺山資之水長藩士ト義挙ヲ議ス

四月

朔日 晴

八ツ後ヨリ長邸ヘ参リ、時山士モ久坂ノ所ヘ被参居、

彼是用事モ畢リ、蒲生ノ石摺トモ被贈候テ、七ツ時分

ニ引取、夫ヨリ内約ノ儀モ有之、赤坂ノ如ク差越候処、

大野中途ニテ逢、尤美野士モ被参居、緩々熟談ニモ及、

五ツ時分迄相話、大士モ帰国ノ由故、旁用向有之、カ

ネテ望ミ候老公ノ御筆ナト被贈候テ引取、五ツ過ニ帰

候事、

二日 晴

九ツ半比ヨリ寺師・毛利・前田ナト列合ニテ、玉川ノ

様差越、新樹ノ葉殊更ニ面白、帰ニ池上ノ様廻リ茶店

ニテ暫相休ミ、夫ヨリ諸方打眺侍ルニ、藤ナトノイト

見事ニ咲ルヲ見テ、酔興ニウタイ侍ル、

乙女子かすかたもかくや有つらぬ

はなれかたきは藤浪の花

ソレヨリ暮ニモナリケレハ、湯ヘモ入夜入過ニ帰候事、

四一〇 樺山資之町田久成等水長藩士会話

三日 雨

長州桂子ヨリ一書到来ノ趣ニ寄返答致、町田氏同伴ニ

テ数寄屋橋ノ如ク待合シバシ待侍リケルニ、更ニ逢事

無覚束故、又々彼ノ邸ヘ参リ候ヘハ、案内被致、亦々

本ノ場所ヘ赴、被待居候トテ、カネテ駒込水人岩間金

平子モ被参候テ、始テ面会被是ト談侍ル、先年面会ノ

西丸帯刀ノ方ヨリ一封持参、ソレヨリ暮ニモナリ相別

レ候、左候テ西向ヘ用向有之、立寄候テ五ツ過ニ帰候

事、

四日

(孝友衛門藩江編考)

鎌田孝州誘ニ寄、幸櫻田屋敷内田仲之助殿へ見舞、暮

過ニ帰候事、

六日 晴

今日八日下氏家内企ニマカセ、八ツ後ヨリ森岡・町田・

(兼徳)橋口・江夏氏

(孝友衛門)ナト相誘、(東京都大田区)洗足ノ池へ参り、至テ閑静ノ

所故風景モ有之、サマサマニ興ヲ催、面白ノ余リウタ

ヒ侍ルモノニナン、

はるくときつのかたにもろとも(手紙云)

やかてもけふをむかし語らん

もろともに憂も忘れて池水に

心すゝしきけふにも有かな

はし口

空蟬の世のうきふしを池水に

洗ひすてゝのころすゝしき

日下氏 (寛徳)まつ子

君かけふ深き恵みのしるへにて

名に間池をみるそうれしき

世の中の憂数々も打わすれ

けふのあそひそたのしかりけり

ソレヨリ日モカタフキヌレハ帰ラントテ、道モカワリ

テ中途スカラ慰、大井御屋敷へ立寄、ミナミナ初ノ事

故御庭ナト拝見、暮ニモナリ湯ヘモ入候テ、五ツ過ニ

帰候事、

七日 晴

昨日久坂ノ方ヨリ紙面参候トテ、今日相届、可参トノ

趣故直ニ出掛候処、水人片岡為之丞被参居、旁畢リテ

暮過ニ帰候事、

八日

有馬外ニ兩人ノ列合ニテ湯ニ参り、暮ニ西向へ差越、

五ツ前ニ帰候事、

九日 晴

久保田・松元・相良・中原同道ニテ、五ツ過ヨリ鮫洲

ノ様平田直へ贈リニ参り、昼時分引取、中途諸所へ立

寄帰候処、柴田へ逢ヒ、赤羽根茶店ニテ取会、ソレヨ

リ時刻モ早ク候故、麻布ノ如ク廻リ候テ帰候事、

十日 晴

八ツ後奥清同道ニテ、下谷菊地容齋所へ差越、画相頼、

ソレヨリ浅草ノヨフ廻リ、東橋ヲ渡リ兩國へ至リ、湯

ヘモ入候テ五ツ時分ニ帰候事、

十一日 晴

今日ハ新納軍(軍悦)へ饒別ノ企有之、目黒橋北屋へ八ツ過ヨリ差越、左迄可慰事モ無之候へトモ、過シ比ヨリ見馴シ風景ナト、殊ニ新樹猶モ心トマリシコ、チニモ覺侍リテ、

むかし我遊ひし事のしのはれて

なを恋しきは山の色かな

ソレヨリ暮ニモナリヌレハ引取、帰途ニテ月モ朧ニテ、田面ノカタヘ蛙ノ鳴ヲ聞テ、

朧なる月はさやかにみえねとも

ものなつかしきかわつ鳴なり

道ニテ食事トモ致、五ツ過ニ帰候事、

十二日 晴

稽古へ出席致、仕合方へ差越暮ニ帰ヌ、

四二一 樺山資之ニ久坂玄瑞君主ノ言行ヲ語ル

十三日

八ツ過ヨリ益満(新八郎)ヲ誘、久坂ノ方へ差越候処、水人モ被

参居、段々咄モ有之、長君侯ノ説ナト承リ、先年吉田(松陰)

ヨリ上書ノ砌、増田取次ニテ差上候処、キヨフノコト

ハ右ノ内へモ有之、君御覧アリ、是ハ吉田カト増田

へ御尋有之、左様カト被申上候へハ、吉田ハ有志ノ者、狂氣ニテモ不成様申聞ヨト御意有之、右ノ事吉田承リ別テ恐入、尚更尽ス志モ相立候トノ久坂晰ニ候、左候テ國中へ御書取ヲ以、常ナラヌ時節乱世ト心得、衣服ノ所ナト麁ニ可致トノ趣ノ由、カネテ御心被用、寒中ニ足袋ナトモ御用不被遊トノ事モ承リ、イツレモ感佩ノ至ト存候、御側女中貞婦ノ由ニテ、君侯へ差上候歌ノ由ニテ、

ますら雄のやたけ心のいさおしに

おさまる御代をみるそ嬉しき

マタ或時寺へ参リ候事有之、人々不審ニモ考候処、吉田氏ハ天下ノ為メニ心ヲ尽候人ニ候へハ、セメテハトモラヒイタシ度ト申セシ由、中々称美スヘキ事ニナン、暮ニモ成候故婦、西向へ立寄、夫ヨリ(金住)關山氏ヨリ申来候故ニ差越、四ツ過ニ帰候、今日ハ廣尾へ琵琶ノ会トテ被誘候へトモ、終ニ差越事不叶候、

十四日

今日ハ何方へモ越サス過シ侍ル、

十五日 雨

〔官給〕 森岡・椎原・相良ナトへ餞別ノ企有之、八ツ後ヨリ鮫洲へ差越暮ニ引取、西向へ寄帰候事、

十六日 晴

柴田參談合畢、夫ヨリ同道ニテ久坂へ差越、同道ノ企有之、七ツ時分ヨリ目黒ノ様赴キ、夜入前ニ引取、西向へ立寄候テ帰候事、

十七日 雨

〔兼備〕 椎原・森岡へ名残り嘶ノ企ト承リ、廣尾東源亭へ橋口・〔彦左衛門〕 江夏・町田差越、黒田ニモ參候、取りくニ歌ナトモ出来候へハ、

わかるにも何をたのまぬはるくくと

都のたよりきかまほしけれ

夫ヨリ暮ニ引取日下氏へ立寄、五ツ過ニ帰候、

十八日 雨

椎原氏へ餞別ノコ、ロニテ日下氏へ被催、八ツヨリ可參トテ差掛候へハ、馳走ナト有之、森岡氏モ被參町田氏モ同断、五ツ過ニ帰候処、關山氏ヨリ使參リ赴キ候へハ、用事有之トテ無程引取候事、

四二二 樺山資之神田橋某ト会ス

十九日 晴

段々客来モ有之、毛利今日モ素読ニ被參、夫ヨリ益満・〔關山〕 神田橋ナト參リ居候処、西向ヨリ使来リ赴キ候処、長州人柴田方へ頼置候訳ニ寄り、礼トシテ来暫致帰リス、明朝椎原氏立ニモ相成故、一封認五ツ比ニ帰候、

四二三 樺山資之伊集院次左衛門ト川上式部ト会

話

二十日 雨

〔久美〕 川上式部殿ヨリ參様承、伊集院次同道ニテ七ツ半比ヨリ差越、尤汾陽彦次郎ニモ約束ノ事ニテ無程被參、彼是ノ咄モ致、外ニ客来有之候故、暮過ニ引取候事、

廿一日 晴

〔太郎左衛門〕 四ツ過ニ致御暇、田中同道ニテ大塚へ差越候処、高橋石齊參居、後ニ野口士モ被參、日入前ニ引取候テ、暮過ニ帰候事、

廿二日

〔新八郎〕 八ツ過ヨリ益満同道ニテ清州へ赴キ、段々ト知己ノ由ニテ參、山岡・池田ト申仁ナト面会イタシ候テ、暮ニ引取候処、西向へ用向モ有之、立寄候テ五ツ過ニ帰候

文久元年 (1861)

事、

四一四 藩邸御納戸藏焼亡

廿三日

森岡子立ニ付差越、四ツ過ニ帰候、暁七ツ時分御納戸藏外ニ六ヶ所焼失イタシ、幸風直リ御殿廻リ無掛念仕合ノ事(人足部屋ヨリ失火スト云)

廿四日

今朝森岡氏へ参リ、見贈ノ含候処、右旁ニテ不相叶候事、

廿六日 晴

柴田昨日参トノ約束ノ所、雨天故今日参候段申来、八ツ後ヨリ田中へ差越候テ、夫ヨリ同道イタシ、鮫洲ノ如ク赴キ、已前ノ人モ見得サレハ、何ヤラ慰ムヘク心ニ不至コ、チ侍ル、暮前ニ引取西向へ寄り候テ、五ツ過ニ帰候事、

廿八日 雨

西向へ赴キ夜入過ニ帰候事、

五月

朔日 雨

八ツ後ヨリ長州桂氏(采吉孝允)へ差越、外ニ客人有之、暫相話候

テ日入時分ニ帰、夫ヨリ久坂方(通西)へ約束致置候故、彼ノ方へ赴キ候処、長州ノ方御門ニテ逢侍ル、左候テ刻限ニ至候テ帰候、雨甚敷中途中々凌カタク五ツ過ニ帰候事、

二日 晴

今日ハ同席中誘ニテ、八ツヨリ雑会ニ赴キ、心ヨカラ又事ニモ覚侍ル、暮ニ帰候事、

三日 晴

江夏氏誘引ニテ、菊地容齋へ八ツ後ヨリ差越、画ナト被頼、彼是ト古事ナトモ承リ、尤大和辺ノ話トモ聞、(東条郡墨田区) 緩々致候テ引取、(港区) 兩國ノ様廻リ、暮ニ芝ノ様参リ候テ、湯へモ入西向へ立寄、五ツ過ニ帰候事、

五日 雨

今日ハ九ツヨリ御暇ニテ、帰リニ西向へ廻リ、日下氏へ差越暫相噺、七ツ比ニ成候故、夫ヨリ汾陽へ参リ候ヘトモ、留守ニテ白石氏へ赴キ候処、馳走ナト有之、暮前ニ引取、糺合方ヨリ外へモ寄り候テ帰候事、

四一五 樺山資之橋口傳藏福井藩村田己三郎等ニ

会ス

六日 晴

〔兼備〕

八ツ過ヨリ橋口同道ニテ、越前侯屋敷カネテ聞及候人々出府ノ由候テ、赴キ尋侍ルニ、村田〔三郎氏寿旧名〕・榊原幸イツ〔重十郎〕・柳原幸〔平四郎〕レ留守故、石原氏〔重十郎〕へ参リ初テ面会致シ、中根・横井士外御屋敷ノ由彼是ト承リ、日入前ニ引取緩々トイタシ、夜入過ニ帰候事、

七日 晴

八ツ過退出ヨリ、直ニ越侯邸横井士〔平四郎時存〕へ差越候処、唯今君公被召候由ニテ、寸暇無之空敷引取、夫ヨリ神田〔東京都千代田区〕ノ様廻リ、宮和田へ尋始テ面会、無程帰り西向衆約束故、直ニ廣尾〔秋区〕ノ様参リ、原狸庵へ差越候処、外ニ町田〔重五郎〕・橋口モ参居、至テ閑暇ニ候へハ、緩々ト慰ノコ、ロニマカセ侍リテ、

世をよそに忘るゝ計うれしきは

山にのかるゝけふにも有かな

夫ヨリ暮ニ成候故、月モサへ渡リ中途モ面白、五ツ過

ニ帰候事、

八日 晴

四ツ過ニ致御暇、高島同道ニテ堀ノ内へ差越、帰ニ途〔鎌倉〕中川端へ茶店有之、涼景ノ場所故立寄飯モ喰、暫相休

ミ候テ帰、湯へモ入候へトモ、時刻早キ故神明前ノ様廻リ候テ暮ニ帰候事、

四一六 樺山資之關山糺カ木屋ニ川越藩山肥前等

会話

九日 晴

七ツ比ニ神田橋参リ、他藩ノ者参トノ事故、出掛候テ面会致、川越ノ藩又ハ山口肥前守藩〔弘敏牛久藩主〕ノ由ニテ、長屋源平・炭山辰次郎志有之哉ト被聞候、左程ノ事ニモ不至テ引取、夫ヨリ町田氏〔町脱之〕へ約束ニテ、湯屋へ被越居候付、同道ニテ臺〔平九郎〕ノ細川侯邸中平山士へ参リ、話モ畢候テ帰ニ木原士〔福臣〕へ見舞候へトモ他出ノ由、夫ヨリ廣尾ノ如ク廻リ、暮時分ニモ成候テ大和屋へ立寄候へハ、是非ト申ニマカセ参リ、段々ト家内ノ者ナト馳走致、尤娘子ノ歌聞ノ事、兼テ申置ヌレハ、色々ノ謡イト面白シ、五ツ比ニ帰西向へ寄候テ帰候事、

十日 晴

七ツ半時分ヨリ長州時山氏〔直兼〕へ参リ候処、途中ニテ水藩片岡為之丞へ行逢、後日ト約定致置別レ、夫ヨリ彼ノ所ニテ暮過迄相晰帰候事、

四一七 樺山資之益満等ト横井平四郎ヲ訪フ

十一日 晴

益満(新八郎)土被參候付相談、越邸横井(時存、熊本藩士)へ差越候処、今日モ繁

用ニテ不相協空敷引取、暮過ニ帰候、月影サヘカナル

ニ時鳥ノ鳴ケレハ、

夜ふかくも山時鳥しのふらん

かたふく月の影に鳴なり

足引の山の奥なる月見れハ

声なつかしき山時鳥

四一八 魯人對州乱妨ノ説

十二日 晴

時山氏へ約置候故、五ツ時分ヨリ長邸ノ如ク赴キ候処、

大橋順蔵方差支(正頼、宇都宮藩士)ノ由ニテ取込ヌ、尤桂氏(采旨、孝允)ヨリ直ニ對州

へ異賊乱暴ニ付御届書有之、甚勸兼候趣ニテ、最早機(権九)

会ニ至旁及切談帰候、尤有志ノ人外ニモ段々被參候、

左候テ八ツ比ニ西向ヨリ申參リ差越候処、吉田榮次郎

被參居、柴田ヨリ(東五郎)ノ一封モ持參ニテ、暫相咄シ五ツ過

ニ帰候事、

十三日 晴

今朝川上大夫(式部久美)へ赴キ篤ト申述、伊集院(次左衛門)へモ立寄候テ、

四ツ過ニ桂ヨリ便リ參リ、今日面会ト申參候故、七ツ

比ヨリ彼ノ所へ赴キ候ヘトモ不来、暫相待候へハ岩間

ニモ參リ、旁々及暮過ニ帰、夫ヨリ西向へ寄り候処、唯

今大野參リ候ヨシニテ、残多時刻モ過候故、直ニ帰候、

十四日 曇

昨日木藤氏へ約置候ヘトモ、差支ニ寄今朝誘候テ差越、

四ツ前ニ帰候へハ、桂士ヨリ便リ有之、返答致置ヌ、

汾陽へ右之趣通置ヌ、高輪詰中原(周介)・田中氏(太郎左衛門)へ可參候処、

雨降候テ取止候事、

四一九 樺山資之町田久成小塚原日下部橋本等ノ

墓ニ詣ツ

十五日 雨

今日ハ水片岡ヨリ約束ニテ、四ツ過ヨリ町田氏同道ニ

テ、上野湯島天神内へ待合ノ賦ニテ、暫相待候ヘトモ、

不被參処ヨリ吉原ノ様廻リ、先年忠死ノ墓所、尤日下

部(舟渡)嫡男ノ參墓モ不致差越、回向院(墨田区)へ參リ候へハ直ニ

相分、イツレモ焼香トモイタシ、越ノ橋本ナトハ度々(左内)

逢シ事ナレハ、忍フニモヤマシカタクオモハル、杜意恨ナリ、悲歎ニ堪カネケレハ、

けふは猶やまれます泪わきいて、

ぬるゝ袂のひまなかりけり

夫ヨリ帰りニ雨モ降り候へトモ、小梅ノ如ク参リ、角田川舟ニテ渡リケルニ、余リ絶景云フ計ナキコ、チシ侍リテ、マタサマサマ憐ナル中ニモ、心慰ヘキヤト思ヒケレハ、

さためなきむかししのへは都鳥

すみたのさとに五月雨を降る

イマタ刻限モ早ク候故、兼テ聞侍リシ大橋順藏ト申セシ方ヘ参リ尋ケルニ、幸閑暇ノ折ニテ暫相話、議論正敷候テ面白、是非ト被止候へトモ、遠方ノ事ニテ引取、五ツ過ニ帰候事、

十六日 晴

(直差)

今朝長時山子被参、同道致日下氏へ差越、無抛桂士ヨリ使モ被参、四ツ時分ニ帰、左候テ柴田参リ候段申参候テ、出掛候処、被待居候テ旁相畢、夫ヨリ汾陽所へ案内イタシ候、赤羽根料理店ヘ夕方ヨリ同道致、御門限ニモ相成候故、汾陽・田中ニハ都合モ有之故、柴田

ニモ断リ、拙者先ニ帰り、日下へ立寄候テ帰候事、

四二〇 魯入對州乱妨ノ再報

十七日 晴

今朝時山士被参、對州切迫ノ一条細々承リ、約束致置候テ被帰、八ツ過ニ大野士被参候テ隙取シ故、乍不本意不相叶、暮過ニ被帰候付、五ツ過迄相話帰候、先山陽先生ノ石摺ナト被贈候、

十八日 晴

(兼傳)

今朝橋口士へ相託シ、長邸へ一封遣、八ツ後ニ差越候処、時山ニモ被参居、暫桂ノ所へ皆々被参相談、時山子同道ニテ對州邸へ赴キ、段々集談ノ所ニテ彼是ト承リ、此節對馬ニテ異賊乱暴ノ所ニ付テ議論モ致、暮ニモ相成引取候へトモ、矢野氏へ参リ候テ猶又承リ、刻限モ移リ候故引取、中途ヨリ時山士へ相分、五ツ過ニ帰候事、

十九日 晴

(栄次郎)

暮前ヨリ西向へ差越候処、吉田氏被参居、五ツ過ニ帰候事、

二十日 曇

今朝未明ニ打立、(東京都中央区)靈岸島越州御邸へ肥藩横井出府ノ由、(時存)

先日ヨリ差越候へトモ逢事不協、故ニ亦々出懸、幸緩

談致仕合ノ至、乍併無程出府ノ由故引取候、夕方ヨリ
町田氏同道、鹽谷甲蔵(母山形藩)へ出掛候へトモ、留守故帰候事、

廿一日 晴

八ツ過ヨリ肥藩木原(福邑)・平山(平九郎)ノ両士被參、彼是説談モ有
之、暮前ニ被帰候事、

廿二日 晴

西向ヨリ吉田參候段申来、則差越、八ツ過ニ成候故帰
リ、夫ヨリ亦々同道ニテ、麻布長邸前(東京都港区)ニテ相別レ、尤

久坂ヨリ書翰參リ候へハ差越、夫ヨリ櫻田邸桂へ參リ
暫相話、又々對州へ赴キ説教ニ及、暮ニモ至候故引取、
日下氏へ立寄、五ツ過ニ帰候事、

廿三日 晴

大楚參来事日下ヨリ通諭御門差越ヌ、暮過ニ被帰候故
暫相嘶、折柄此内(目下幕府)おまつ女歌ナト聞待リテ、

この人をいまかいまかと待たれハ

かせの音たにそれかとそ見る

返シニヨミテ遣シヌ、

まさしくも君かなさけの言の葉を

ふかきこゝろそ嬉しかりけり
ソレヨリ段々ノ馳走ニテ、五ツ過ニ帰候事、

廿四日 晴

柴田来候趣田中ヨリ申參、八ツ前ニ致御暇差越候テ、
夫ヨリ同道赤羽根料理店へ赴キ、暫時ハ話ニ及候へト
モ入込モ有之候テ引取、赤坂ノ如ク差越候へトモ、立
寄所モ無之候故、柴田案内ニテ水野小蔵へ參リ、尤先
比尋候へトモ、其折ハ留守ニテ今日緩々承リ、暮前ニ
引取、婦ニ日下氏約束ノ事有之候テ差越、馳走ニモ逢
候テ、五ツ半比ニ帰候事、

四二一 樺山資之久坂玄瑞ト會藩秋月悌次郎ト初

テ会ス

廿五日 晴

長藩久坂ヨリ一封參八ツ後ヨリ差越候処、會津ノ藩秋
月悌次郎被參、後ニハ時山(直善)・佐々木両士被參、五ツ時
分ニ帰候事、

四二二 異星出頭

廿六日 曇

夜前ヨリホーキ星出ル事初テ見及候、先年出候通西ノ方へ出ルナリ、七ツ時分ヨリ田中氏被参、誘ニ寄高輪(東京部)邸中原周介殿へ差越、夜五ツ比迄相話帰候事、

廿七日 雨

七ツ時分ヨリ久坂氏被参、無程大野氏モ被来候、義士ノ墨摺ナト贈被呉候、酒ナト馳走イタシ、夜六ツ半比ニ被帰候事、

廿八日 晴

七ツ半比ヨリ寺師氏同道ニテ、隅田川へ参り、川開(従来定日)キノ景氣トモ見物イタシ、暫茶店ニテ相休ミ、暮過ニ帰候事、

四二三 異国人殺害セラル

廿九日 晴

夜前片丁寺内へ異人参居押込候ヨシ聞及、尤先比打果候一条モ云々(東福寺カ)(本藩人ニ嫌疑アリ、樋渡・神田橋モ嫌疑者ノ中ニアリシト)

吉田参候段西向ヨリ申来、飛脚立ニテ仕舞候テ差越、左候テ久坂ノ方ヨリモ昨日中参居候故、彼ノ方へ赴キ暮過ニ帰、田中氏出立ニ付立寄、五ツ過ニ帰候事、

晦日 晴

段々ノ客人有之候故、七ツ時分ヨリ櫻田長邸へ差越、旁ノ談合暮過ニ引取、夫ヨリ内田氏へ約束有之、立寄候処他出ノ由、尤時刻モ遅ク相成ヘクニ付帰候事、

六月

朔日 晴

七ツ半比ヨリ久坂氏へ赴キ候へハ、大野士モ被参居、暮過ニ帰候事、

二日 晴

八ツ半比ヨリ約束ノ四谷梅樹亭へ差越候へトモ未参、余程深山ノ場所ニテ、庭中ノ詠モ有之、暫相待候処、美農邊士・大野士モ被来、旁モ畢、馳走ニモ預リ候テ、邸ノ様帰候事、

三日 晴

夕方ヨリ湯へ参り、五ツニ帰候、

四日 晴

七ツ半比ヨリ櫻田邸内田へ差越、益満へモ立寄候処、暮ニ相成夜入過ニ帰候事、

五日 晴

早朝ヨリ高輪御道具虫干(別邸)(御数寄屋)ニ付差越、七ツ

半時分ニ引取、帰ニ湯へ入涼ナト致、夫ヨリ西向へ立寄候処、大野士被參居五ツ半比ニ帰候事、

六日 晴

暮前ニ湯へ參、直ニ帰候事、

七日 晴

七ツ時分ヨリ櫻田長邸へ赴キ、暫相待、桂子〔本戸孝丸〕帰旁ノ事モ畢、馳走等モ有之、夕方ニ引取、西向へ立寄候テ帰候事、

八日

七ツ比ニ雨降コ、ロ能候、高輪福壽亭ニテ虫干有之、早朝ニ差越候、中原周子〔周介尚禮〕へ立寄、慶元記借候テ、相暮レ日入過ニ仕舞帰候、湯へ入大野来ノ内約急キ相帰候へトモ、終ニ不見得候、町田被參候故同道ニテ涼ニ出、西向へ參リ五ツ過ニ帰候事、

九日 曇

此已前ヨリ知己ノモノ舟ヨリ參候トテ、先日ヨリ參、着ナト持參致與、今朝モ參リ最早七十二至レリ、面白シ常ナラヌ事奇特ノ事ト存候、七ツ比ヨリ大野子被參、暮過ニ被帰候、汾陽へ差越夫

ヨリ日下氏へ立寄帰候事、

十日 晴

七ツ過ヨリ〔万壽〕永山同道ニテ歩行、五ツ過ニ帰候事、

十一日 晴

早朝ヨリ高輪虫干へ差越、日入比ニ仕舞引取候テ、夫ヨリ長邸〔東京都港区〕麻布へ赴キ、會津藩被參居廣田富次郎ト申方ニテ致面會、暮過ニ引取、月モ照涼候、西向へ立寄候テ五ツ半比ニ帰候事、

十二日 晴

西向彼ノ宅へ長藩時山被參差越、チト御門ノ都合モ有之候テ、一先相帰候処、出事不叶故、形行ヲ以斷申越候事、

四二四 日下部ノ家族時山其他ト舟遊

十三日 晴

今朝西向へ時山〔直養〕參リ、愈企ノ事申来候段申參候付、其含ニテ致都合候処、汾陽氏ヨリ柴田〔東五郎〕来候ト申參リ差越候テ、幸相誘候処可差越トノ趣ニテ、直ニ日下氏へ赴キ右ノ事トモ承リ、左候テ町田・木藤士モ誘ヒ、八ツヨリ直ニ鹽留〔東京都港区〕迄差越候へトモ、最早舟ノ都合モ致被待

居候付、急キ舟ニ乗り、(江東区)深川ノ内長州邸余程広キ所ニ

テ、庭中ナト拝見致シ、久坂ナト迎ニ被參居候テ、無

抛桂士并ニ矢野氏モ被參、段々ノ馳走ニテ暮迄興ヲ催

帰候処、時刻モ如何ト申所ニテ、久坂ナトノ世話ニテ、

永代橋ヨリ舟ニ乗り、金杉迄イツレモ參リ相別レ候、

(御庭入足)喜平次モ列行候、同所賑々敷事ニ候、月モサヘ候ヘハ

詠イワヌカタナシ、

舟のうちにこゝろの友とかたちらひて

月をみるにも嬉しかりけり

四ツ前ニ帰候事、

十四日 晴

高輪虫干詰ニテ、五ツニ西向ヘ立寄差越候テ、暮前ニ

帰リ候、西向ヘ差越候ヘハ、大野氏被參居五ツ半比ニ

帰候事、

四二五 水戸藩士邸門ニ屠腹ス

十五日 晴

今日四ツ時分、水府浪人ト申テ西御門ヘ參リシフ計ニ

付、混雜ノ訳有之遺憾千万ニ候、不得已次第、撃ニ堪

兼候テ、夕方ヨリ黒田(清橋)同道外出致候事、

四二六 神田橋某忌諱ニ触レ帰国セシム

十六日 雨

今日ハ何方ヘモ不赴候、夜前帰リニ西向ヘ立寄候、同

志ノ面々被參、神田橋國ヘ帰リ候訳合有之(攘夷云々ノ

嫌疑ナリシト云)、今晚饑別ノ心ニテ酒トモ汲候事、

十七日 晴

高輪虫干ニテ早朝ニ差越候、帰ニ目黒ノ様參リ暫涼候

テ、帰掛ニ西向ヘ立寄候処大野被參居、尤桂・久坂ナ

ト被參候由候ヘトモ、早被帰候段承リヌ、水戸ノ一条

世話敷事ニモ成立承リ候テ、五ツ過ニ被帰候事、

十八日 晴

七ツ比ヨリ久坂方ヨリノ伝言モ有之、差越候テ例ノ馳

走ナト有之、夜入過ニ引取、月モ光候テ涼シクモ有之、

日下氏ヘ寄候テ五ツ過ニ帰候事、

十九日 晴

高輪詰ニテ早朝ニ出掛、七ツ半時分ニ帰候、日下家内

衆ヨリ品々被贈、返シニ白砂糖遣シ候言葉ニ、

すこしとてこゝろはかりのしるしとや

ふかくも君にしらせてしかな

夕方ヨリ致歩行、帰ニ日下氏へ寄り五ツ過ニ帰候事、

四二七 日下部家族帰国ヲ望ム及ヒ和歌

廿日 晴

外出不致候処、西向ヨリ喜平次使ニテ一書参リ、先日ノ返歌、

しら雪にそふて仰せし言の葉の

きみのこゝろそうれしかりけり

トテ、被申越候故、返答ニ早ク御国へトオモフアマリ

ニ、

物おもふやかても早く難波への

心つくしを君に見せなぬマ

廿一日 晴

八ツ半比ヨリ永山同道ニテ致歩行、五ツ過ニ帰候事、

四二八 樋渡神田橋ノ二名大廻船ヨリ帰国セシム

廿二日 晴

高輪虫干ニテ、五ツ前(穴左衛門)ニ伊集院所へ差越、今朝中急キ

着ニテ、日下氏下リノ事申来 (久光公・山田壮右衛門賜

書参看) 則立寄、右ノ一条相通候テ、日入時分高輪引

取帰候テ、又々西向へ差越候処、愈御達ノ事ニテ内祝

トモ有之、左候テ關山氏へ参居候神田橋、又ハ指宿ノ樋(五)

渡モ、不事ニ舟ヨリ御帰シニ相成、別レトモ致候テ酔

候余リノ所ニテ、余程西向ニテモ過候テ、興ニモ相成、

五ツ過ニ帰候事、

廿三日 晴

久坂参候段申来、四ツ過ニ差越八ツ過ニ帰候、又々夕

方ヨリ差越候処、金ナト仕廻料ニ被相下、仕合ノ事ニ

モ相成候、五ツニ帰候事、

廿四日 曇

今朝柴田方ヨリ吉田使ニ相来ルトノ趣申参、則赴キ、

八ツ前ニ帰候事、

廿五日 晴

肥藩平山来七ツ比ニ帰ル、橋口ニモ参候ニ付、夕方ヨ

リ同道ニテ致歩行、帰ニ日下氏へ差越候処、客来モ有

之、五ツ過ニ帰候事、

廿六日 晴

今日モ西向へ差越居、夕方ニ帰候、

廿七日 晴

時山来候段西向ヨリ申参候ニ付、都合致七ツ過ニ差越

候へハ、町田氏被参居、左候テ暮前ヨリ大野氏モ被来
幸ノ事ニテ、五ツ時分ニ帰候事、

廿八日 晴

高輪虫干詰ニテ品川ヨリ差越、帰ニ致歩行日下へ立寄
帰候事、

廿九日 曇

柴田西向へ来、暮ニ帰ル、

七月

朔日

三日

今日ハ松元〔勤兵衛〕・久保田へ饒別ノ企有之、〔東京都品川区〕鮫洲へ八ツ後ヨ

リ差越暮ニ引取、西向へ差越候処、大野・吉田参居、

五ツ過ニ被帰候事、

四二九 水戸藩士三十七名帰邸ス

四日 雨

今日ハ水戸三十七人ノ方、国許へ引戻ノ内意候処延引

相成候、右ニ付久坂〔通武〕・時山〔直義〕ナト度々参ナリ〔久光公山田〕

仕右衛門へ賜書「第三卷ニ在リ」、及ヒ安田助左衛門日記参

看

五日 雨

今朝三十七人、四ツ過ニ田町邸繰出、小梅ノ屋敷へ贈
付相成候事〔警衛行装等第三卷ニ記ス〕

六日 曇

今日ハ久坂所へ差越旁嘶モ面白、暮過ニ引取、西向へ
寄候テ五ツ過ニ帰候、

去ル廿六日、御国ヨリノ飛脚黒江氏着、書状モ参リ、

兄君始孝心ニテ、

先公御召仕候処、其後彼はニテ、〔山田・近藤等内記〕近比又々御広敷番ノ

頭被仰付、左候テ

君公別段ノ 思召被為在 孝心ノ者

御対面所へ御呼、御見被仰付、銀式枚被下候段申来、

誠ニ以難有次第奉恐歎候、

七日 曇

今日モ出勤致候、

天の川渡るおふよの嬉しきは

〔通〕
むすふせの絶すもあらなむ
本ノマ、

九ツヨリ邸中廻リ、夫ヨリ關山所ニテ暫相話、西向へ
参リ、御留守居方ヨリ汾陽・左近允へ、久々ニ疎遠故
見舞、家内衆へモ緩々逢候テ、日下部氏へ差越候へハ、

柴田ヨリ使ニテ、吉田氏被参居旁承り、暮前ニ被帰候事、

八日 曇

高輪虫干へ差越候、松元勤^(勤兵衛)出立ニ付、中途迄贈ニ差越候テ、暮過ニ引取、日下氏へ寄候テ帰候事、

四三〇 久坂玄瑞攘夷ノ歌

九日 晴

追々客来ニテ、七ツ過ニ町田氏被来、同道西向へ差越、五ツ過ニ帰候事、

先日日下氏ニテ、長州時山・水大野被来酒会ニモ及候テ、桂・久坂ノ方へト申遣シケレハ、久坂ヨリ

もろともいさ碎むと大丈夫の

大和こゝろはいと、嬉しき

十日 曇

今日ハ相馬藩大越才次郎ト申方被参、暮ニ被帰候、^(新八郎)益^(郎)満モ参候へトモ、用向有之トテ早ク帰又、

十一日 曇

高輪虫干ニテ早朝ニ差越、^(橋田)帰掛木原へ立寄候処、^(平九郎)平山ニモ参り暮ニ引取、夫ヨリ西向へ寄り候テ、五ツ半比

ニ帰候事、^(尚綱)昨日中原モ来候事、

十二日 曇

今日外出不致候へハ、町田氏被参写本ナトイタシヌ、

十三日

九ツ過ヨリ町田氏同道ニテ大圓寺^(東京都港区、現在杉並区にあり)へ致参詣、夫ヨリ古川町ノ様廻り、日下ノ廟ニ参、帰ニ西向へ寄候テ、色々ノ馳走有之、五ツ過ニ帰候事、

四三一 樺山資之久坂玄瑞等柴田東五郎力宅ニ会

ス

十四日 曇

四ツ過ニ^(栄次郎)吉田子柴田ヨリ使ニ被参、急用ノ趣ニモ被察候故、直ニ出掛、久坂ノ所へ寄り候へハ、寄合ノ所ニテ酒ナト被進候へトモ、久坂誘引致、大塚ノ様差越、彼是談合暮前ニ引取、西向へ寄り候テ、五ツ半ニ帰候事^(義孝云々ノ議ナラン、寺師宗道日記参看)

十五日 晴

暮過ヨリ湯へ参り帰候事、
十七日 晴

虫干詰ニ候ヘトモ、日下氏へ立寄、木藤氏同道ニテ古川へ参り候へハ、久坂・時山・佐々木モ参り中途迄同道、相別レ候テ高輪へ差越シ、夕方ニ引取、夫ヨリ月見トモ致帰候事、

十八日 晴

今朝モ町田氏被参候、喜平次モ参也、

十九日 晴

大野士来、暮ニ帰也、昨夕方ニハ日下部氏家内衆企ニテ、町田六殿誘廣尾草庵へ赴キ、月見トモ致、殊更静ニテ、虫ノ音ノミ立、影ナツカシク世ヲ忘ル、計、一面

白カリケレハ、

秋のよハさひしきものを虫の音をものかなしくも

聞もかなしき月の影哉さひしき

秋のよはかなしき物としりなから

ともに嬉しき月をみる哉

秋のよハさひしかりけり鳴虫の

声もかなしき月の影哉

憂事も更に忘れて秋の夜の

さやかに照す月を見る哉

最早時刻モナリヌレハ、五ツ半比ニ帰侍ル、

二十日 晴

高輪詰候ヘトモ頼置、西向へ久坂来差越、八ツ前ヨリ(茂志)美野邊ノ方へ約束故、廣尾東源亭へ赴キ候処、相待被下シニ、フシ見辺迄トノ事被申置シト聞ケレハ、暫相待侍ルニ、無程被参彼是ト談合、遠方事トテ夕方ニ被帰候、拙モ稲穂ノ景色見侍ラント致歩行、諸方廻り候テ月モサへ、五ツ半ニ帰候、

廿一日 晴

大野来、日下氏ニテ四ツ前ニ帰候事、

廿二日 晴

未明ニ久坂・時山(直養)へ参り、夫ヨリ高輪へ越候テ、帰り

ニ西向へ立寄候処大野来居、旁ノ事談和ニ及、五ツ比(甚)

ニ帰候事、

廿五日 晴

日下氏へ吉田氏来候段申参候テ差越、五ツ半比ニ帰候

事、

廿六日 晴

今朝久坂西向へ来り四ツニ被帰候故、夫ヨリ高輪虫干ニ参り日入時分ニ仕舞、寺師(宗道)・高島同道ニテ目黒ノ様廻り、帰掛ケ時山へ行逢、日下氏へ立寄候テ、四ツ前

二帰候事、

廿七日 晴

夕方ヨリ久坂へ参り、夜入過ニ帰り、西向へ立寄候テ、五ツ半比ニ帰候、

廿八日 晴

吉田日下氏へ来書面来、暮過ニ差越候テ、五ツ過ニ帰候事、

廿九日 晴

今日飛脚立ニテ書状トモ仕舞ヌ、(万喜)永山誘外出致、

晦日

同宿中企ニテ鮫洲へ赴キ候事、(東京都品川区)

八月

朔日 晴

川上(久美)大夫へ見舞、中山次左殿(文左衛門)・益満新殿(新左)へ同断、(金生)關山

殿へ用向有之、帰掛ニ日下氏へ差越用事仕舞、七ツ過

ヨリ同役中ノ誘ニ寄鮫洲へ出張、暮ニ引取、西向へ立

寄候テ帰ヌ、久坂来候由ナリ、

四三三 樺山資之帰国準備

二日 晴

(船国ヲ云)交代ニ付取込故、(港区)麻布へ一封遣、返答ニ寄、去ル廿一日上巳一条ニ付テノ人数、(宛別)所置相成候書付等参候、

三日 晴

五日 晴

今朝ハ時山士来、(真徳)六戸九郎兵衛殿帰国ニ付、鮫洲迄見舞贈ニト参リ被呉候ヘトモ、(ママ)迦兼候テ甚意恨ナカラ無

是非候テ行ヌ、九ツ時分ニ相馬藩大越、外ニ長藩始テ面会ノ方同道ニテ被参、取込候故緩々不相叶、日下氏

マテ吉田モ来候段申参候ヘトモ、是モ不叶次第二候、

暮過ヨリ西向へ差越候事、

六日ヨリ

七日マテ

高輪御藏御次渡ニ付差越候、寺師同道ニテ目黒ノ様廻リ、暮方眺望一入コ、口慰候、夜入過ニ西向へ立寄候

一事、

四三三 樺山資之還俗ノ意旨

九日 雨

今日モ帳面首尾ナトニテ外出、尤久坂ノ方へ用向有之候ヘトモ、(兼通)迦事モ不叶、カネテ好マヌ勤場不得止、母

君ノ為ト鬱事モ多ク過シ侍リヌ、

十日 雨

今日モ長詰ニテ候処、大越士被參幸ノ事候テ、益満へ申込久坂ノ方へ案内致、七ツ半ニ退出候テ直ニ差越、時山士所ニテ相慚、夜五ツ前ニ帰候事、

十一日 雨

大謙来候段西向ヨリ申參ル、時山氏モ被參四ツ前ニ帰候、

十二日 雨

昨日約束致置候故、五ツ時分ヨリ赤坂ノ如ク差越、相待居候処、無程美野邊(邊部)・大謙モ被来、彼是トイタシ、八ツ比ニ帰候、夕方ヨリ日下氏へ參候へハ、最早久坂士モ被来、九ツ過ニ帰ヌ、昨夜日下氏裕(裕)之進殿石碑下書ナト致、大謙へ頼候事、

十三日

十五日 夕方ヨリ晴

同宿ノ企ニ寄料理店へ差越、余程月モ照渡リ、帰ニ日下氏へ寄、祭ノ馳走ナト有之、歌ナト興ノ余リニノブルノミ、

よひのまはなくさむまでのこゝろにて

さやかに照す月の影かな

よひの間は月にこゝろもなくさめて

うきをわするゝこゝち社すれ

イツレモ興ヲ催シ、賑々敷話ナト不思時刻モ過ヌレハ、家内ノ方兼テ案内モ有之事ニテ、四ツ時分ト聞ケレハ、シハシト被止候へトモ帰候事、

十六日 曇

日下部氏へ吉田来候テ差越、廣尾辺へ企致置候故同道ニテ、予ハ麻布久坂へ參リ、時山ニモ誘候テ、梅本ノ様差越候へトモ、イツレモ遅々ト被待居、町田氏兄弟・木藤氏・日下ノ家内衆ニテ、賑々敷興ヲ催シ、五ツ半比ニ帰候事、越後ノ藩話(藩話)ニ、謙信遺風ノ事承候処、纒ニ車廻シト申テ、百姓田地耕作ニ付、年々繰廻ニテ作致候事ニテ、面々受持ノ地ニテ無之故、互ニ讓ル事ハ不叶、売買不致様ニトノ所ヨリ、斯ク定シト也、面白事故記置ヌ、

十八日 晴

夕方ヨリ久坂へ參リ、五ツ過ニ帰候、

十九日 晴

土州ノ藩池某被来感佩ノ事候、七ツ過ヨリ大越氏ナト

被来、暮ニ被帰候故、向邸へ赴キ候事、

二十日

同大越来、益満モ参候、夜入過ヨリ日下氏へ越候事、

廿一日 曇

七ツ過ヨリ町田氏誘、西筑殿へ用向有之差越候へトモ、
(筑左衛門、當時留守居也)

留守居夫ヨリ直ニ大越へ参り、時山所ニテ相話シ、五
ツ時分ニ引取、向邸へ立寄候事、

四三四 樺山資之長藩周布政之助ニ会ス

廿二日 曇

今日ハ久坂士周旋ニ寄、彼ノ藩周布政之助ト申方要路
(兼寛)

ノ人ノ由兼テ承り、然ニ臺町辺ニテ一会ト申事候処、
(久坂力)

今朝日下来、同道ニテ四ツ時分ヨリ差越候へハ、最早
被参居候、終日緩々深談詩ナト被贈候、サスカ面白且

頼母敷事トモニ候、暮過迄相話帰候、日下氏へモ立寄、

汾陽氏へモ見舞候へハ、久々振ニ面白トテ頻ニ被留、

五ツ過ニ引取候事、

廿三日 雨

廿五日 雨

七ツ過ヨリ日下氏へ参候へハ、土州藩大石・島村ノ両
(元惣) (重隆)

士被来、五ツ時分ニ帰候事、

廿六日 晴

昼後ニ久坂被参、同道ニテ向島大橋へ参り、熟談ニ及
(墨田区、正頼)

夜入過ニ帰、飯料理ノ馳走ナト有之、尤日下同藩榎崎・
(親包) (清徳)

清水ナト塾所へ立寄候へハ、蕎麦ナト被出、帰ニモ寄
候テ五ツ半ニ帰着候事、

廿七日 晴

四ツ過ヨリ椋木士被来、久坂ニモ来、暮前ニ被帰候、
(兼徳)

橋口同道ニテ致歩行、彼是ノ事モ有之、相談ノ一条候
事、

四三五 樺山資之高知藩武市半平太ニ会ス

廿八日 曇

内約ニ付、土州武市半平太殿・島村英吉四ツ過ニ被来、
(小橋) (勉)

武市士ハ始テ面会ノ事候処、余程ノ人品ニテ面白シ、
(谷) (山)

八ツ前ニ被帰候、七ツ比ヨリ町田同道ニテ、鹽屋甲蔵へ
(形) (七) (清徳)

差越、暮過迄相話シ、帰ニ向へ立寄候へハ、時山・佐
(實) (力)

々木被参居、五ツ過ニ帰也、

廿九日 雨

時山士へ約定ニテ、八ツ時分ヨリ差越、夫ヨリ同道安

(衛息軒 飯肥齋儒字也)
井仲平へ赴キ暫相話シ、日入比ニ引取帰候事、

文久元年八月廿九日終

四三六 樺山資之日下部家族ト帰国ヲ命セラレ

菊月九月

朔日 晴

此節日下家内立候事ニ付、今後川上家始其外見舞等ノ儀有之差越候、(筑右衛門)元光通西筑・汾陽櫻田長邸へ差越、(備前)長州藩士大和氏所(木下)水戸藩士、岩間殿之(高政、長州藩士)へ桂・水岩間モ参居、(高力)小幡・馬突士モ被参、暮過迄相話帰候事、

二日 晴

(次左衛門)今朝伊集院・汾陽日下ノ所へ差越候事、昼過ヨリ久坂へ差越、土州武市・大石モ被来居、(兼書)周布氏へ赴キ桂ニモ来、五ツ過ニ帰日下へ立寄候事、

四三七 樺山資之帰国出願

三日 曇

(字次郎)大越士来、今日予出立願書差出候、

四三八 武市半平太帰国

四日 晴

今日汾陽へ柴田来ト申来差越、暮前ニ帰候へハ、土州武市士帰国ニ付、立寄候トノ事、暫心待候へトモ遅刻ニ相成故ニテ、残念ノ事候、尤同宿中ヨリ饒別ノ企モ有之候へトモ、終ニ行事不叶、亦々西向へ差越、柴田モ帰候ニ付、五ツ半比ニ引取候事、

五日 晴

久坂へ赴キ、五ツ時分ニ帰也、

六日 晴

今日ハ王子飛鳥山辺へ、(東京都北区)水美ノ邊・阿間子・大野ナトノ約束ニテ、尤前晚ヨリ、日下部ノ家内柴田迄出掛ニ相成居、四ツ前ヨリ町田同道ニテ久坂相誘、夫ヨリ柴田所へ立寄候へハ、最早差越候由ニテ直ニ赴キ、始扇屋へ出掛候へトモ、水人故障ノ訳ニテ海老屋へ参居候へハ、無程水ノ方々モ被来、余程賑々敷、左候テミノ、阿間子両士モ来ル、十一日方帰国ノ由、久坂ニハ明日上京ノ事、予モ近々立帰ノ事ニテ、送別ノ事サスカニ名残リノ袂カクヤト、サマサマト思ヒアワスル事多ク、最早暮ニ相成、久坂ニハ先へ帰リ候テ、暮ニ予ナトモ引取、イツレモ跡へ被残居、五ツ過ニ帰着候事、

四三九 樺山資之別離ノ歌

七日 晴

昨日ノ興、別レヲオシミテコ、ロノミ贈リヌレハ、
かゝるよに何しのふらぬ大丈夫の

御国の為に尽す身なれば

わかるとも頼て都のさかりなる

花の錦をともに見んとは

かならずとたのみしものをはるゝと

道もいとほてゆかましもを

今日ハ周布士・久坂ニモ出立ニテ、時山来候ニ付、折
節土州大石モ参合、直ニ鮫洲ノ如ク参リ、川崎屋ヘ立
寄候テ、梅屋敷マテ贈リ、中途サマサマ勇々敷振舞ニ
テ面白、亦々川崎屋ノ様来リ、暮ニ帰候事、
長州ノ藩モ多ク被来、弊藩新納忠元主ノ(肥後ノ加藤来ルナラバ云々)肥後歌ナト頻
ニ被望大キニ愉快、誠ニ頼母敷次第ト言フヘシ、

八日 雨

橋口来、心付ノ一条ニ寄四ツ比ヨリ同道、越ヘ赴キ石
原ヘ面会、外ニ他出等ニテ不叶、昼過ニ帰候、
同宿、今日立ニテ贈ニ中途迄差越候事、

九日 雨

九ツ過ヨリ日下部氏ヘ差越色々ノ馳走モ有之、折カラ
侍リヌ、

けふといへは殊更酒もくまれば、

祝ひまつらんしら菊の花

十日 雨

大野来ト申来、差越候、神明前迄差越帰候事、

十一日 雨

時山来桂ノ一封持参、八ツ前ヨリ橋口モ誘、櫻田桂士
方ヘ赴キ、近々鎌倉辺(神奈川県)ヘ発行ノ由ニテ、稍事モ畢馳走

取々被致、都物国産トテ被贈候テ、暮ニ帰候事、

十二日 晴

九ツ過ヨリ、土州下邸渡邊彌久馬ト申方ヘ用趣有之差
越候処、繁用ニテ逢兼空敷帰候テ、日下氏ヘ立寄旁用
向モ有之、五ツ過ニ帰候事、

十三日 雨

今朝モ用向ニテ致外出候、左候テ(田代)従弟清左衛門殿今日
着ノ段申来、町田氏同道ニテ鮫洲迄迎ニ差越、外ニモ
追々迎ニ被来、暮前ニ引取、左候テ同郷ノ人数ヨリ、
予饒別ノ企ニハ、帰ニ立寄五ツ過ニ帰候事、

四四〇 樺山資之橋口傳藏久保田治部右衛門ヲ訪

フ

十四日 晴

今朝肥薩木原橋太殿帰国ニ付、暇乞トシテ被来候、八
ツ過ヨリ橋口氏同道ニテ、(東京府豊島区)巢鴨ノ内久保田治部右衛門
老へ差越、久々ニ面会イタシ殊ノ外深話ニ及、(水戸烈公ヲ云)老侯ノ
御書ナト拜見、不思日モ暮候へハ楼座ニ月照渡リ、尤
山中ニテイワヌカタナキ絶景、稍世ヲ忘ル、心地ナリ
キ、手品ノ料理ニテ馳走ナト被致、書トモ被贈、夜入
過ニ帰候事、
深山ノコ、ロニモナリ侍リテ、

別れにし事も久しきけふはまた

むかしかたりに日も暮にけり

嬉しくも君かすみにし軒端より

影もさやけき秋の夜の月
影もさやかに月を見る哉

十五日 晴

汾陽氏企ニテ、四ツ時分ヨリ田中正之進殿同道致、柴
田へ立寄候へハ、最早先へ被行候トノ事ニテ、王子扇
屋へ参り候へハ、被待居候、饑別ノ趣ニテ緩々致シ、

(玄兵衛)

日入前ニ引取、野口氏へ暇乞ニ参リ、夫ヨリ亦々柴田
方へ寄候テ、外ニ用事モ有之、汾陽氏ナト被居候へト
モ、予ハ駕籠ニテ急キ帰候事、

四四一 樺山資之日下部家族ト有村次左衛門等ヲ

千住回向院ニ拜ス

十六日 雨

四ツ前ヨリ、日下部様モ町田氏金杉ヨリ舟ニテ淺草迄
(荒川区)参リ、夫ヨリ千住回向院へ参詣イタシ、大野士ナトモ
被参居、最早有村ノ所モ仕抹ノ事故、稍安心ニモナリ
又、婦ニ音羽氏へ参り候へハ、婦人ノ方ナト欲ニテ色
々馳走ナト有之、暮ニ引取五ツ過ニ帰着ノ事、

十七日 晴

(東京都港区)

(伊三次父子)

八ツ後ヨリ古川へ差越、日下部亡親ノ石塔建ニテ、七
ツ半比ニ相濟、夫ヨリ町田氏同道ニテ東源亭へ饑別ノ
企有之差越候へハ、中原(周介)・内田(政忠)・黒田(備前)・木藤(市助)・有馬(重徳)・
町田兄弟・田中ノ面々ニテ賑々敷、夜入過ニ引取、拙
ニハ川上式部殿ヨリ饑別ノ事承置候ニ付差越候へハ、
(光通)汾陽・伊集院・中原猶被参居、段々馳走ニテ晰ノ趣モ
有之、反物ナト被贈候テ九ツ時分ニ帰候事、

四四二 樺山資之寺師宗道内田仲之助日下部ノ家

族ヲ訪ヒ尋テ平田鐵胤ヲ訪フ

十八日 晴

八ツ過ヨリ内田・寺師相誘日下部氏へ立寄候へハ、音羽氏婦人ニモ被来、時山・大野モ同断、右ノ訳ニテ直ニ菊池容齋へ差越候処、未画出来無之、平田内蔵之介殿へ見舞、暇乞ニテ酒ナト被出、日入前ニ引取向島大橋へ暇乞、尤用向モ有之、暮ニ帰候事、

十九日 雨

關山氏(金生)・伊集院ノ企ニテ、相摸橋亭へ八ツ半比ヨリ差越、東郷氏モ来餞別ノ一興ニテ、五ツ前ニ帰、日下部氏へ寄候テ帰候事、

二十日 雨

同志ノ面々飯料理ノ馳走ニテ、彼是仕舞等モ有之、邸中暇乞ニト廻リ、日下部氏へ見舞候へハ、段々ノ客来ニテ直ニ引取、中山次左衛門殿へ暇乞ニ差越候へハ、伊勢ノ櫻井来居歌ナト送り候、次州ヨリ餞別品ナト被贈帰候へハ、段々ノ客人ニテ、仕舞方等ニテ夜更ニ及候事、

四四三 樺山資之日下部家族帰国ノ途ニ就ク

廿一日 晴

四ツ過ニ御屋敷ヲ出、鮫洲村田屋ノ様来ル、イツレモ被来候人数ニハ、柴田(東五郎)・長州時山(直巻)・佐々木也、川本・土州大石士(元政)、同志中ニハ町田兄弟(新八郎)・木藤(有馬)・永山・毛利(利忠)・川路・森(信助)・左近允(筑右衛門)・橋口(兼徳)・江夏(左衛門)・音羽(田代)・従弟清左衛門イツレモ深切ノ事候、蒲田梅屋敷又ハ川崎迄被来、鎌田ニハ中途迄、左候テ長州清太郎殿(清水親恕)へ逢幸ノ仕合、途中ナカラ相嘶別レ候、關山・伊集院ニハ川崎迄来居、イツレモ暮前ニ被帰候事、

廿二日

今朝五ツ前ニ川崎ヲ打立、藤澤迄来止宿候事、

四四四 樺山日下部途ニ鎌倉ニ遊フ

廿三日 晴

曉七ツ時分ニ仕舞、日下部家内衆ノ見物ニテ鎌倉へ差越、中途ニテ夜モ明五ツ前ニ参着、八幡宮へ参詣、(初代島津)忠久公御廟へ拜シ、夫ヨリ麓茶屋へ相休ミ、又々江ノ島ノ如ク廻リ、昼飯ナト喰、日入時分ニ藤澤ノヨリ帰

候ニ付、今晚迄滞在止宿候事、

廿四日 晴

藤澤ノ宿ヲ未明ニ打立、日入前ニ小田原ノ宿へ着、途

(神奈川県)

中ニテフシノ見ヘケレハ、おまつ女ウタナドヨマレ、

(目下部翼徳)

返シニ、

曇りなき富士の高根を詠むれハ

心嬉しきあけほのゝ空

トカ読ケレハ、返シニ、

朝ほらけさすかに君か言の葉は

やさしき富士の姿なりけり

かたらひて供に嬉しき旅なれば

雲井も晴し富士を見るかな

憂事を忘れたまへとけふよりは

君かこゝろをなくさめぬとは

廿五日 晴

五ツ前ニ打立チ箱根越候処、女衆ノ駕籠ニテ隙取、埒

明兼候故、ハタ宿へ来候へハ、日モ傾キ不得止当宿へ

止候事、

廿六日 晴

箱根ハタ宿ヲ未明ニ打立、日入過ニ吉原へ着止宿候、

(静岡県)

(同上)
三島駅ニテ長州利助君へ行逢旁承候、御国ヨリノ飛脚

未通路無之段承及、一封江戸へ遣候内ニ、従弟清左衛

門并龍悦・益満へ遣候言葉、左ニ記置ヌ、

(宿題)
(新八郎)

かならずと尽す道にもこゝろせよ

君につかへし我身ならずや

右従弟ナトへ、

たへすとてかりにも道を迷はなむ

君のこゝろをかねてしりせは

暁カタニ、常陸ナル藤田へ久々ニ逢シト夢ナト見侍り

(東湖)

テ、ヤ、ムカシノ事シノハレ嬉シカリケレハ、

むかし我逢みし人の面影を

夢さへ見ても嬉しかりけり

過し世の人の倂夢にさへ

見るもさめては悲しかりけり

空モアカクナリケレハ、鳥ノ鳴ヲ聞テ、

ほのゝとふしの高根もみへそめて

明行く空に鳥の音ぞ聞

そなぐらん

廿七日 雨

未明ニ吉原ヲ打立、フシ川ニテ夜モ明ケ、薩埵ニテ昼

飯、七ツ過ニ駿河府中へ着致候、日下氏知己ニテフシ

(静岡県)

権現社中筑地三郎四郎ト申方へ申遣シ、直ニ被来面会
候へハ、先年一座致候方ニテ、久々ノ話トモニ夜更
ニ及被帰候、

廿八日 朝雨

四ツ過ニ空モ晴上リ候、

旅宿ヲ出立富士権現へ参詣、筑地氏ノ所へ寄り、酒ナ

ト馳走ニテ深切ノ事候、左候テ無程引取、阿部川迄被

贈、茶店ニテ別レトモ致シ、夫ヨリ宇津ノ山ヲ越ルト

テ、

宇津の山いくたひ越てけふもまた

過しむかしのしのはれにけり

〔豊岡集〕
島田ノ宿へ夜入過ニ参止宿候事、

廿九日 晴

未明ニ打立、大井河打渡リ、暮前ニ見附ノ様着致、止

宿候事、

晦日

見附ノ駅ヲ未明ニ立出、天龍川ヲ越、舞坂ヨリ舟ニテ

荒井へ着、婦人ノ方ナト関所ニテ改有之、例ノ田代佐

兵衛所へ立寄、馳走ナト有之、謝礼トモ致無程打立、

白須賀駅ヨリ夜入、二川迄参リ泊リ候事、

十月

朔日 晴

昨日細川侯御供ニテ、津田土濱松・舞坂ノ間ニテ行過、

面会ノ事モ不叶、乍思打過候、

一昨日御国ヨリノ飛脚神へ見附ニテ行逢、一封相頼候

事、

今日中途ニテ村上彦七へ逢、江戸へ下リニテ、鳥渡聞

候迄ニテ別レ候事、

二川眺ニ打立、日入比ニ岡崎迄来止宿ノ事、

中途ニテ駕籠ノ内ヨリ諸方見得渡リケレハ、

打わたす秋の田面の賤か家に

煙たちそふ明かたの空

高雄なる紅葉の色そなつかしき

猶いそかるゝころなりけれ

あさなく旅路詠のかわるかな

更にくまなきこゝちこそすれ

木の葉敷嵐の音の寒けれハ

さひしき秋のけしきなりけり

足引の山田の面に霧たちて

こゝろとゝめぬ明かたの比

二日 晴

岡崎宿ヲ夜明ニ打立、昼過ニ尾州宮ノ様着、(愛知県名古屋) 日下氏家内ノ方ナト事ノニテ、(同上) 熱田宮へ参詣イタシ、例ノ通亭主ヨリ酒ナト出シ候故、取ハヤシ相休ミ候事、

三日 晴

今朝五ツ前ニ打立出帆致候処、順風ニテ八ツ過ニ桑名(三重県)ノ様着、直ニ通行候テ、焼貝ナト中途ニテ喰ヒ、夜入過ニ四日市へ着、致止宿候事、(同上)

四日 晴

未明ニ当所打立、荷物類ハ足輕田中清兵衛相付、關ノ様相廻、拙者ナト家内衆下人迄、五人列ニテ伊勢ノ様相廻、伊勢ノ津へ至、夫ヨリ雲土ト申セシ所へ参候へハ、夜入過ニ相成止宿候事、(同上)

五日 風雨

今朝早目ニ出立候処、中途ニテ雨風強ク、逆モ行兼候故、松坂へ昼時分ニ着、空敷日ヲ送り相宿リ候事、(同上)

六日 晴

夜中ニ雨モ晴、六ツ過ニ打立、昼比ニ大神宮へ拜シ直ニ帰候処、暮ニ相成宮川越候へハ、櫛田川夜越難成ト申セシ故、手前アヒノ宿へ相休ミ候事、(同上)

七日 晴

未明ニ立出、松坂ノ宿へ立宿、夫ヨリ津ノ宿ニテ女衆馬ニテ、予モ打乗、終ニ夜入候テ五ツ過ニ關ノ様出、亭主ヨリ待受ノ馳走ナトイタシ、追々賑々敷事ニ相成、祝ヒノ心持ニテ取ハヤシ相休ミ候事、

八日 晴

早朝ニ出立、鈴ヶ山ヲ過土山・水口ヲ過候へハ、暮ニモ相成、夜入過ニ石部ノ様着止宿候事、(滋賀県)(同上)

九日 晴

六ツ比ニ打立、矢場勢ヨリ舟ニテ、昼時分ニ大津ノ如ク参候、尤明日京都へノ都合モ有之候テ相宿候事、(滋賀県)(同上)

四四五 樺山日下部着京

十日 雨

六ツ過ニ打立、荷物ハ足輕相付、伏見ノヨフ相廻、予ハ家内衆引列、京都へ廻リ、京邸詰鶴木孫兵衛へ申遣候処、直ニ下僕遣候テ、(四條錦小路) 鍵屋ノ方へ案内致候へトモ、座敷込合候トテ、大文字屋ノ方へ至リ、(三左衛門) 鵜木・上田三殿被参酒会相催、左候テ承置候、本間精一郎ト申方モ被來、夜更被帰候事、(正高)

十一日 晴

鶺鴒案内ニテ、祇園ヨリ清水・東福寺へ参り、父君御
暮参致、夫ヨリ通天橋紅葉見物、人々多ク賑々敷折カ
ラ、

艶しくも紅葉の色や乙女子の

帰る姿のなつかしき哉

紅葉の色もなつかしおとめ子か

さすがすかたの
かさせる袖のやさしかりけり

日入比ニモナリ候故、夫ヨリ帰ニ会々堂へ参り、舞ナ
ト見物イタシ、上田ニモ参居賑々敷、五ツ時分ニ引取、
祇園町へ亦々立寄、舞子ノ興ナト見物致、四ツ過ニ帰
候事、

十二日 晴

今日ハ高雄へ鶺鴒相誘ヒ、四ツ過ヨリ差越、余程風情
面白カリケレハ、

水ノ音聞ハ時雨のこゝちして

けふや高雄の紅葉をそ見る

暮ニモナリケレハ帰候処、中途ニテ夜ニカモ入、月照候テ

詠ユフモ更ナリ、四ツ時分ニ帰着候事、

十三日 晴

ミナミナ列合ニテ本間氏案内、御所ヨリ加茂へ参詣、
帰ニ料理店へ立寄緩々致、夜五ツ過ニ帰候事、

十四日 雨

今日ハ御邸鶺鴒木所へ差越、暮前ヨリ旅宿ノ様同道、上
田モ同断、酒会ナトイタシ、五ツ時分ヨリ誘ニマカセ
彼ノ店へ赴キ一興モイタシ候、

十五日 (雨)

今朝帰候テ湯へ入、夫ヨリ鶺鴒木方へ差越候処、上田子
ヨリ被招、段々料理ノ馳走ナト被致、大山氏モ来、九
ツ時分ニ旅宿へ帰、仕舞ナト致、八ツ比ニ高瀬舟ヨリ
下り、夜入過ニ伏見金春ノ様着、直ニ例ノ酒ナト出シ、
(藤左衛門)
有川藤殿被来四ツ過ニ被帰候事、

十六日 晴

今日ハ舟都合ナト有之、長藩周布滞留ノ由聞候故、旅
宿へ一封遣候処、暫時引取ノ由ニテ、残念ニ考ヌ、水
野氏ヨリ品物被贈候、最早舟ノ都合ト聞ケレハ、仕舞
ナト致侍ルニ、言ノオホフ事ノアリケレハ、

恋しさに面影みえてなつかしき

猶しのはれてなつかしきかな

金春ノ宿ヲ出、日入過ニ舟ニ乗、淀辺ニテ夜入候、

四四六 樺山日下部大坂着

十七日 晴

今曉着坂、七ツ時分例ノ虎屋(土佐通)へ来ヌ、夜前淀川ニテハルカニ伏見ノカタナトアトニ見渡シ、殊更月ノ影サヘタルヲ見テ、

なつかしき都のかたもかすかにて

淀の河瀬の月をみるかな

今日ハ彼是ニテ日ヲ暮候事、

十八日 晴

今日ハ宿屋ノ娘子案内ニテ、住吉(大坂通)へ舟ヨリ参リ賑々敷、中途ヨリ夜入、五ツ前ニ帰候、松屋へ井上彌八郎殿着ノ由ニテ、被見舞候故差越、無程引取候事、

十九日 晴

今日ハ本間(正高)氏被来、尤江戸ヨリ川本東太郎尋来、椋木氏モ来、彼是ニテ畢ヌ、夜入過ヨリ本間旅宿へ至リ、一宿候事、

二十日 晴

今朝帰候、先日長邸山田・近藤ノ両士承候処、上京ノ由終ニ逢事不叶、加藤ヨリ書面来、先年召仕候下僕善

太郎来、久々ニ嬉敷酒ナト持参候、本間・川元ニモ来泊リ候事、

廿一日 晴

今朝田中・林へ見舞候、本間・川元来、昼比ヨリ城見物ニ差越、帰ニ椋木旅宿へ寄候処、彼是ノ事モ畢馳走ナト被出、別レノ一首、

一筋に尽せし君か身にしあれば

道もいとほて行かましものを

嬉しさに何を語らぬ心地して

さすか別れのおしくも有哉

無程夜モ入候へハ帰リ候処、最早舟仕舞等モ相済、乗入ルへキ様聞侍リ、五ツ過ニ宿屋ノ子共相列舟へ至リ候事、

廿二日 曇

今日迄出帆ノ程合モ分兼候故、本間旅宿へ差越終日相話、川元モ同宿故面白ク、不思日モ暮候処、頻ニ被留候テ終ニ一宿致候、

廿三日 晴

今朝舟ヨリ迎被遣候故直ニ帰候、四ツ過ヨリ本間・川元来、直ニ茶舟借入天保山(大坂通)へ入り、諸方見物致、茶店

へ寄り酒ナト酌ミ、日入前ニ又々舟ヨリ帰、本舟へ暮

過ニ参リ、夫ヨリ新堀辺へ致歩行、又々イツレモ同道

舟へ帰候、九ツ時分迄相嘶、本間・川元ノ両士モ被帰

候事、

廿四日 晴

今未明ニ出帆候、

廿五日 晴

今日昼比ニ明石ノ様参リ舟寄候故、人丸明神へ詣、湯

へモ入候テ夜中ニ出帆候、

廿六日 晴

今日四ツ過ニ備前牛窓^{岡山}へ舟ヲ寄、直ニ湯へ差越帰候テ、

亦々田地ノ方へ致歩行、賤ノ家ナトへ立寄候へハ、年比

八十余ノモノ穂カリノサマヲ見侍ルニ、イカニモアワ

レニオホヘケレハ、鳥目ナトアタヘケルニ飛テ歎ヒケ

ル、サマサマニ慰メ候テ、舟へ帰未明ニ湊ヲ出候事、

廿七日 晴

ホノホノト明比備前シモツリナト見得渡リ、風景コ、

ロヨカリケレハ、

ほのくゝと海はらかけて見渡せハ

心もはるゝけしきなりけり

今日ハ順風シツカニテ詠モ心ヨシ、何方ノ舟トモ定カ

タク、蒸気船へ行過、日ノ丸印故肥前歎ト舟子共申セ

シ、八ツ比ニ讃州ノ内多登津トイヘル湊ニ舟寄直ニ打

立、日下部氏家内衆僕迄六人、天気モヨカリケレハ、

中途モ面白ク、三里ノ道ト聞シカト、殊ノ外早ク七ツ

時分ニ金比羅^{同上}へ致参詣、諸方緩々見物ナト致、備前屋

トイヘル旅宿へ泊リ候事、

廿八日 大晴

今朝飯ナト仕舞直ニ打立、道スカラ打詠、風景様々目

ニトマリヌレハ、無程多登津ノ様帰リ、舟中ニテ昼飯

喰、又々取物ニ差越帰候テ、祝ヒノ酒トモ奉手向候へ

ハ、湊ヲ致出帆順風モヨロシク、左候テ兩人右ノ所ヨ

リ、便舟ニテ乗侍ルニ、段々遊芸ナト相初、ジヨフル

リナト聞候テ、不思夜ヲ過候事、

廿九日 雨

未明ニ寢覚候へハ、藝州見多良井トイヘルニ舟ヨセ候

故、入湯イタシ、歩行候テ今晚夕掛リ候、

朔日 晴

十一月

今朝雨晴レ、四ツ前ニ湊ヲ出、順風ニテ暮過ニカムロ(山口県)
ヘ舟ヨセ、汐アシクトテ今夜舟掛リ、乗合ノモノヘジ
ヨウルリナド聞賑々敷候事、

二日 晴

夜入前右ノ湊舟出候処、未明ニ室津ノ如ク舟寄セ侍リ
又、長藩時山(直巻)ヨリ手寄ノ一封送り候故、酒屋澤屋小方
市右衛門ト申セシ者へ尋行候ヘトモ、悴方ニテ亭主留
守故、委細申置帰候テ、舟宿へ差越風呂へ入帰候ヘハ、
小方氏ヨリ迎ニ来、直ニ差越候処、亭主ニモ帰居候
テ、段々ノ漸モ畢、日下部氏家内衆へモ申遣候テ無程
被參、品々馳走ナト有之、殊ノ外丁寧ニ預リ被留候
故、今晚泊候事、

三日 晴

今日モ酒ナト被出サマサマト漸候折カラ、亭主モ雅人
ニテ、短尺ナト被出候テ、認候マ、記置又、
なかくにふかくも君にひかれつゝ

さすか別れのおしくそ有ける

ノチニ画トモ認、暮前ニ舟ノ様帰候、左候テ市右衛門
トノ子共列ニテ、竿ナト持參ニテ被来、無程帰被下候
事、

四日 晴

今日モ順風アシク故、湯へ差越帰候ヘハ、小方ノ悴被
来暫相嘶候処、秋良敦之助(直島長州藩士)申方久坂士ヨリ面会ノ事
共被聞、昨日書面遣候ヘハ、今日ハ繁用ナカラ是非ト
ノ返答ニテ、直ニ小方ノ悴儉吉ト申方案内ニテ、小方
漕渡リ、秋良氏舟へ行逢押移候テ面会致、呉々彼ノ宅
ヘト被申候ヘトモ、彼是相断候ヘハ、上ノ關ヘ舟寄、
閑静方へ被誘緩々相談候、然処右ノ亭主御舟頭ノ由ニ
テ、色々馳走モ有之、最早暮ニモ相成候テ、無是非モ
相別レ、舟ヨリ帰り候事、
今晚八ツ時分ニ出帆致候、今日秋良氏諸方ノ景色打詠、
一入山ノ風景モ有之、三倉山ト改メシトノヨシ聞ケレ
ハ、

打わたす名に社見つれみくら山

詠はてなき秋のくれかな

五日 晴

今日ハ順風ニテ余程埒明候テ、暮前ニ下ノ關近クニ參
候処、俄ニ風雨イタシ、直ニ山ノ影ニ漕寄、今晚汐懸
リ候事、

六日

(マ)

今日迄モ風強ク候故、賤ノ家へ上リ色々芋ナト貰ヒ暫
相休ミ、又々舟ノ様帰候テ今夜モ汐掛リ候事、

四四七 樺山日下部下ノ關着

七日 晴

今朝四ツ時分ニ舟ヲ出、昼比二下ノ關へ着舟候故、直
ニ白石正一郎所(白石日記参照)へ差越候へハ、殊ノ外
丁寧馳走トモ致候テ不思相語、折柄一首書綴候へハ、
返歌ナト致候故、左ニ認置ヌ、

かねてより聞にし君にけふよりは

ともに語らぬ大和こゝろを

もろともに御国の為に尽さはや

もち生れたる大和こゝろを

暮過迄相嘶帰候処、舟甚退屈候テ、舟宿へ上リ酒トモ
酌、四ツ過ニ舟へ帰候事、

八日 晴

夜前出帆候処五ツ前(福岡県北九州市)ニ小倉ノ様着、村上へ至候テ、例
ノ馳走トモ有之、茶室へ是非ト銀右衛門申候故、相通
候へハ、随分楼モ面白、庭ノ菊ナト咲ミタレタルヲ見
テ、

思ひ来や君かのかるゝ庭の面に

咲みたれたるしら菊の花

亭主モ余程面白カリ、暫ト申候へハ、時刻モ移リ候故
打立、暮前ニ黒崎(同上)ノ如ク着致候事、

九日 雨

未明ニ打立飯塚(福岡県)ノ様着、止宿候事、

十日 晴

今日ハ冷水峠ニテ昼飯喰、八ツ時分ニ山家(同上)へ着、日下
部氏宰府(同上)へ参詣ト承リ、直ニ差越候テ参詣致候処、最
早日入比ニテ早クモ帰候ヘトモ、中途ニテ夜入、シカ
シ月ノ影ニテ道モヨロシク候テ、五ツ前ニ帰候事、

十一日 晴

六ツ前ニ打立、筑後府中ニテ昼飯喰、暮前ニ羽大塚(福岡県)
へ着候事、

十二日 曇

六ツ前ニ打立、瀬高(同上)へ参候へハ、柳河ノ藩止宿候故、
池邊藤右衛門へ一封頼、夫ヨリ南ノ關ニテ昼飯仕舞、
糸川氏へ手紙門前ノ者へ頼置候、過行候へハ中途ニテ
雨頻リニ降、夜入過ニ山鹿(同上)へ着、湯治ノ含候ヘトモ、
湯アシキトテ入事モ不叶候事、

四四八 樺山資之島津登出府ノ途ニ逢フ

十三日 晴

未明ニ打立候へハ、中途ニテ夜明、(熊本県)植木ノ駅ヲ過候処、
島津登殿(久包)へ行逢、逢度トノ事ニテ使來候ニ付差越候得
ハ、一紙ナト被相頼、夫ヨリ昼時分ニ熊本ノ様至リ、
萩角兵衛所へ差越候へトモ、留守ニテ有之、駅所ヨリ
一封頼置、尤都筑氏・木原氏(備后)へモ手紙頼置、暮過ニ宇
土ノ駅へ着止宿候事、(熊本)

十四日 晴

未明ニ打立、小川宿前ニテ夜明、(熊本県)八代萩原通りへ人馬
相廻居昼飯仕舞、日入過ニ日奈久ノ様着、例ノ薩摩屋
へ至リ候処、祭礼ノ由ニテ酒ナトノ馳走有之、湯治ト
モ致候テ、無程舟ノ都合ヨロシト聞候故打立、今夜空
モ晴月モ照候テ、イトシツカニテ、五ツ前ニ出帆候処、
夜明渡比向風ニナリ、(同上)田ノ浦ノ如ク寄、人馬都合トモ
致、飯ナト喰候テ通行候処、雨強ク降り行事不叶候テ、
佐敷へ昼時分ニ來止宿致候事、(同上)

十五日 曇

六ツ半比打立、七ツ時分ニ水俣(熊本県)へ來昼飯喰、番所手前

ヨリ暮ニ相成、(田水市)米ノ津ノ様着致止宿候、左候テ田代清
次ヨリ一封残置候トテ、待不達シテ帰候トノ趣ニ候、

四四九 樺山資之途ニ母ノ訃ヲ聞ク

十六日 雨

夜明時分ニ爰許打立、(出水郡)野田駅ニテ昼飯仕舞通行イタシ
候処、途中ニテ奈良原喜格殿へ行逢彼是ト承リ、然処
宿元ノ一左右、不計モ 母君ノ過サセケレトノ事、イ
ヤナカラ被申聞、兼テ如何トオモヒ侍ル事モアリシニ、
カクナラセ給フ事、夢カウツ、ヤト、夫ナリ相別レ候
テモ、中途サマサマ思ヒアワセ候テモ、唯々湧出ル涙
ノ外無之候、急キ阿久根へ着致候処、直ニ兄様ヨリノ
御一封源兵衛方ヨリ相届、ナクナク相披候処、イヨイ
ヨ右ノ段モ相分リ、更ニ手ノ置心モサタマラス、泪ニ
クレ候ノミ、左候へハ種子島正八郎・堀平太左衛門(勝名、熊本藩士)当
所へ來居候トテ見舞被致候、

十七日 雨

未明ニ打立西方へ來候へハ、(隈輔)高橋勇次郎(祐ノ誤、美
玉三平変名)天草へ行掛ナリトテ立宿へ被待居、色々
馳走ナト被致、城下ノ一左右モ承リ、如何ト案疑ヒ候

処、日比人撰ノ次第、先ハ安心ノ事ト被考候(高橋ハ

熊本・久留米等ノ同志訪問ノ為メナリシト、小河一敏カ義孝

録参看)

十八日 雨

ヨキ方ニト聞、且駕籠ノ内ニテモサマサマ悲歎ノ事ノ

ミ、イヨイヨ足モ進ミカネ候、時刻モ過高橋へ相別

レ、暮前ニ向田ノ様着イタシ候へハ、馬場清之丞殿・

窪田佐八郎殿当所へ締方詰ノ由ニテ尋被下候、

十九日 朝雨後晴

向田ノ宿ヲ六ツ過ニ打立、市來湊手前ニテ、田中太郎

左衛門へ江戸詰ノ由ニテ行逢ヒ、シハシ相話、夫ヨリ

湊町立宿ニテ昼飯仕舞、暮前ニ伊集院(同上)へ着、彼是ノ時

宜ニテ、日下部氏ハ別宿ニイタシ、両三人迎ノ方モ有

之、然処夜五ツ比ニ田代清次来リ、段々ノ事承リ、七

ツ時分ニ打立候処、横井ニテ夜明候、暫相休ミ候テ、

四ツ時分ニ水上(鹿兒島市)へ参候へハ、關太郎・伊集院(金太郎)金殿子ト

モナト被列被参候、其外追々ノ人々モ被参候得共、早

キ方ト直ニ急キ帰候へハ、客人モ有之、唯言語ニ絶候

迄ニテ袖ヲ濡候事ノミニ候事、

翌日ヨリ引入候処、忌御免ノ段申来候へトモ、十二月

三日ヨリ致出勤候事、

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
文久元年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料
(紙數八十九枚)」の記載あり〕

目録

- 有馬正義建言第一
- 全上第二
- 全上第三
- 全上第四
- 全上第五
- 全上第六
- 有馬新七英巖雄へ与へル書

有馬新七町田助太郎(久成旧名)へ与フル書

有馬カ書類中ニアル武術師範新古人名(文化頃ノ人名乎)

無名ノ建言(道島正亮乎)

参考 筑前志士傳鈔〔市來広貫正誤及ヒ説明〕

以上十一条

四五〇 有馬正義建言第一

乍恐謹テ奉言上候

臣正義愚陋浅才誠ニ以テ奉恐入候へトモ、当時

朝廷ノ御危迫 皇国ノ興廢ニ相係リ候儀御座候故、

臣子ノ情義拱手鍼黙難罷在、不顧僭踰ノ辜所存ノ趣

左ニ奉言上候、

去年三月、奸魁井伊掃部頭伏誅以来夷賊弥致横行、幕議

ハ却テ益偷安ノ方ニ相趣、日ニ一日ヨリ甚敷ク、乍恐

主上宸襟益不穩、只今通ノ勢ニ候ハ、天下万民塗炭

ノ苦ニ陥候儀ハ申迄モ無之、赫々タル 皇国遂ニ夷狄

ノ正朔ヲ奉シ、開闢以来未曾有ノ御瑕瑾到来イタシ候

半モ難測、実ニ我カ国安危興亡ノ所關係、御一大事此ノ

時ニ御座候処、天下ノ大小名猶予不断ニシテ、徒ニ望

願シ或ハ變動ヲ窺ヒ、機ヲ見テ勃興ノ志有之候御方モ

(望ハ傍
徒ニ望
我初通思
候ヲ通思)

可有御座候得共、畢竟目前ノ利害得失ヲ計較テ、名分大義ノ実ヲ不顧、一國一身ノ禍福ヲ懼テ、天下ノ安危ヲ不顧ヨリ、断然ト天下ニ大義ヲ唱ヘ勤王イタシ候人無之儀ト、窃ニ憂憤永慨ニ不堪儀ニ御座候、〔高津茂久〕太守様御忠義之御志御懐抱被為在候上ハ、臣正義愚陋申上候迄モ無之、御遠図之御忠略被為在、大義ヲ正シ、名分ヲ明シ、上ハ

朝廷ヲ奉靖、中ハ幕府ヲ輔ケ、下ハ万民左衽ノ苦ヲ令免賜フ御規模、固ヨリ御一定ノ御事ト奉忍察候、然ルニ臣正義窃ニ天下ノ形勢時情ヲ觀察仕候処、夷狄ハ追日熾ニ致暴行、兵庫港ヘ商館造建モ有之候勢ニテ、幕府ハ殊更夷狄ト相親結シ、悉ク彼力意ニ適從シ、暴威ヲ振ヒ、実ニ

朝廷ノ御危急弥旦夕ニ相迫リ、誠ニ以テ天下ノ事既ニ衰墜ノ極ニ至候時節ト奉存候、古昔ヨリ機会相失候テハ雖有智者不能善其後時宜有之候ヘハ、只今ノ勢所謂一日ノ苟安天下万世ノ憂ニテ、殊ニ奉勞

宸襟候ハ、臣子ノ罪一日モ猶予望觀仕候テハ難相濟時節ト奉存候、就テハ近比奉恐入儀ニ御座候ヘトモ、太守様御英断被為在、天下義兵ノ魁主ト被為成、速ニ尾

張・水戸・越前・筑前・肥前・長門・因幡・土佐等、有志ノ御大名ヘ御直書御遣被遊、深御結合ノ上期限ヲ定メ、京師ヘ御出馬、勤王ノ御趣意御奏聞ノ上、

勅命御奉戴、奸賊安藤帶刀、酒井若狹守等カ輩御誅伐有之、幕府ヲ御輔佐、諸大名ヲ和輯シ、外夷ヲ攘除シ、

皇室再造ノ御策略御決定被為在度奉存候、此ノ儀輕莽妄動ノ暴策ノ様ニ被思食候半モ難測奉恐入候ヘトモ、

方今ノ時ニ当テ外ニ策ノ可施様無之、第一策此他ニハ有御座間敷奉存候、若御国家ノ御時勢情態ニ於テ難被

為行御談合モ被為在候ハ、〔沢也〕第二策御施行アラセラレ度奉存候、第二策ハ當時一橋侯、〔徳川慶喜〕越前侯御賢明忠実ノ

御方ニテ、天下人望ノ所帰、徳川御家ニ於テモ御親戚ノ御方ニテ、誠ニ難得御人物ニ御座候間、太守様ヨリ一

橋侯ヲ徳川御家御後見、越前侯ヲ大老職ニ被為任度段、御建白被為在度、且閣老ノ中ニ、久世大和守様ハ頗ル志

早ク有志ノ者ヨリ輔ケハ、〔伏見〕程ニ懸ニハ、〔伏見〕間敷君ニ候、〔伏見〕モ有之御方ノ由御座候間、別段御直書ヲ以前件ノ次第、〔安宅〕且安藤・酒井ヲ逐斥シ、〔眞直〕土浦藩主ニ

老ニ被仰付度趣、巨細被仰進度儀ト奉存候、左候ハ、久世侯モ大ニ力ヲ被得、猶又処置ノ道モ可有御座、勿論一橋・越前ノ両侯幕政御輔佐有之候ハ、奉靖

叡慮、外夷攘除之策ハ如何程モ可被為出来ト奉窃存候、
臣正義愚陋窃ニ思慮仕候処、当時天下ノ急務右ノ両端
ニハ出申間敷、名分大義時体事情当然ノ所置、此外ニ
ハ有御座間敷奉存候、幕府若御建白ノ御忠言ヲ不被用
候ニ付テハ、不被為得已京師ニ御出馬不被為在候テハ、
決テ難被為濟御儀ト奉存候、然処近来議者往々御嫌疑
ヲ被為避、御国難不相掛様ニトノ説ヲ建候由窃ニ承り、
臣正義愚陋疑惑仕候、右等ノ説ハ事ノ緩急時ノ所位ヲ
不弁ノ論ニテ、殊ニ 太守様御誠忠ノ御深志ヲ不奉汲
受、 太守様ヲ恐多モ

朝廷御危急ノ場ヲ徒ニ御望観被為在、大義ノ場ヲ忘レ
天下万世ニ御汚名ヲ被為流候様、不義ノ域ニ奉導候儀
ト奉存候、被為避御嫌疑候儀ハ大有為ノ御志ヲ御懷抱、
公然明白ニ被遊候テハ、却テ事ノ敗ニ相成、害ヲ引候テ
御志業難被為遂故、暫ク形ヲ潜メ、影ヲ蔵シ機ヲ秘シテ
不顯、隠然トシテ遂ニ御志ヲ被為述候為メノ御術策ニ
テ、順聖院様ニモ此ニ於テハ深く御遠図可被為在御事
ト奉恐察候、然レトモ事ノ緩急時所位ノ差別モ有之、
只今ニ相成候テハ、往事トハ時体モ違ヒ、天下ノ安危
朝廷ノ御危迫一日片時モ猶予望観難仕御時節ニテ、イ

ツ迄御望観被為在候テ、幕奸共ノ嫌疑ヲ御憚り、悠々
徐々トシテ歲月ヲ御過シ可被遊哉、勿論 太守様勤王
ノ御誠心ハ、当時天下ニ無隱御事御座候ヘハ、如何程
形影潜蔵ノ術御用被遊候トテ、彼ノ奸徒共御疑不申上
訳無之、右等ノ術御用被遊候ハ、彼等却テ益御疑可申
上ハ按中ト奉存候、 順聖院様兼テ深く其機ヲ御潜蔵
御嫌疑被為避候ヘトモ、一橋候西上ノ有無ニ依テハ、天
下ノ安危所関保徒ニ難被為黙止、既ニ京師へ御出馬被
為在、断然ト勤王ノ御誠忠、公然明白ニ天下ニ大義ヲ御
唱可被遊御決心被為在候、其時所ニ依テハ、区々タル御
嫌疑少モ御顧不被遊、御英断被遊候御事ニ御座候、況乎
方今ノ時其時代トハ猶又危迫ノ折柄ニ御座候ヘハ、御
嫌疑御憚御望観被遊候御時節ニテハ有御座間敷、断然
ト尊王除夷ノ御誠心通り被遊候テ、時体当然ノ御事ト
奉存候、御国難不相掛様ニトノ儀ハ、臣子奉憂御国家
者、固ヨリ此ニ於テ執力謹慎可不仕哉、然共臣正義窃
ニ思惟仕候処、所謂御国難不相掛トノ説ハ、
朝廷ノ御危急天下ノ安危ヲ望観候テ、両端ヲ懷キ勢ニ
就キ、害ヲ避ケ御国難不相掛様ニトノ事ニテ可有御座
ト奉窃存候、臣正義 愚慮乍恐右通ニテハ、異日天下正

路ニ復シ、皇威相振候御代ト相成リ、

朝廷ヨリ御望観ノ罪御正有之候ハ、此ヨリ大ナル御
国難ハ有御座間敷、尤天下万世御家ノ御瑕瑾ト奉存候、
普天率土孰不皇臣哉、孰不皇土哉、皇土ニ生レ皇臣ト
シテ、

朝廷之御危迫

皇国ノ存亡ニ致関係候儀ヲ、イツ迄モ望観可罷在哉、差
当ノ利害ヲ計較テ遠大ノ利害ヲ不慮、名分義理ノ当否
ヲ不弁シテ偷安避害候テハ、臣子ノ道永ク廢レ可申、

殊ニ (高津茂久) 順聖院様御跡ヲ被為繼候御儀ニ付

テハ、是非御遺志御継述不被為在候テハ、難被為濟御事
御座候ヘハ、此節ニ至候テハ、御望観被遊候テハ不被為
濟御訳合ト奉存候、 太守様固ヨリ御忠義ノ御志御深
厚被為在候御事御座候ヘハ、此ニ御疑惑被遊候儀ハ、決
テ有御座間敷奉恐察候ヘトモ、 臣正義愚陋耿直奉敬愛
君上ノ至情所窃聞、亦敢テ不得不奉建言、抑昇平年久
シク天下有土ノ君ヨリ下庶人ニ至マテ、往々宴安ノ楽
ニ沈溺シ、忠節ヲ
朝廷ニ致スノ大義ヲ不弁、偶名分ノ筋ヲ略致弁明候者
モ、徒ニ文弱ノ方ニ流レ、断然ト名義ノ実ヲ尽候人ハ

相鮮ク御座候処、 順聖院様御英邁御威徳千古ニ御廻
出被遊、深ク

朝廷ヲ御翼戴、幕府御輔佐、土民御撫育、夷狄ヲ攘除
シ、

皇威ヲ海外ニ被為振候御誠忠、確乎トシテ金石ヲ貫キ
神明ニ通リ候テ、規画方略御胸中ニ御一定被為在、度
々御奏聞ノ訳有之、

主上 叡感不淺、肱股柱石ノ如ク被

思食深ク御依頼被為遊候、既ニ安政戊午ノ秋御施行ノ
思食ニテ御座候処 (黒田齊徳) (安政五戊午ノ秋御上京ノ御予定西郷隆
盛へ密命、福岡侯ニ密使等ノ事実ハ戊午年ノ部ニ詳記ス)、

中道ニテ御逝去被遊、臣子悲歎愁哭ノ至ニ不堪ハ申迄
モ無之、天下ノ大小名ヨリ且士民ニ至迄、略有志者ハ
皆奉深惜流涕候、惟御国家ノ御不幸ノミナラズ、実ニ
天下万世

皇国ノ御不幸ニ御座候、御逝去ノ段

朝廷ニモ聞ヘ上ケ、 (忠勝) 近衛殿ヨリ被為遂 御奏聞候処、
主上深ク御悼惜被遊、辱クモ

竜眼ニ御涙ヲ被為洒、其後 (島津斉彬) 近衛殿へ薩摩守逝去相成
候ニ付テハ、後ノ儀ハ差支無之哉ト、度々

勅問被為在候ニ付、近衛殿ニモ

叡慮御安堵ノ為ヲ被思食、且御家勤王ノ儀無疑、勿論御

家ニ於テハ御先代様ヨリ格別ノ御沢合モ被為在候故、後々ノ儀ハ何ソ差支無御座、只今モ薩摩ノ者共、窃ニ

御所奉護仕候段、

勅答被為在候処、少ハ

叡慮御安堵被為遊候由此時鎌田出雲始ノ御地知能石南門、有村武次等京師伏見ノ御座候時節ニ御座候故、左様ニ御勅答被為京師ニ罷居、親敷月照和尚ヨリ窃ニ承

知仕候、方今ニ至候テモ追事ヲ追想仕候ヘハ、涕泣不

能交禁、其後臣正義（在力）近衛殿ノ御仰ヲ奉畏、

勅書ノ御写シ且（実方公）三條殿ノ御直書奉護、関東ヘ下向仕

リ、越前・土佐等ヘ奸魁并伊等ヲ討取り、且京師奉護之

策相決候上、再ヒ京師ヘ罷登リ、奸徒間部下（餘勝老中）酒井

若狹守等（宗義京都市司代）力動静ヲ探索シ、遂ニ長門・因幡等ノ国々ヘ

撲合セ、在京奸賊ノ徒ヲ討取候策ヲ決シ、窃ニ（探力）三條殿

迄形行奉上言、東西一時ニ振起、其勢ニ乘シ外夷ヲ攘除

ノ策略ハ可有之相決シ、安政戊午ノ冬十二月八日、太

守様伏見御着駕ヲ奉待、早速時体并臣正義愚存ノ趣奉建

言候ヘトモ、奸徒島津豊後等（新納駿河其他ノ俗史）力輩恐懼戰慄仕リ、堅山武

兵衛モ臣奉建言候一封相請取、奉入 御聞トノ返答迄

ニテ、所詮被相行候時宜ニテ無之、翌日 臣正義御国許ヘ

罷下候様被仰付（伏見駅ニ於テ建言書提出部ニ照考スヘシ）

朝廷御危迫ノ場ヲ不得已空敷罷下申候、此ノ時ニ当テ

若 太守様暫ク伏見辺ヘ御滞在被為在候ハ、御国許

有志之士追々馳登リ、長門・因幡等ハ勿論四方有志ノ

国々勃興、奸賊ヲ誅伐シ

皇室御再造ノ大機會ニテ、乍恐 太守様御興復ノ御忠

節天下万生ニ光輝シ、御威徳宇内ニ屹立座候半ト、窃ニ（世方）

奉存候テノ愚策ニテ御座候処、大機會相失シ、爾来間部

遂ニ関東ヘ下向シ、奸徒益相固結シ、弥有志ノ士ヲ相捕

ヘ、往々忠義ノ士ヲ処死刑、諸藩モ徒ニ致望観、夷ニ

以テ不堪長大息形勢ニ御座候処、水戸藩士等慷慨悲憤

ニ不堪、奸魁并伊掃部頭ヲ討取候策ヲ決シ、御家ノ儀

ヲ第一ト奉頼候テ、京師奉護ノ儀ヲ御家ノ有志ニ託シ、

江戸表ヘ相詰居候有村雄介等（兼武）ヘ引合候ニ付、御家ノ儀

モ順聖院様御代ヨリ深御結合ノ訳モ被為在候儀ニテ、

殊ニ 朝廷ノ御為忠節ヲ尽シ奉リ候儀、 順聖院様御平素ノ

御志ニテ被為在候故、共ニ事ヲ謀リ、田中謙助（盛助）罷下候

ニ付、形行度々奉言上候処、変事到来之上ハ不日ニ御人

數御差出可相成段仰ヲ奉承知、日々相待候砌、遂ニ有村次左衛門水戸藩士ト共ニ掃部頭ヲ討取り候、臣等其節奉_{（兼憑）}上言候通り、御家ヨリ一手之御人數三四百人計モ京師へ御差登セ相成リ、

皇居御奉護有之候ハ、

朝廷之御勢忽チ強大ニ相振ヒ、四方へ

勅命ヲ下サレ候時宜ニ罷成リ、諸藩有志之面々不日ニ馳登リ、仮令三四百余人ハ悉ク京師ニ骸骨ヲ晒候共、

四方ノ国々振起、天下正路ニ復シ可申時節ニテ、是亦不可失ノ大機會ト奉存候処、此レ以テ相失ヒ、志士窃ニ痛

恨歎惜仕候儀ニ御座候、臣正義曾テ狂生輕忽暴挙ノ称ヲ以テ、忌諱ニ抵触申候、然共臣正義乍恐太守様ニ所奉

仰望ハ、御忠義御卓立被為在、天下義兵ノ御先驅被遊、
（鳥澤忠也）

順聖院様御遺志御継述、

皇室御再造宇内ヲ御掃清被為在候御鴻業座得カシト念願奉存候処存ニテ御座候、彼ノ
（御脱力）
（候脱之）

朝廷ノ御危迫ヲ望観シ、利害得失而已ヲ計較シテ、名分

義理ノ実ヲ不顧輩ト同シク、太守様ヲ天下万世ニ奉称候テハ、実ニ臣子莫大ノ罪、死ニテ地下ニ不瞑ノ深恨

ニテ、所謂君ヲ奉令陷不義候訳合ト窃ニ奉存、暴挙狂生

ノ妄言モ不奉顧儀ニ御座候、既往ノ事既ニ如此将来ノ事ニ於テ猶更御遠慮不被為在候テハ難被為濟御時節、

既ニ奉申上候通ニテ、自古名君良將時機ニ先タチ機先ヲ察候儀、固ヨリ智慮清明宏達ナル訳ニハ御座候ヘト

モ、間諜ヲ用候テ、能ク敵国ノ情実ヲ察候儀無之候テハ、不相叶訳合ニ御座候故、太守様勤王ノ御忠志御

卓立、京師御出馬之御決心被為在候ハ、第一能ク他国ノ情実ニ通達シ、四方有志ノ人へモ交候テ、忠勇ニシテ

物馴レタル士ヲ御撰ミ、京師へ西三人計、関東・中国・九州辺へモ三人計宛窃ニ御差出相成、事情時体探索之

上、時々御国許へ申上候様被仰付度奉存候、当時諸浪人探索嚴密ノ由御座候ヘトモ、志確乎タル忠勇ノ士ニ

テ、殊ニ他国ノ情態ニ通候者ニ御座候ハ、容易就捕候儀ハ有御座間敷、仮令就捕候トモ、機事発露シ勤王之御

妨相成候儀ハ、決テ有御座間敷奉存候、苟モ此方ニ事機時情能ク相分候へハ、其機ニ応シ発動、潜蔵ノ策ハ如何

様トモ出来可申、仮令志ハ有之候共、時機事情ニ味候テハ、何ヲ以テ臨機応変措置其宜ニ当リ可申哉、太守様

大有為之御志御懷抱被為在候ニ付テハ、大有為之実事御尽被遊度、乍恐奉至願候、実事御尽シ被遊候ニ付テ

ハ、兎角時機事情能々御觀察被為在、京師御出馬ノ機ニ被為臨候テハ、間ニ不容髮風動迅速之御挙動被為在度奉存候、臣正義区々之赤心窃ニ順聖院様御遺志奉銘佩寤寐難忘、片時モ早ク奉請

叙意、且ハ太守様天下義唱之御魁被為遊、御忠孝之御英名青史ニ光輝シ、天下万世迄モ奉仰慕候様被為在度乍恐奉仰願候、此レ臣正義区々奉報御国家無究之至恩度トノ本心ニ御座候、伏テ願ハ御英断ヲ以テ、

皇国非常之御大難ヲ御鎮メ被遊ノ御決心被為在、天下ニ先タチ勤王之大義ヲ御唱被遊度奉存候、臣正義不在其位、敢テ奉建言候儀、僭越冒為之辜無所逃、幾重ニモ奉恐入候ヘトモ、臣奉愛敬君上憂御国家之至情難黙止、謹テ奉言上候、愚者ノ千慮モ一得、愚夫愚婦之言尚有可取、街巷之談徒不可棄ト申古諺モ御座候ヘハ、臣至愚之妄言モ亦御国家ニ於テ万分一モ有補ハ、臣死トモ地下ニ眼目可仕候、誠惶々々謹言、

西四月二日

有馬新七正義

謹

上

右太守公へ差上候草稿

右奉差上候処、御小納戸某ヲ以テ尤之儀ニハ候ヘトモ、只今ノ処ニテハ断然ト被遊事件モ被為在候間、自然変事到来ノ節ハ御勤王可被遊候間、左様心得可罷在段承知仕候事シテ、本書ハ大久保利通日記ト參照、當時ノ形勢ヲ知ルヘシ、

四五 一 全上第二

上文欠失 叙慮之程奉恐入、臣子之道永ク廢レ可申、小生解之避遠之微臣御座候ヘトモ、先寡君遺志之万分一ヲモ継述ノ志願ニ御座候ヘトモ、才短力微徒ニ長太息仕迄ニ御座候、且御地へ滞居之砌、月照和尚ヨリモ略

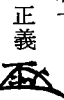
朝廷ノ御動靜、乍恐モ

叙慮ノ程モ奉潜聞居候ニ付、兎角都地ヲ墳墓ト覚悟仕罷在候ヘトモ、不得已勢ニテ潜登ノ儀モ出来兼、只々憤恨空敷歲月ヲ過了迄ニ御座候、尤近年御地へ弊藩ヨリ有志ノ者罷登居不申、御地ノ動靜全ク相分不申、同医連修業ノ為メ在京ス藩坂元幽齋ト申医者御地へ久敷罷居、幸矢野子文通へ因ミ有之、依之右ヘ託シ鄙書奉呈仕候、冒為之辜ハ幾重ニモ御海恕被成下、思召ノ趣共被仰聞被下候ヘハ、難有奉存候、尤御地ノ動靜モ御洩被下度奉懇願候、追々愚存ノ趣モ可申上候間、不惡様御汲取被下度奉願候、尚

為天下御自愛專要奉存候、恐謹言、

西八月廿八日

有馬新七



英敵雄様

正義

奉机下

(文久二年壬戌)

再啓小生等潜登ノ儀モ兎角来春比迄ノ間ニ決定可仕

覚悟ニ御座候間、此段モ予メ御含置可被下、尤當時

弊藩嫌疑ノ訳モ有之候間、御返書被成下候儀ニ候ハ

、上封ハ坂元幽齋宛ニテ御差遣被下度、是亦奉願

候、

四五二 全上第三

乍恐謹テ奉言上候、

私式每度奉旨

貴聽候儀、誠ニ以恐多奉存候ヘトモ、先日奉申上候

条件ニ於テ、既ニ御施行被成下、御国家ノ御為万分

一モ補益有之、(候者モ有之脱力)誠ニ難有奉存候、就テハ愚存ノ趣苟

モ御国家ノ御為ト存付候儀ニ於テハ、差扣可罷在御

時勢ニテハ有御座間敷奉存候故、猶亦愚存ノ趣不奉

願恐、左ニ言上仕候、

一今古上下ノ情意不通達所ヨリ、奸邪威權ヲ弄候様罷成、

国家ノ禍害ヲ引出、且内官・外官ノ差別ヲ嚴ニ立テ、上

ノ耳目ヲ致蔽塞、遂ニ亡滅ニ至候儀往々不鮮、然処

太守公人ニ取テ善ヲ為ヲ被為案候御徳量御深厚ニ被為

在、言路ヲ被為開、上言仕候様、度々被仰出、実ニ盛

世ノ御美事、古今人主ノ所為、難有御趣意奉仰望雀躍

候、全体御領國中ノ儀ハ、御家内同然ノ儀ニ御座候ヘ

ハ、何卒宮中府中共為一体ノ意ニ被為基、御側・表ノ

差別界限ヲ御变革被為 在、

御先代

(十七代義弘公) 惟新公士民御撫育被為 在候

御盛徳ヲ御模範ト被 遊、公平正大ノ御心ヲ以、公明

正大ノ御国政御施行被為 在度奉仰望候、尤

(齊彬公) 順聖院様御代段々上言仕候者有之、其節

順聖院様二ノ丸ヘ御出座被遊、上言仕候者ヲ被為召、

親敷其者ノ趣意ヲ詳ニ被為 聞食度、(上下ノ別ナク言路御開) 思食被為 在、

且御側・表ノ差別モ御改革被為 在候思召著明ナル訳

ニ御座候ヘハ、何卒右ノ御趣意御継述被為 在、有志

ノ者共ハ追々御前ヘ被為召、種々ノ御議論被為 在度、

左様御座候ハ、益忠言嘉謀日々御前ヘ陳言仕候者多

ク罷成、御領國中ノ耳目

太守公御一身ノ御耳目ト罷成、野無遺賢、下無冤民益
士氣振興可仕ト奉存候、

一大守公大有為ノ志御懷抱被為 在、全国ヲ以

天朝御奉護ノ御誠心被為召居候御儀ニ付テハ、大有為
ノ実事御尽被遊度、乍恐奉至願候、大有為ノ実事御尽
被遊候儀ニ付テ、兎角御国体堅固ニ罷成候儀基本ニテ、
此節段々人才御撰挙被 遊候ニ付テハ、追々御国体ノ
儀ニ於テハ堅固ニ罷成可申、就テハ

天朝ノ御為ニ御忠節御尽被遊候儀、第一ノ御急務臣子
ノ御職分当然ノ御儀ト奉存候、全体

皇国ノ藩屏タル 御国ニ候ヘハ、御国体ヲ堅固ニ被為
立候儀ハ、

天朝ノ御為 御忠節ヲ御尽被遊候 御趣意ニテ可有御
座ト奉恐察候、

天朝ノ御為ニ御尽被遊候儀ハ、只今ノ世体第一君側ヨ
リ有志ノ者ヲ以テ、越前侯・因州侯・土佐侯・長州侯
等ノ如キ忠義勤王ノ志有之候御大名方ヘ、篤ト御結合
相成候儀、差当ノ御急務ト奉存候、左候テ御廟算ノ根
元ハ、事情世態ヲ精ク察シ、彼ノ動靜ヲ詳ニスルニア

ル儀ニ御座候ヘハ、間諜ノ為ニ有志ノ者共ヲ遊学生医
道稽古等ノ名目ニテ、京師・江戸其外東国・中国・
九州辺迄モ御差出相成、

朝廷ノ御事体且幕府ノ為体、(忠義)酒井・安藤等カ虚実、天下
(信譽)

人心ノ帰向、一々探索イタシ候様被仰付度、臣等カ如
キハ或ハ法師・山伏等ノ姿ニ変シ、京師・関東諸所
ヘ往来仕、事情時体探索被仰付度奉懇願候、事情時体詳
ニ御觀察不被為 在候テハ、大有為ノ御志ヲ被為遂候

儀ハ、被為出来間敷ト乍恐奉存候、先度モ奉言上候通、
自古名君良將時機ニ先チ変ニ処候儀、固ヨリ知慮清明
宏遠成ル訳ニハ御座候ヘトモ、間諜ヲ用テ能敵国ノ情
実ヲ詳察候儀無之候テハ、難叶儀ニ御座候故、間諜ノ儀
別テ御急務ニテ、御廟算ノ根本不可過之奉存候、

一有志ノ御大名御結合ノ上ハ、幕府ノ奸党等カ罪ヲ正シ、
諸大名方ヲ和輯シ、外夷ヲ攘除シ、

皇室再造ノ御策略被為 在度、右ハ先度モ奉言上候通、
越前侯ヲ大老、(市ハ一ノ懸)市橋侯ヲ徳川家御後見ト申所、(此三条岩倉公ノ指向ノ御目的ナリキ)彼奸党等
承服不仕候ハ、此節御参府ノ節、敢死ノ士五百余人計
モ被召列、外ニ京師辺御着駕ノ期限ヲ究置、御船天祐
(買入レタル汽船)丸ヨリ千人余、若州小濱辺ヘ被差廻、京都ノ變動ニ備ヘ

京師へ御滞在被為在御趣意ノ趣、詳ニ被為遂御 奏聞
勅諭御申下シ、直ニ小濱ノ城ヲ攻取、諸司代屋敷へハ
御旗本備ヲ以御攻寄被 遊候ハ、若狹守前後不能相
顧伏誅候儀相違有御座間敷、左様御座候ハ、安藤等カ
如ハ、関東ニ於テ伏誅可申、右ノ通確乎ト義旗ヲ被為
立、京御奉護被為 遊候ハ、四方勤 王ノ諸大
名方不日ニ勃興シ、天下正路ニ帰可申、其上ハ夷狄ヲ
攘除ノ策ハ、如何程モ可有御座ト奉存候、

右ノ通猶亦言上仕候、何レノ筋

天朝ノ御為ニ御忠節ヲ被為尽候御誠心確乎ト被召
居、区々タル嫌疑ニ於テハ最早御願ミ被 遊候御時
節ニテハ有御座間敷奉存候、臣不奉堪恐懼畏慎之至
候ヘトモ、一凶ニ存込候赤心至情不能緘黙、此段言

上仕候、誠恐々々謹言、

(文久元年)
十一月廿一日

有馬新七

正義

謹

奉

四五三 全上第四

一師家ノ面々詰所老ケ所御造立ノ事、

但ニ拾畳敷位ニテ二階有之、右二階へ師家ノ面々相

詰、何篇実用ニ基キ、互ニ親切ニ吟味有之候様有

御座度、尤毎日四ツ八ツ出勤造士館同様ニテ、四

ツ打止候時分ヨリ銘々ノ稽古所へ罷出、門人共へ

丁寧ニ教導方仕候様有御座度、師家病氣又ハ余多

ノ門人ニテ行届兼候訳モ可有御座候ニ付、高弟ノ

中抽出精、且慥成人柄同門中致心服居候者両三人

宛御撰、造士館訓導師等ノ振合ヲ以、御扶持米被

成下、師匠心添被仰付、何篇致差引、教導方行届

候様有御座度、尤詰所ノ儀ハ二階下へ相詰、四ツ

八ツ出勤前条同断、

一書役師家毎ニ一二人位宛被仰付度事、

但師家門人中随分慥成者御撰、造士館書役ノ振合ヲ

以、御扶持米被成下、門人中出席ノ節、二階ニ於

テ四ツ八ツ星合并諸帳面等取調方有御座度、

一稽古所造士館内へ被召建、師家毎ニ銘々御渡相成度事、

但只今ノ稽古所計ニテハ、毎日ノ稽古出来兼候ニ付、

何レ毎日稽古出来候程ハ、稽古所御造立有御座度、

一銘々門人ノ中出精衆ニ抽候者拾人位宛、無禄ノ士へハ

四石ノ割ヲ以テ、出席ノ日數ニ応シ御扶持米被成下度、

但右通師家毎ニ拾人位宛御扶持米被成下候ニ付テ

ハ、惣テ百七八拾人計ニモ相及可申、就テハ当分

御勘定所郡方御代官所等、其外諸御座書役等不用

ノ人數ヲ被相省、文武兩館へ出精ノ者へ御扶持被

成下候様御座候ハ、各武士ノ本職相勵ミ、風教

相立可申、左候テ各芸道ノ品ニ依テ御番勤被仰付、

兼テ御旗本陸小姓ノ御見合相成居候様有御座度、

御番勤被仰付候者へハ、四石ノ定扶持被成下度、

併高五拾石以上所持ノ者ハ、猶又御吟味有御座度、

一窮士ノ者随分心懸宜敷者へハ、是亦前条同断御扶持米被成下度事、

但右御扶持米ノ儀ハ、当分窮士御救助ノ為ニ御差分

相成居候五千石ノ内ヨリ被成下度、出席ノ日數ニ

応シ御扶持米被成下候儀ニハ御座候へトモ、病氣

等ニテ実ニ難罷出訳合モ有之候節ハ、別段御吟味

有御座度、

一諸御座御用透有之者ハ、別勤ニテ文武兩館へ罷出、致

出精候様被仰付度事、

一寄合并以上無役ノ面々ハ、毎日文武兩館へ出席修行有

御座度事、

一演武館出席ノ面々モ、造士館兵書會読等ノ節ハ出席有

御座度事、

但師家并心添ノ面々出席可有之、其他ノ人數ハ諸會

読出席并自身學業ノ為入齋等ノ儀勝手次第被仰

付、尤心添等ノ面々モ志次第入齋有御座度、

一文武ノ諸生徳器成就ノ品ニ從テ、文武兩館役々吟味ノ

上、掛御役々方へ申出、諸御役場へ御撰挙有御座度事、

右ノ通御變革有之、且造士館へ罷出候者モ面々演武

館へ罷出、武道修行有之儀ハ勿論ニテ、全体文武ハ

固ヨリ一致ニテ、

皇國ハ武ヲ以テ主本ト致候儀ニ御座候へハ、是非其

主本ヲ不取失、尚武ノ風盛ニ相振ヒ、文學ヲ以テ

皇國ヲ尊ヒ、夷狄ヲ賤シ、

天朝ヲ崇敬シ、君父ニ忠孝ノ実ヲ尽シ、名分大義ノ

筋ヲ明ラメ、推テ古今治乱興廢ノ機ヲ審ニシ、政体

ノ要ニ達候様、人才御養育有御座度、然処近来因襲

ノ弊、文武各別ノ者ノ様相成、何共歎ケ敷儀ト奉存

候、文武不相岐儀、人才御養育ノ専務ニテ、第一武

道ヲ廢候テハ不相濟儀ニテ、自古文華盛ナレハ國家

必ス相衰候例、往々不鮮儀ニ御座候ヘハ、文武並行ハレ武ヲ以テ主本ヲ立候様有御座度、左様御座候ハ、人々性質ノ高下浅深ニ從テ各其才ヲ長シ、文ニ長シ候者モ武道ニ疎カラス、武ニ長候者モ文学ヲ廢スルニ至ラス、往々人才出来可申奉存候、以上、
(文久元年)
酉十二月四日

有馬新七

四五四 全上第五

此節 御參府ニ付、段々御供人数被召重候儀ニ付テハ、御城下ハ勿論諸郷迄モ人心動揺仕居、且御供奉願候テモ不被仰付候ハ、押テ隨從仕度志願ノ者モ有之、又ハ御供不被仰付儀ニ付テハ、我等ハ役ニ不立筈故、役ニ立候人々如何様トモ被致、可然忤ト世称候者モ有之、古昔ヨリ御国之風俗勇武ニシテ、奉重 君公、艱難ノ期ニ臨ミ不顧身命、人ニ後レ候ヲ深く恥辱ト致候故、其余風殘居、此節ノ儀ニ付テモ、ケ様ニ御供等奉願候者モ余多有之儀ニテ、御国家ノ御幸ト奉存候、併万一モ御參府ノ期ニ臨ミ、(突出トモ唱フ、脱走ノ通語、大久保利通日記參考スヘシ)銘々御跡ヲ奉慕馳參候様成立候テハ、実ニ一大事ノ御事ニテ、却テ重大ノ儀ヲ敗候儀ニモ相成可申候ニ付、此ニ於テハ一統人心安堵仕候様御

処置有御座度、右ノ御処置ニ於テハ、乍恐 君公御書取ヲ以、此節 御參府ニ付テハ不容易御時節故、御供人数被相重候、就テハ御留守中ノ儀、是亦重大ノ御事ニテ、甚御念遣ニ被思食候間、諸士諸郷ニ至迄誠忠ノ心ヲ存シ、御国体聊無動揺様相心懸、万事致精勤候様御頼思食候趣ヲ以、御丁寧ニ御教諭被為 在、乍其上是非隨從仕度ト申勢ニ候ハ、御請書為致誓詞被仰付度儀ト奉存候、
(旧邦秘録參照スヘシ)

一諸郷ノ儀モ近年來格式名実不相応ノ儀有之、諸郷有志之者ハ甚不服ノ訳ニ御座候間、

御先代様被定置候御規格モ有之候ニ付、古代ノ通ニ被復、名実致相当候様有御座度、左候テ名ヲ以テ其実ヲ被為責候ハ、諸郷衰微ノ極トハ乍申、随分振立候様罷成可申、只今ノ通ニテハ人心和同不仕、交難到来ノ砌ハ旁棍難ノ儀到来可致ハ、按中ノ事ト奉存候、尤当分(外城土中貧困ノ者ハ一時足輕ノ職務ニ從事スル者多シ)御備足輕又ハ家來奉公等仕居候者ハ、其身一代ハ足輕家來ニ被仰付度、(若党奉公スルモノモアリ)無左候テハ御用場御差支ノ廉モ可有御座ト奉存候、

右ノ通被相定候上ハ、(義久、義弘ニ付)御先代様被仰出候通、武役不相調者ハ、所帯没収被仰付候旨被仰渡、一涯武道

相勸候様有御座度奉存候、兎角非常之御時節ニ御座候間、姑息因循ノ御処置而已ニテハ如何ト奉存候間、乍恐非常之御英断ヲ以テ、断然タル御所置有御座度奉存候、

(文久元年)

十二月十七日

有馬新七

右之趣猶亦喜入攝津高殿・御側役小松帶刀殿へモ、篤

ト申入置候事、

四五五 全上第六

前文欠失二〇行後の「私式至愚淺陋……」以下は、有馬新七先生伝記及遺稿による」と前文にあたる

一学文ノ儀、華夏夷狄ノ分ヲ致明弁候儀勿論ニテ、

本朝ヲ尊ヒ外邦ヲ賤ミ候事、固ヨリ当然ノ儀ニ御座候へハ、彼ノ西土ノ周孔ノ教モ 本朝ニ折衷シ、風土人情ノ宜ニ随ヒテ致取捨候様有御座度、依テ造士館ニ於テモ、本朝ノ御国典ヲ読ミ、御国体ヲ致弁明候儀ヲ第一ト致シ、西土ノ経籍賢伝ヲモ致講究候様被仰付度奉存候、此レ乍恐 應神天皇儒教ヲ取ラセ賜ヘル御本意ニテ、孔子正名ノ旨趣ニモ致契合可申敷ト奉存候、依テ士臣学文ノ標的、此ノ儀ヲ第一ノ根本ト仕候様被仰付度奉仰望候、苟モ此ノ根本ノ大(第九)一義ヲ不取失候ハ

、学文ノ筋ハ自然正敷罷成、今日所読ノ書、所行ノ事、忠義孝敬ノ実ヨリ外ニハ出申間敷敷、其中傑出之人豪ハ人々ノ質性修行ノ精粗ニモ可依候へトモ、無用ノ空言ニハ馳騁仕間敷奉存候、

一天兒屋根命ノ神社ヲ学校へ御建立有御座度、尚武敬神候事、本朝当然ノ義ニテ、兒屋根命 天孫ヲ奉保護ノ功業、固ヨリ神代ニ赫然トシテ、忠誠盛勲万世ニ光輝シ、実ニ士臣ノ標準ニテ、殊ニ 兒屋根命ハ近衛家ノ始祖ニテ、近衛家ノ儀ハ 御家ニ於テモ御由緒モ有之儀ニ御座候へハ、右之神社御建立御座候テ、学文ノ標的主本ヲ明ニ士臣ニ示サセラレ候、標有御座度奉存候説也私式至愚淺陋誠ニ以奉恐入候へトモ、当時 本朝ノ形勢ヲ窃ニ審察仕候ニ、何方モ政綱不振学風衰墜シ、泰平ノ氣習ニ相染ミ、文武ノ末流ニ溺レ、格別振立候藩進モ無之、且彼ノ夷賊等辺隙ヲ窺覷ノ時ニ当リ、天下ノ形勢モ致一變、誠ニ不容易御時節柄御座候故、士氣振起 御国本堅固ニ罷成候テハ、乍恐 皇朝之興廢ニモ可相係儀敷ト窃ニ痛心仕候、且学文ノ儀名義ヲ正シ候儀第一義ニテ、文武一致、政令一体罷成候事、要領主本ニテ、只文辞章句ノ末流ニ致馳騁候テハ、書籍ヲ読覽候迄之事ニテ、

今日 御国家ニ於テ御用立候儀有御座間敷奉存候、然
 此節別段ノ思召ヲ以テ、造士館初メ一統へ此迄ノ旧
 弊御一新被為遊ノ御趣意誠ニ以テ難有、士臣何レカ御
 盛意ヲ奉承遵守仕リ、感發興起可不致哉ト奉存候、就
 テハ何卒御趣意之趣天下万世ニ行キ渡リ、御国家益
 興隆シ、皇朝之御楯諸藩ノ模範ト罷成候様有御座度
 念願奉仰望候、私式至愚淺陋ノ存慮申上候テモ、御用
 立候儀千万有御座間敷、如何計奉恐入候へトモ、区々
 ノ本心難黙止、恐ヲモ不奉顧存分ノ趣左ニ申上候、
 此建言上文及ヒ結末欠失、年月日ノ如キモ分明ナラス、文旨ヲ
 以テ考フルニ文久元年ナラン乎、

四五六 有馬新七英敵雄へ与へル書

前文欠裂

敝慮ノ程奉恐入、臣子之道永ク廢レ可申(上文新七建言

第二ト全文故ニ略ス)

記ス処ノ英敵雄ハ、何人ナルヲ知ルニ由ナシ、稽フルニ
(孟韓安政五年九月卒)
 梁川星巖ナラム、尚ホ考フヘシ、

四五七 有馬新七町田助太郎(久成旧名)へ与フ

ル書

尊書昨晚相届拜見仕候、然ハ伍人組合之儀、昨日一統
 集会、銘々吟味ノ上小頭相究、伍人一体難難相救、且
 父母兄弟并親族ノ交等疏遠無之、其他愚存云々ノ趣共
 委細申聞、一統承服ノ体ニテ、先以仕合ニ奉存候、
 一 先日申上候入作一件、是迄役々御法違ノ儀、何分御吟
 味ノ上被仰越度、尤爰許家中方戸口相調方モ、漸ク今
 日中ニ首尾相成可申候間、明日モ何分委細可申上候間、
 左様思召可被下候、

(御座所ノ通地)
 一 御物方ニ不係、大概ノ儀ハ、石谷中ノ法相立置申渡相

考申候、罪ノ輕重相究、或ハ座カコヒ、或ハ科仕等ノ

如キ類御規定有之候テハ、如何可有御座哉、余リ繁雜

ニ相成候テハ、如何ニ奉存候間、法ヲ三章ニ約スル位

ノ事ニテ宜敷候半敷、何分御勤者可被下候、

一 後々入作致サセ候ニ付、御取揚相成候儀ニ候ハ、右

ノ所務丈ケハ爰許へ儲置候テ、困究者共へ救ノ方ニ御

差向相成、年々他所へ作ラセ候ナリトモ、爰許ノ者共

へ作ラセ候ナリトモ致シ候テ儲置候ハ、少ナリトハ

救助ノ為相成可申ト相考申候間、是亦御勤者ノ上、何

分被仰聞度奉存候、

右ノ通御返封迄申上候間、何分被仰聞可被下候、尤入

作之一件弥御免許相成儀ニ候ハ、何分被仰聞可被下候、左候テ此節規定屹卜相立置、決テ富人兼任之義不相成、少ニテモ^{窮乏}究人救助ノ為相成候様仕、一帳取立呈上置、爰許ヘモ召置、年々吟味ノ上、残丈ケ他所へ具付候様仕度、此段モ申上候、以上、

六月廿二日

自石谷

有馬新七

本府

町田助太郎様

要詞

四五八 有馬カ書類中ニアル武術師範新古人名

(文化頃ノ人名乎)

芸術

刀術

一示現流

東郷 藤兵衛

伊集院 彌八郎

種子島 次兵衛

田中 五右衛門

大山角 四郎

一大刀流^(マ)

一飛太刀流

和田源太兵衛

田中 喜助

小野郷右衛門

野崎次郎左衛門

大脇主右衛門

鈴木 紋十郎

東 次郎左衛門

有川 彦左衛門

有 川 恰

木藤太郎右衛門

吉村 六右衛門

加藤 九兵衛

外山 仲右衛門

一鏡智流

槍術

梅田 九右衛門

白尾戸 後右衛門

一大島流

佐久間 勘右衛門

一^(穴カ)澤流

弓術

一日置流

東郷 長左衛門

文久元年 (1861)

一大坪流

一神當流

一鎌倉流

馬術

一〔殺野流力〕

大砲并火術

一稻留流

砲術

一吉田流

町田佐次右衛門

川田伊蔵

比志島要人

川上十郎左衛門

坂元源蔵

朝倉彦右衛門

黒木仁右衛門

小山田專蔵

港川織治

川崎大右衛門

和田乗助

種子島次郎右衛門

郷原金太夫

末川將監

高田茂太夫

伊集院半五郎

平田平右衛門

一狩流

一石州流

一池之坊流

活花

一伊勢流

〔マ〕方

一御家流

一右同古流

一甲州流

兵学并兵道

一高麗流

丸田孫左衛門

長沼嘉兵衛

新穂善阿彌

伊集院主人

村田源阿彌

榎本新助

森圓阿彌

丹生彌兵衛

岸喜右衛門

伊勢巨

有馬衛守

野村四郎左衛門

田中清右衛門

右松十郎太

園田與藤次

高橋甚五兵衛

四五九 無名ノ建言(道島正亮乎)

前文欠失

當時人氣混雜及紛乱候基ヒ、大概御諒察モ可被為在賦
ト奉恐察候ヘトモ、大意事情等細ニ相探候次第、逐一
左条ニ奉申上候、

一亡高輪様御在世中、天下ノ人氣(直野)并伊奸計ヲ被旋候付、

諸侯御有志ノ御大名方初諸藩臣ニ至迄、奸悪ノ致取扱、

折柄鎌田出雲下国ノ御、無拠(近衛家)詔合ニテ、暫滯京被致候折

節、陽明家杯ヨリ段々不容易被蒙御内命、其上品々御

懇ノ御意トモ承知被致、既ニ滯在中所謂諸浪士トヤラ、

公武御不服ノ詔杯ノ評説モ有之、無和理陽明家ヨリ薩

州侯ヲ兎角御力ニ思召外無之、守衛人数差出呉候様御

願出付、無拠御情合ノ御事故、出雲御受書(安政五年)

ノ部参看) 迄モ被致無程被罷下候処、太守様御隠レ

後ニテ力ヲ被落、高輪公ノ思召中々左様ノ事共難申解、

殊更豊州家勤役中ニテ、実ニ順聖院様御在世中思召

有之、後迄モ悉ク御取廻シ相成候折柄ニテ、是又一統

ノ人氣モ紛々ニテ、陽明家ヨリ御願入ノ事共、千万相

整候勢無之、壯士ノ者共京師ヨリノ御趣意モ相拒、イ

ツレ此上ハ異変ノ節ハ、突出可致杯ト申合ノ人数モ相

応ニ有之、其後、高輪公御没後、当御代ニ相成、左衛

門再動ニテ、何事モ三郎様(久光公)へ時々御相談被遊、御政

事ニ付テハ身命ノ限リトノ尽微力、御役進退等ノ所迄

モ一々御打合ニテ、正邪明白御処置被為在、兎角本ヲ

居、先御代ノ通御合体ニテ御政事向被遊、一統ノ人氣

四民ニ至迄、挙テ難有狩リ、順聖院様御代ノ如ク一

体ノ振舞モ有之、イツレ本法ノ御政事被為調度、第一

下情モ能ク相通シ来候処、諸浪士共既ニ

京師ニテ紛々成立候テ、

朝廷ノ御危難旦夕ニ御差迫リ候杯ノ風説ニテ、段々探

索方ニ被差出、且此以前亡命イタシ候關山ノ家来(伊)蘭牟

田昌平ト申者、御国元ノ様忍込、日州表閑道筋為取締

方御裁許掛廻動横目杯不審ニ考被召捕及糺明候処、形

行相誤諸書付等数通携居、其内ニ御密書ト相見ヘ候物

モ為有之由、其俣御当地ヘ差廻候処、表通及糺方候テ

ハ、第一君側四五輩ヘ相拘詔モ可有之候哉、尤初発密

ニ差出候後相願レ可申ト手ヲ廻シ、表通監大察方ヘ不

被差出内、君側ノ者御裁許掛方ヘ参リ、此節被相捕候

者、別段重キ御用筋ニテ御側ヨリ被差出置、其故諸書

附類御渡給候様、再三為申由候へトモ、不承知ニテ、我々儀御用命ハ、夫々大監察ヨリ承知待上形行右方へ不申出内御渡シ申上候儀、決テ御断ト申捨置、職分不相成、当然ノ所ヲ以テ相答由又候參リ、三郎様御内沙汰故、相渡呉候様起テ承候由候へトモ、前件ノ形行ヲ以テ相答置候由、不及是非其場引取、筋々監察方へ為差出由、基彼等共極密ニ相謀候訳有之故、御内用ノ趣ヲ以テ、監察方へ不相響様取計可申賦ト被察申候、段々承得候処、蘭牟田昌平ト谷山町人は枝龍右衛門名前ノ者、道伴ニテ忍入候由、御当地ニテハ、小松家モ兼徳森山東圓所へ為相忍、尚亦

京師辺ノ都合向ヲ彼等へ託シ為相謀候由、旅用金等モ相与へ、蘭牟田井ニ右谷山町人同道ニテ、五日ヲ不過再ヒ出立為仕、其節蘭牟田昌平申出ニハ、田中河内ノ經助助ト申ハ、格別成中山候ノ謀士ニテ、一休

主上へ密路有之、尤御危難ノ次第モ細詳為申出趣ハ、其節致取扱候御裁許掛ヨリ慥ニ届申候、京師ノ方へ是迄密ニ致掛引候者共、専田中河内ノ助方へ、前件ノ蘭牟田井是枝龍右衛門兩人へ託置、相謀候儀別条無御座候、

一昨春御上京、前以柴山愛次郎并橋口宗助ト申者、江戸道徳糺合方詰ノ名目ニテ俄ニ差出、勿論兩人儀ハ学問等モ相応ニ有之、諸有志へ引合、此節御上京ノ上ハ、是非高忠、関白ニ酒井忠義、京都所司代九條・酒ヲ征伐御退治ノ思召ノ旨ヲ以テ、及内応候由、其証拠ハ御出立前ニハ市來湊辺へ段々諸浪士トモ踏込来、為応接有馬新七其外同類ノ者共、湊辺迄差越及応答候、既ニ御上京迄ノ間色々及混雜、伏見ニテ味方打寺田忠等ノ始末、其上田中河内ノ介初五六輩ノ人数頭彼へ相謀ラヒ、京師ノ事情モ探索被致、色々ノ混雜追屯候テ、路ヲクラマスノ一策ニテ、終ニ大坂ヨリ乗舟ニテ為相果候由、初ノ人数最期ニ臨ミ寔ニ案内ノ諷ニテ、何様ノ罪ヲ以テケ様御取扱被成候哉、是迄薩州ノ為ニハ、機密ノ事ヲ謀候儀モ有之、其段ハ当御側へ被相動候方、訳筋ハ飽迄御案内モ可有之抔トノ趣為申由、今以テ其場ノ次第難忘段、同船乗込居タル者共相咄候、兼テ

王朝カト唱候君側へ相勤居候四五輩ノ人数ニテ、御政事ノ上ニ付テモ、都テ打丸メ、両公ヲ看シタフラカシ、彼等共奸策ヲ施シ、国家ヲ大切ニ奉存正道相立候諸役人ハ悉ク私曲ヲ以テ罪ニ落シ付、且ハ下官ノ御役場へ相転シ、終ニ彼共力為ニケ様成大変ニ陥リ、愚夫愚婦

ニ至迄奴原共ヲ別テ相悪ミ、彼カ肉ヲ喰ハントスル勢ニテ、是ヨリ變ヲ生タルハ社稷モ是限りニテ、実ニ薄氷ヲ踏候心地御座候、御家御運氣未タ日月地ニ落ストノ道理ニテ、幸ノ折柄御踏込被成下候、無御拋御間柄ノ御事ニテ、起テ御氣張被成下度儀ト奉懇願候、現在

朝廷御危難ト申程ノ場ニ至リ候テハ、中々一日片時モ誰人可止訳ハ、嘗テ一人一己タリトモ突出候儀、理ノ当然ニ御座候ヘトモ、何分趣意トハ今日ノ論ニハ合不申、此期ニ相成候テハ、(御家御運氣未タ日月地ニ落スト)彼等党中モ紛々ノ様子ニ被聞

申候、

(鳥津)一左衛門初落シ候基ハ、第一有志ヲ相拒、彼共力趣意ヲ不執用、剩過分ノ賄路ヲ貪リ候儀色々申込、下町人濱崎太平次ト申者ハ、全体右衛門頼入候銀主ニテ御座候処、彼ヨリ過分ノ金子ヲ掠取候杯ノ怪敷説ヲ以テ、様々釀立候儀為有之由、下々ノ人氣承繕候ヘハ、格別左衛門器量ト申程ノ事ハ有之間敷候ヘトモ、第一国家ニ一身ヲ抛タレ候儀、一同致称美、勿論全ク無私人物丈ケハ無疑候、順聖院様御代格別御執用ニテ、内外ノ御用向被仰付来候付、筋合ハ決テ能々為心得人物ニ無

相違、正道廉直ノ質ニテ不思議二人望ハ御座候、

一西郷吉兵衛ト申者ハ、順聖院様格別御召仕相成タル者ニテ、無拠訳合ニテ、井伊奸計ヲ被施候砌ニ、大島(德)ヘ一往為御潜、昨戌春被相帰、(鳥津久光)三郎様御上京前広下ノ關辺マテ御内用筋ニテ被召出置候処、浪士トモ跋扈イタシ、難忍難題ヲ折留ル(行方)タメニ、下ノ關ヘハ君側ノ方ヘ一封ヲ残置、大坂迄走出候処、果シテ其通諸浪人(孫)体ノ者ハ勿論、同藩ノ者共ハ江府ヨリ詰ノ内ヨリ拔出、散々ノ景氣ニテ及心配候、御内実弥御趣意ト申所探リ得不申故、一ト先兵庫辺マテ御迎ニ罷出奉伺度所存御座候処、最早其節ハ奸賊共舌頭ニ掛リ、君意モ離レ居候折柄、何事モ水ノ泡ト成行、大坂ヨリ乗船セシメ、山(孫)川(大島郡)ヘ被差廻、一旦ハ徳ノ島ヘ被遣置候処、又々二度押シノ場ニテ永良部島(同上)ヘ被相替、座困ニテ昼夜不明様島人共番付ノ由、當時此者被召帰時宜ニ成立候ヘハ、弥人氣モ鎮リ平和一致イタシ候儀無疑、仰願クハ佞奸人五六輩ハ涯々御退ケ、吉兵衛被召帰候ハ、如何計リ御国ノ力ニ可罷成哉ト、有志朝暮此事而已歎息苦心仕候、イツレノ筋 御国家ヲ傾ケ候巨魁五六輩文ハ、吃ト不被処嚴刑候テハ、諸人一同ノ耳目改リ申間敷ト乍

憚奉至願候事、

此書何人ノ記シタルヤ詳ナラサルモ、當時有志者ト藩庁俗吏ノ間軋轢甚シク、伊牟田カ如キハ暴人ト唱へ、捕縛シタル等ノコトハ事実ニ徴シテ誤ナキカ如シ、其他藩内ノ情況稍ヤ其実ヲ穿テリ、

四六〇 参考 筑前志士傳鈔 市来広貞正誤及説明

平野二郎

平野國臣通称二郎、大中臣姓、月廼舎友・月庵・柏舎ハ皆其号ナリ、父平野吉三能榮、氣節アリテ使杖縛縛ノ術及拳法ヲ精究シ、福岡藩先鋒隊ノ教師タリ、都甲氏ヲ娶リテ四男子ヲ生ム、伯ハ都甲乙宣麿、仲ハ國臣、叔ハ平山卯八郎能忽、季ヲ平野三郎能得トイフ、皆誉望アリ、國臣文政十一年戊子三月廿九日福岡城下早良郡地行下町ニ生マル、小字巳之吉、後乙吉、又雄ト改ム、幼ニシテ穎悟其兒戲スルヤ、常ニ己長トナリテ群童ヲ指揮セリ、銃手隊長大音權左衛門重信ノ家ニ在リテ、其使令ニ供セシニ、銃手班頭小金丸産六種一見テ養子トシ、女ヲ以テ其妻トス、故ニ小金丸雄助種言ト改メ銃手ニ列ナリ、後源藏種徳ト改ム、普請方手附トナサレ、江戸邸ニ祇役シ

ケルニ、京都ニ入り、禁闕ヲ拜シテ志ヲ述ヘリ、

大内ノ山ノ御カマキコリテタニ

仕ヘマホシキ大君ノ辺ニ

江戸ニ至リ寛永・増上ニ寺ニ遊ヒ、其金碧煌耀タルコト大内ニ過絶スルヲ見テ、大ニ憤懣ヲ抱ケリ、此頃墨使入港シ、和戦ノ議論沸騰ス、國臣是ヲ見聞シテ幕府諸藩トモニ恃ムニ足ラスト思ヒ、武技ヲ練リ兵書ヲ読ム、時ニ普請方ノ屬吏皆弊風ニ安ンシテ、各私ヲ營ム、國臣是ヲ矯正セントシテ同僚ト合ハス、終ニ職ヲ辞ス、安政二年岡部簇威明等、長崎諸用聞次定役^{定カ}ニ任セラレ、築宮ノ冗費戍卒ノ弊習ヲ釐革セントス、國臣同志ノ戸田六郎茂弘、吉田太郎正實ト共ニ其屬吏トナリ、長崎ニ行役シ、勉メテ其事業ヲ輔成セントス、其暇ニ秋月ノ坂田九郎右衛門諸遠カ其地ニ寓セシニ就テ、武家ノ故実ヲ学ヒテ古ヲ慕ヒ、直垂烏帽子ヲ制ス、其時英佛二國入港シ、幕吏是ニ会シ、其無礼ヲ甘ンシ受クルヲ見テ、益憂憤ヲ抱キ帰藩シケルニ、威明等他職ニ転シケレハ、終ニ職ヲ辞シ、奏案ヲ廢シ、書籍ヲ售リテ甲冑ヲ買フ、或時烏帽子直垂ヲ着シ、笛ヲ吹テ街上ヲ徘徊ス、路人顧ミ怪メトモ意トセス、知ラサル者ハ狂スト思ヘリ、又家ヲ出テ帰ラサルコト十日

ニ及ヘリ、四方ヲ搜索セシニ、武蔵村温泉ニテ獲タリ、

其故ヲ問ヘハ、志摩郡馬場村ノ犬馬場ヲ熟覽シ、那珂郡同上

志賀島人ノ伝ヘシ射場ヲ問ヒ、且温泉ニ浴シタリト答フ、

父兄斯クテハ養家ニ煩ヲカケンモ測リ難シトテ、安政四

年仕ヲ致サシメシニ二兄ヲモ顧ミス、生父ノ家ニ還リ、

平野二郎國臣ト改、獨醒軒ト号シ、額髪ヲ存シテ剃ラス、

力ヲ弓馬ノ故実ニ専ラニシ、最大追物ニ心ヲ寄せ、馬ヲ

馳セ、射ヲ試ミ、其書三卷ヲ著ス、同年五月邦君黒田少

將後中ノ出行ヲ窺ヒ、駕前ニテ上書セシニ、咎メテ幽閉

セシメラレシカトモ、其身ヲ顧ミス志意ヲ告ケシコト殊

勝ナリトテ、不敬ノ罪ヲ免サレケリ、此時幕府 朝廷ヲ

輕蔑シ、 叡慮ヲ奉セス、外國人ノ思愾ニ庄サレ、其跋

扈ヲ制スルコト能ハス、私ニ交易ノ条約ヲ結ヒシカハ、

志士憤言激論シテ天下恟々タリ、雲上ニテ「濁ラシハセ

シ方脱カ四ノ國民」トノ 御製アリシト聞ヘケレハ、國臣感激

ニ堪ヘス、御製ヲ写シテ其尾ニ、

カクハカリ惱メル君ノ御心ヲ

休メマツレヤ四方ノ國民

トカキテ、尊攘ノ意益切ナリ、安政五年攘夷ノ勅書ヲ水
戸中納言齊昭卿ニ賜フト聞キ、國臣欣然トシテ志ヲ遂ル

時至レリトテ、都甲楯彦ト改メ、遊學ニ托シテ國ヲ出テ

入京シ、同志ヲ求メ、小林民部権大輔良典・田中河内介綏

猷・頼三樹八郎醇・梅田源次郎定明等ノ諸名士ニ会シ、

義挙ノ意ヲ論説セシニ、皆其意ヲ感賞ス、マタ近衛公・

中山中納言・大原左衛門督ニモ謁見シ、其志趣ヲ窺得テ、

愉快ノ思ヒヲナセシニ、羈府ノ老問部下総守入洛シ、小

林・頼等數十人ヲ捕ヘテ、江戸へ護送シケレハ、國臣慨

歎シテ京師ヲ去リ、東西ニ奔走シ、長門ノ白石尚一郎、豊

後ノ小河彌右衛門一敏、筑後真木和泉守保臣等ト相謀リ、

素志ヲ成サントス、始メ保臣カ勤 王ノ志篤シト聞キ、

往テ面晤ヲ乞ヒシニ、余ハ罪囚ノ身ナレハ、人ニ逢フコ

ト能ハスト答ヘケリ、國臣嘗テ彼レ琵琶ヲ好ミ、常ニ錦

旗ノ下ニテ彈セント欲ストイフト聞ケレハ、

四ノ緒ノ古キ調ヘノ音ニメテ、

聞エマホシク兼テシノヒツ

ト詠シテ贈リケレハ、保臣

世ノ中ニヒキミタサレテ四ノ緒ノ

ヒトヲモ今ハシラヘアハナクニ

ト和答シ、談論シテ意氣相投シ、家ニ留メ、後ニハ聳ニ
モセントマテ親ミケリ、洛東清水寺ノ成就院月照忍向ハ、

尊攘ノ意深ク、近衛家入幕ノ實ト称セラル、幕吏是ヲモ捕ヘントス、月照避ケテ、僕大槻重助ノミ隨ヘ西国ヘ下リ、近衛公ノ密書ヲ諸大藩ニ伝ヘント欲シ、先福岡ニ入シニ(此處)(此時近衛公ノ密書ヲ携ヘタルニ非ス、同公ノ書類ハ前年因老鎌田出雲正純滯京中授ケラレシ書アリ、今同家ニ秘藏ス、此時月照ハ辛フシテ洛中ヲ出タル故、機密ニ罹ル書類等ハ決シテ身ニ添タルニアラス)幕吏蹤跡スト通スル者アリ、鷹取養巴惟寅等寓セシ薩藩人北條右門時村・工藤左門経徳ト相謀リ、薩藩ニ入シメントスレトモ、導者ナシ、國臣座シテ線絛ヲ受ンヨリ、遁去ニ如カス、余送ラントテ、月照ヲ修験者ノ姿ニ替シメ、己ハ其徒トナリ、胎岳院雲外ト称シ、重助ト三人筑後ヨリ船ニ乘リ、艱闕シテ鹿児島ニ達シケレトモ、舍シ匿ス者ナシ、独西郷吉之助隆盛憐ミテ潜匿セシメントスルニ、幕吏追来リ、藩主ニ告ケテ探索スルコト甚タ急ナリ、隆盛サラハ日向ニ遁レントテ船ヲ発セシニ、御船ノ冲ニテ、潮逆ヒテ船進マス、且取手追及ハントス、月照免レサルヲ知り、置酒詠歌シテ、曉ニ西郷ト相抱キテ海ニ投ス、國臣ハ醉眼シテ知ラス、其音ニ驚キ眼ヲサマシ、眼ヲ開キケレハ二子見ヘス、遽テ、船子ヲシテ海ヲ探ラシメシニ、両骸ヲ獲テ治療シケ

ルニ、隆盛ハ蘇息シ、月照ハ終ニ死セリ(記ス処ハ事實誤レリ、旧邦秘録・石室秘稿等ニ詳載ス、参看スヘシ)、時ニ安政五年十一月十六日ナリ、國臣重助ト共ニ其葬ヲ営ミ、其行装中ノ遺書ヲ人ニ見セマシト、密ニ己カ懐ニス、而シテ重助ハ縛セラレ、國臣ハ逐レタリ(重助縛セラレタリ云々、大ニ誤レリ、月照死後藩庁ハ町役人ニ命シテ厚遇シ、月照カ埋葬等ニモ預カラシメ、後旅費ヲモ与ヘテ帰京セシメタリ)、思ヘラク、常服ニテ通行セハ、薩ノ風ニテ必迫脅スヘシト、常ニ身ヲ離サヌ烏帽子直垂ヲ着テ(平野カ烏帽子直垂着云々等ノ挙動ハ全ク誤聞ナリ、旧邦秘録ニ詳記ス、参看)横笛ヲ吹キ市街ヲ徐歩ス、藩ノ志士輩平野ナルヲ知り、懇遇シテ旅費ヲ与ヘ、且護卒ニ善視ヨト命シケレハ、恙ナク関門ヲ出去リ、家ニ月照ヲ祭ル者ナキヲ悼ミ、靈位ヲ設ケ、静溪院鑊水月清比丘ト題シテ祭ヲ行ヒ、忍向カ始末ヲ著シ、西海波間ノ記ト題セリ、マタ秋月藩宮崎司ト称シ、微行シテ十二月中旬入京シケルニ、幕吏勤王志士ヲ搜ルコト甚嚴ナレトモ、怖レスシテ近衛家ニ詣リ、月照カ遺セシ中ノ殿下ニ關係スル書ヲ呈シテ、始末ト機密ヲ漏サ、リシヲ告テ、其憂慮ヲ解キシカハ、公高貴ノ婦人ヲ以テ、汝ヲ見テ其勞ヲ謝スヘケレトモ、時勢ニテ意

二任セス、速ニ京ヲ去リ遠國ニ潛ムヘシト宣ヒケリ、國臣ハ之ヲ聞キ、寓主ニ告ケスシテ去ラント欲スレトモ、飯錢ヲ附与スヘキ術ナケレハ、兼テ買置シ臥被ヲ其料ニ充テ、留メヲキ、遊覽ニ托シテ立去リ、備中連島ノ三宅貞太郎高幸カ家ニ寓シテ買売セシニ、利ヲ失ヒ去リテ、赤馬關ノ白石尚(尚ハ正ノ誤)一郎カ宅ニ匿ル、萬延元年二月薩土堀某忠左衛門貞通 歟(八仲ノ誤)来リテ、去冬東武ニ在シニ、水戸士一挙センコトヲ我等ニ謀リシカトモ、弊藩ハ別ニ志ス処アリテ応セサリキ、然ルニ此書ハ貴藩ニ獻セント欲スル故ニ、君ニ托ストテ國臣ニ附与シケレハ、微行シテ帰國シ、人ニ依テ藩庁ニ呈セシニ、却リテ嫌疑ヲ受ケレハ、密ニ去リテ又馬關ニ寓ス、果シテ志士櫻田ノ挙アリ、國臣是ヨリ薩藩ノ依頼スヘキヲ知得ケレハ、己カ志意ヲ説ントテ、薩摩ニ至リシカトモ、関門嚴ニシテ入ルコトヲ許サ、レハ、熊本ニ還リ、普ク志士ヲ訪ヒ、玉名郡松村大成古文(熊本県)号空 カ家ニ姑ク寓シ、後密ニ帰藩シテ同志ニ相謀リ、マタ馬關ニ匿レシカ、本藩ニ憂フヘキ事アリトキ、建言セシニ、又吏人捕縛セントシケレハ、間道ヲ經テ再ヒ大成ニ依リ、薩士高橋某カ僕トナリテ、鹿兒島ニ入りシカトモ志ヲ得ス、

我胸ノモユル思ヒニクラフレハ煙ハウスシ櫻島山ト詠シテシラレントス、其藩士堀忠左衛門貞通・大久保正助利濟後・有馬新七正義三人、國臣カ常人ナラサルヲ知り、追送リテ終日談論シ、戲謔ヲ交ヘ、夜ニ入りテ別レ去リ、大成カ家ニ達シ、宮部鼎蔵増實・永島三平・山形典次郎等カ周旋ヲ受テ日ヲ送レリ、カク家ヲ棄テ奔走スレトモ父母ヲ忘レス、爰ニ本藩ノ南境西小田村ノ人岡部甚助諱 字士 昔ハ、書ヲ好ミ尊王ノ志ヲ同クシケレハ、國臣肥後ヨリ来リ、此人ニ就テ親ノ安否ヲ問ヒ、マタ自暗夜微行シテ帰省ス、此時本藩ノ吏人國臣カ禁ヲ犯シテ激論ヲ唱フルヲ憂ヒ、捕収ヲ出シテ搜索スルコト嚴密ナレトモ、己カ才略ヲ以テ遁レ、人ノ志ヲ知ルト其手ヲ怖ル、ニヨリテ免レタリ、文久紀元田中綏猷・清川八郎正明・安積五郎武貞等肥後ニ来リ、其藩ノ志士ト会シ、尊攘ノ挙ヲ議シケルニ、皆今ノ諸侯ハ共ニ謀ルニ足ラス、只志士ヲ募集シテ大挙セントス、國臣ノミ雄藩ニ依ラスシテ、只草莽蟻聚ノ徒イカニカヲ尽シタリトモ、何事ヲカ成得ヘキトイヒテ其説合ハサレハ、サラハ余ハ薩藩ニユカントテ別レタル、(リカ)清川・松村不平シテ、各詩ヲ賦シテ送別ス、此頃國臣ハ、秋月藩田中作八ト称セリ、十二月福岡藩

要人ヨリ薩藩要人ニ書簡ヲ贈ル使ナリト偽リ、其書函ニ己カ意ヲ述ヘシ回天管見策等ヲ納メテ鹿兒島ニ至リ、逆旅主人ニ就テ、書函ヲ達センコトヲ乞ヒシニ、其函上ノ姓名ヲ見テ、是レ今ノ要人ニアラスト怪ミシニ、國臣是筆者ノ誤ナラント分解シテ、終ニ其藩庁ニ達スルヲ獲タリ、其回天管見策曰、

謹觀天下之形勢也、西洋馱舌之猾夷、陸梁刃陲、將令赫々神明國、變為腥羶之荒域矣、譬猶人體醜癩疽之勢、其機不安、固勿論耳、自癸丑夏、墨夷始至於江門、于今九年、雖有先哲往々建言上策、悉作空論死談、於是乎忠臣解骨、寔可惜也、幕府有司、不啻無一英斷士、讒諂面諛之徒、跋扈府庁、内比周以愚其君、外距諫以蔽其明、宗族咸遠、忠臣尽黜、水黃門（光朝）・烈公亦已即世、兄弟鬩牆、外召其務、竟覆魁車、軌軌不箴、泄々沓々、至于今日何也、曰為安苟且狎長治之弊而已矣、於今黯然不察、益陷黠夷之術中、開卷藉地、而使四海八面咸為渠之巢窟也、且纒破四方海灣之蛮舶凡百余、迭更往復、必運物射財者、所要因糧於敵之術矣、夫虜浚國之膏沢、猶抽繭之緒、不尽不止、詩云池之竭矣、不云自頰、又云誰謂雀無角、何以穿我屋、浸淫漸漬、可不深謀遠慮哉、殊虜事商賈、惟利維計、故不

奪不饜、狡黠貧狼、習為性也、是以眩惑庸吏、昭誘姦賈、鈎賈銀、餌洋錢、以鈎吾金錢、網吾穀帛、運諸海外、所謂藉兵於寇、齎糧於盜之失策也、國非其國之幾、歎歎不足、且夫以海內有限之物、售海外无疆万国、以必用易浮冗、奚得莫困窮哉、維欲奪我神州、施術之門戶、絶粮活策也、不可不障也、頃年幸無風螟旱雨之災害、而物価騰貴、勝于古凶歲者何也、曰無他、肉食無墨、不精政務、屢革鑄貨幣、剝墜品量之故、而実非物貴、獨貨貴也、実非貨貴、不得其度也、非其度而委之浮位、強融通焉、譬猶斤吏小人、而乘君子之器也、故錢者、在貨与物之間而賤益究、遂舍諸海外、亦不足怪矣、今夫諸國各領、雖有紙錢、而適似弁日月、倘天下有事、則何以汎通國用乎、嗟吁愛哉、散而不再鳩也、古者足利氏、称臣異域、阿貪鷲眼、而壅驕奢、今也通信外洋、却所射貨穀、乖其義也、一轍、而得失之途、大相反焉、是以方今下民、墜塗炭、甚者幾信凍餒也、維非天災也、抑非地殃也、唯為罹洋虜之荼毒故乎爾、故彼等為主、我分為客、勢極相反、蓋内姦所招也、可謂率獸食人之類与、莫亦匪狐、莫黑匪烏、厥罪既著焉、加之弁髮 綸命、私許交易、為城下盟、剩鱧巨艦、而遣使外洋、且使奴蛮不二登山、内地測量也、

維無損怨、而厚於寇矣、開國以來、未曾有之大恥辱也、是誰之過也、不弁明矣、犯王命者必誅、古之制也、夫固非忠不立、非信不固、既不忠信、而留外寇、寇知其費、而婦凶焉、不獨虞奇之所嘆也、天下有志者有誰吞声哭泣切齒者乎、且夫粉飾昌平、保存有治、其布政也、不軌不物、以亂敗于上、而苦皇民、一皆与乱同事也、是以上下乖離、天下之危殆、自有苞桑之幾、朽索馭馬之勢矣、故神怒民叛、天變地殃、不可勝道也、已至此期也、天之所廢、誰能興之、中庸云、栽者培之、傾者覆之、謂天因其材篤物也、且今我居內地、以欲自戢其地者、散地也、兵法曰散地吾得一其志、欲一其志者、不能不一天下也、一天下者、莫善於尊

王室矣、詩云湛々露匪陽不晞、此之謂也、欲恢復王道者、固不得係一家私計也、伊尹放大甲、周公罪管蔡、夫豈不愛、

王室之故也、夫正名明分、以新耳目者、天下之公義也、行公義者、必因天神、因天神者、必奉聖旨、奉聖旨則天必和之、天哉神哉、神哉天哉

今上帝希世天縱、聰明叡知、神武不殺之元聖也、方今海內之勢、雖類為胡羯見驅、冥々天道、

天祖之余烈、命脈未絕、顯然在祚胤也、佗曰國無道、而年穀和熟、天贊之也、鮮不五稔、夫天未奪吾食、幸而有年者、

陛下修德敬神之故也、苟今有敵愾家君、而請奉鳳命、獎王室、則有志邦君、不招而應焉、於是一定海內、攘斥戎虜、捲席宇內之策、得而可施也、獨於遲速、預難期焉耳矣、夫闔王道、而資伯業者、管晏之徒也、固不足為焉、憎霸業、而詢王道者、孔孟之行也、雖然彼土國風、變姓更命、而從天道、三代行之、孔子則不然、崇宗周、欲興道於東方、故西土雖立道、与皇國立道、不全同、以孔子之心、為今日之心、則彼何人也、吾何人也、產靈神孫、可不勉也、伏請公以孔子之心、獎王室、為湯伊尹暨周召伯、而其作魁首天下哉、臣熟考、不可猶予之機有六也、方今天下之形勢、雖陽似治、既已亂也、眼未見旌旗、耳未聞金鼓、僅一聞而已矣、忝此時、武備廢整也、固衆所知焉、然陽治之勢、亦有不可反者、苟叛之、則一家不齊、一國不治、是狂安逸、膠積弊之癖也、夫人相默、而守弊風、無他術也、故滔々武夫、跨治乱兩端、困于葛藟、一日窘於一日、何有余暇、整於武備哉、兵法曰、夫衆陷於害、然後能為勝敗、兵士甚陷、則不懼、無所往、則固

投之亡地、然後存、陷之死地、然後生、困獸猶鬪、況於人乎、如令微臣謀之、請奉 皇命率兵、使海隅蒼生、如同舟遇風、登高去梯、一朝甚陷而無所往、惡洋夷如蛟虺、畏狡虜如鬼蜮、(マシ)座薪嘗胆、以上下同欲、一途擯寇、則不令而旧染汗俗咸維新、武備亦從整焉、人心不新、則百術無效矣、今夫不欲擊鼓、而猶予失機、偶然自渠開兵、則變又變、必有渴而穿井戰、而鑄兵之後悔与、倘臨其期、則噬臍何及焉、故今日急務、在於決戰、法曰先處戰地、而待敵者佚、後處戰地、而趨戰者勞、故善戰者、致人而不致於人也、(マシ)凶之此時為然、乃千載之一時、不可失機是一、夫一動一靜、天地之理也、治窮則亂生、亦天下之恒也、何足怪焉、(マシ)凶難於其易、為大於其細、制治于未亂、保邦于未危者、聖明塩梅之任也、而上下未定、則必有柏舟者盤之恤、而謀藏不從、不藏覆用、是亦古人通患也、(今カ)雖 聖凶宏遠、廟謨未決、若內亂發、則列國情豪、一時鼎沸、不識所歸、如春秋無義戰、海內各区、龜分瓜裂、大以凌小、強以害弱、或割拠、或侵掠、拆国併地、大家終滅、匹夫更起、以乱平乱、鬪争且不可息矣、殊鯨鯢者、必競鬪凶乎、譬震漢季曹操魏末司馬懿之威、如中原逐鹿、或宋襄禱次睢之淫鬼、則名義湮滅、冠履顛倒、前門斃虎、

後門狼進、懼 天朝有如無、私利惟謀、膽一天万乘之至尊、猶寓公、則雖聰明叡知之至聖、然 天裁之道、不可行焉、如心仁以來永大年間、天朝衰耗窮、踐公卿齷米之古轍、則雖有智士仁人、若恢復何、(馬シ)當此時也、獨不啻內亂、外寇闖襲、(馬シ)侵刃掠陸、欲甚者、却藉夷力、以併土頻利、暴乱預不可飲也、請縱述微意、夫以正治国、以奇用兵、政之常也、願一二邦君、勦力倚嶮、以促 竜駕、拳親兵、於未乱而制之、海內一定、而後擴殲外寇、恐無大敗乎、(馬シ)發兵避敗者、蓋擬誰昔、武尊、鑽燧避災之英策矣、遺虜念熟難滋甚焉、今夫疾戰則存、不疾戰則亡者、維死地也、兵法曰、死地則戰、不可不敢決也、然今通信詢和者、肖有所之、故絕交開兵、所以示其不活也、不可寬機是二、安政戊午、失策之時、青蓮院宮、自幽閉他寺、(馬シ)於今四年、其故何也、曰非實有丕德也、既著明矣、恐出井伊氏之奸腸欺、蓋忌宮之明敏英邁也、若楊明楊梅軒法輪台鼎、亦閔厄間寵也、皆嫌其忠良之故耳、而後猶未促還院者、抑誰之罪也、深可怪焉、詩云、誰知鳥之雌雄、此之謂也、今 親王偶以無辜、(マシ)罹斯青虐、而天下无怪之、百邦君一未能救之、咸結目杜口、惘乎鎖駒、垂拱默然、以為得計也、豈謂人臣之節哉、古語云、君憂臣勞、君辱

臣死、故微臣碩訝焉、且夫

帝之於親王也、猶堯舜於禹、武成於旦、夷王室之腹心矣、詩云、念彼其人、涕零如雨、古人為臣發嘆與、夫称名屈指、自百世後觀之、果不無議論乎、如公室、故國大藩也、安得在其外哉、後之見今、與今之見古、何異之有、不可不尽矣、且如公國、提封千里、帶甲百万、虎賁龍將、羅列其下、積粟如山、彈棗如岡、誰得爭其鋒、而屈膝於姦雄之下、尤有志之所慚、君子所不取也、伝曰〔誓不脫〕其緯、而憂宗周之隕、況一姓之國、況大夫乎、不可忍機是三、夫辺境者、國之尾也、有外寇、古人譬之牛馬有蟲鬻、能掉其尾、而攘斥之、不敢与膏血、其可以國而不如牛馬乎、去冬越之新瀉、開港之期、已滿矣、抑此地也、北鄙辺陲、皇化未遍、〔天〕文華未闢、土民頑鈍固陋、譬猶前肥之島原、与後肥之甘草、風氣粗相類焉、猖獗乘厥蠹爾、窃施妖教、煽惑蠢民、則闇移潛化、〔傾力〕默頑凝結、而竟不可解也、老少男女、相率為渠郷間、果生不測之戎毒与、寬永年間、西陲覆轍、亦亦憶焉、自各所有開港、最感毒教沾染者、止在此地也、今日患之也、雖猶七年之病、求三年之艾、然亦自今蓄之、則猶或可逮、不然則病日深、死日益逼焉、伝曰、一日縱敵、數世之患也、不可猶予機是

四、夫畿内近海三津〔謂浪華一境〕開港、盟約之期限者、当壬

戌十月滿也、抑此三津開港也、固幕府之私盟、而所未安宸襟也、豈忠臣所忍哉、嗚呼、履霜將堅冰至之時、安得不寒心乎、且斯三港也、譬猶禁闕庭階、〔明〕赤石及由良之迫門者、東南宮門也、未能自外洋衝闕畿内、天險矣、易曰、王公設險、以守其國、然況不啻排宮門之險、未衛以庭階之地、界猾虜、為彼果窟乎、如然、則如開嚮進蚊、疇得安寢哉、要節危機斯薄、倘可忍之、何不可忍也、可謂天下無道極、夫鷲鳥將擊、卑飛欲翼、〔無脫力〕猛獸將搏、弭耳俯伏、姦豈在明、茶謀必甘、故聽於声、視於無形、以黠夷伎倆、不可察也、唇亡齒寒、若三港開、則鳳闕危難、甚於累卵矣、可謂矣榮枯存亡之秋也、莅于其期、則癰疽闌入于腹心何異、雖有明臣良法、恐難濟焉、詩曰、迨天之未陰雨、徹桑土、綢繆牖戶、正今日之誠也、当此一大急機、諸邦家君、悠悠然更不駭、重身顧祿、深室端座、徒邁株寇之小計、遂速不測之變也、其人臣之節与、抑人牧之道与、恐不兩相得与、天下後世、其實不脆矣、如公室、義氣滿國、君臣相遇、必有秘策哉、夫大丈夫者、夔屈〔後〕侯時、見幾求信也、固其所矣、易云、見幾而作、不俟終日、此之時也、所謂畏首〔畏尾脫力〕身其余幾可斷焉、伝曰、臣義

而行不待命、待文王而後興者、不豪傑也、即今為天下之渠魁、蹈仁詢義、奉 聖明舉事者、夷覆幘之英雄乎哉、飢者易為食、渴者易為飲、如今一國、詢義舉旗、則庇之也、猶雲從竜風從虎、而海內之志士仁人、盡為渠魁所有焉、得人則有功也、奉 王命、征不庭、天下之正道、蓋憚議事乎、若猶予失幾、瓶凍知寒、則怒何廖、悔何逮哉、法曰、用兵之害、猶予最大、且兵貴神速、夫海內者由一室、譬有同室之人將鬪者、則被髮纓冠、何不救之哉、古人有言、曰動靜有適、不可過、此之幾也、語云、有殺身以成仁、方今不行仁義、而俟何時乎、仁之勝不仁也、孟子譬之水勝火、固其理也、以義誅不義、三略譬之決河而溉爛火、其克必矣、蹈仁行義、赤心以報國、断然決議、猶蕩々王事、敵然發機、擯曉々醜虜、以解王愾矣、御製茂里生、繁里合計梨、芳須々幾、多乃三甲斐南幾、武藏野能限、又曰、異船毛、泥米流入袋、殘里奈久、弘比屋佐牟、神風母我南、縱鼎折足、覆公餗、成否天也、雖寬諸度外可也、何必妨仁義乎、不妨仁義、則何憚之有焉、天道皇々、日月有常、順天者存、逆天者亡、易云、自天祐之、吉无不利也、何憶之有乎、今陷夷術中、而將開三港者、後人也、然未滿其期、而防之者、先人也、後人發、先人至者、所謂迂直之道也、法曰、先知迂直之計者勝、必不可失機是五、夫事必有時、

物必有節、時者在天、運動不止、節者在地、時至物成、維天地之常也、節時不忒、人之事也、自昔廢社稷、失宗廟者、天違地離人叛、而后滅亡、外伝云、小凶則近、大凶則遠、近五年遠十年或二十年五稔者、天之紀也、五歲再閏故謂紀也十年者、數之紀也、九而備一事數見春秋伝、夫自癸丑計之、至明年壬戌十年也、自戊午算之、又至明年五年也、加之彗見者、天垂象示其時也、伝曰、天之有彗也、以除穢也、又曰、彗所以除旧布新、且彗星在北斗傍、而指斗宿次、斗者野佐二越等分野矣、史記註云、李籍內記曰、彗出北斗兵天起、又曰、所指其処大惡、旧說如此由是觀之、改革之幾已萌、且庇為外寇侵北國与、明年舉事、旁其時也、皇天已定、必有大功乎、夫時者難至、機易失、違天不祥、得時而不成、反受其殃、不可失機是六、今夫 親兵舉動如何、曰非臣不肖 所善遠也、抑亦不莫說、請試論之、方今一二邦君、密翕志、固結義、窃奉 詔命、脱然举兵、徵奪浪華城、奉 竜駕、今劔作、應行之說者、莫不謂取山坂馬芳野高野也、夫此四險者、有堂坊、有衆情、故募兵宮陣之奔也、是以古來為播遷之地者、一時之良策矣、雖然知其利、未知其害也、請試奔之、四山險要、雖似無害、仏徒為之口実、屢擄兵而行非業、不坊國政、雖織田氏之智勇、遂至難制焉於是仏徒茲蔓、永作國土之害、断而不可倚憑之地也、抑浪花之地也、富商股買甚多矣、故徵糧糶及金銀、價急用傾弁也、且如于此地、制東國運漕之權、則權道之斷統吾所欲也、厚護之、而賜寇令幕家及三家三卿列國家君、略観丹黒之情、則天下岐心問否之三、応者何也、曰一諾無二者也、假名之謂庇、是守義竭力忠臣、更勿論耳、

何謂之間也、曰半信半疑、籌事兩端者也、假名之謂間是見勢就利、必動者也、如斯、智者深所不為患也、否者如何、謂名義不明逆命者也、假名之曰否、是闇將而無賢將_{臣之}智士、如此深不足畏之徒也、今夫以応師征一否賊、勝之則間徒者、不召自服、固囊中物爾、勦心間二力、以討否賊、則不期平焉、於是一掃之幾、預可觀也、令一之而不能反者、在 聖明良弼之方寸、易云、苟非其人、道不虛行、可附諸其任而已、于時擬日本武尊及來目皇子、当麻皇子、護良親王等之旧例、迎 青蓮院宮、為征夷大將軍、以舟楫虎賁師、奉駕、遵武尊東征之佳祥、謁于伊勢神廟、直使神軍、正々堂々、行東海道、則晴々霄讒者、咸竄食壺漿、以迎王師、書云、民之所欲、天必從之、且仁人無敵天下也、誰得抗焉、易曰、天地以順動、故日月不過、四時不忒、聖人以順動、則刑罰清、而民服矣、不可疑焉、姑占行宮于函嶺、撫征東國、兵刃不血、概略靡服焉爾、辭職謝過、則懷之、雖然長木之斃無不標也、國狗之瘦、無不噬也、若叛命構兵、則征伐之可也、王事無監、誰不竭力求捷哉、以是觀之、海內一定之略、豈難甚施哉、兵書曰、除害在於敢斷、斷而敢行、則鬼神避之、況今所行、上尊 王室、下利萬民、外弘夷狄、內安國家乎、孚信不

悖於天地、至誠感神、天地神明、必擁護之、竟三分一掃、則 王室勃興、溥天率土、舉 王土王臣也、於是海內為一家、上下同欲、以可殲殲胡塵也、夫外寇之動靜如何、曰虜逆予雖難籌、請縱陳愚察也、柔則加之、剛則吐之、如今突然內兵起其神也、若從地出、若從天下、則四方淹留之群夷、愕然胆落髮攢、一旦盡人船而退帆、各歸其國、告酋長得酋裁、而後更發一二艘、隱映徜徉于刃海、施々必探內情、而觀機將來、或欲援逆徒而逞其慾与、於是內姦必招焉、故海內一掃、為攘夷第一之策也、其中偶侵辺郡、何速大事哉、是戎虜姦疑之概情矣、聞內兵發也、忽焉決幾、一念而發大軍、雷奔電擊者、伎倆之醜虜、攸未能也、雖然敵不可恃、伝曰、不備不虞、不可以師、迨栖々未冠、遽平均天下、而布 命無海邦君領主、攝泉近海、_明及赤石・由良・加田之迫門、伊勢 神廟近岸、出雲大社、_明濱海等、拋便衛之、更詔五畿七道、当令滿國海岸、悉築土塘石砌砂垣等、蓋為障夷煩也、簡地利、構砲台密烽燧号砲響心之制、明斥候、凡營一里一堡十里一城、使大八洲為一堅巨城、各國邦君、及大夫士、皆在其國、而繫死生存亡、於社稷及宗廟墳墓、衛之加以大艦、充奇兵与応援之用、知戰地与戰日、而千里會戰、譬如常山之蛇、

四頭八尾、觸處為頭、以抗寇、天子以躬先之、統馭海內、則渾々一屯之疆國爾、故我專為一、敵分為十、於是乎、以夷制夷之策、得而可施也、法曰、以下攻其一也、則我衆而敵寡、能以衆擊寡、則所與戰者約矣、主客之勢、

固心如斯也、又曰以守待攻者強、雖有狂瀾怒濤、豈敢妨海內哉、雖然積年之宿望、深非不懲宜休也、必各虜合從連衡、而屢采襲刃要、擾內地、兵交戰連、或解或結、或疑或叛、勝敗甘蘭、預不可期、略莫寧歲、非數十年不定矣、〔坂令一旦雖有清波濤謀謀球之窮情於我不可休也〕 厥中或五六月、乃至七八月、非无

甘戰之日、於是察機當滅仏也、是所以一民心、而使無比〔盛朋力〕 德淫明、民心不一、則眩惑耶蘇、不可不禦諸未先、夫中國有仏之弊也、既歷二千歲、老習豈以一朝一夕之威、容易泯之哉、且外寇未平、適以甘戰之時行之、則吹毛求疵、

內外混亂、而國必危、抑有說与、曰英雄之謀事也、志氣恢廓、意氣赫然、大不噓、繁不倦、雖有百難千患、貞夫一而不動、從容不迫、策略如湧、胸中尚有余者也、譬猶湯始征自葛、載十一征、而無敵於天下、遂帰成王者是也、且今滅仏也、救追僧裂經毀堂、摧像破鐘、以差宿爵、快一時心、而構怨招禍之謂也、〔仏入中國也、自西土、而彼土至唐武宗之不滅、而仏寺多、却僧難于西域、又應除弊者以免四海之囂矣、〕 夫塞水不自其源、必復流、滅

禍不自其基、必復亂、故先除仏寺、本山為第一、有僧官者、

轉之朝官、妃耦妻妾、賜祿還俗、在諸國各領者、屬其主、欲仕者、与之祿、附職者、予其器械、婦農者、畀之田地、令寡嫠娼妓、妃僧徒、而安其生、猶禹之行水、則何怨何憤、垢塵汗穢壳僧、必悅以還俗耳、偶有奇表之僧侶、

党比作寇、征之何難焉、於是鏖鎔梵鐘銅仏銅器、以鑄錢幣、徧施天下、在諸國者、鑄楨以備海岸、或以為彈丸、若堂塔坊厦者、隨便作城堡砲台宮舍、独於仏經仏書者、漫無散乱、

盡聚以宜為灰燼矣、如斯則有愛浮冗以為実用、足食足兵、民信之功也、一弊亡、而三利生也、兵書曰、患在千里之内、不起一月之師、患在四海之内、不起一歲之師、今患將在四海之内、而欲事謀海外、故正內政、今日之急務也、所謂內治未得、不可以正外者是也、膺其時、而觀海内、必兵卒有余之勢也、〔凡仏寺五十万、平均為一寺四人、則併僧農附職之徒、而殘四分之三、為兵卒者、大略五十万人、其中四分之三為老者〕 於是滋練兵講武、習航海術、而驅

募天下之罪人、以開拓蝦夷、及八丈無人島、傍練煩艦之術矣、夫砲艦者、騎射之大者也、固六芸之其二也、古昔武士、咸善騎射、賞之謂弓馬之達者也、達者熟成之謂也、方今天下之士、內講騎射、以設陸戰、外練煩艦、以備外寇、是亦今日之專務也、今戎虜愚弄中國者、以戰艦火器

不滅、而仏寺多、却僧難于西域、又應除弊者以免四海之囂矣、

不備故耳、今煩艦具于我、則彼必生備于我之心、是先攻敵心之術也、所謂守是攻之策、攻是守之機矣、於是乎、更軫攻守之勢、我無形而形人、或擊或侵、令寇深懲、無傷瘡之患矣、故砲艦能整、則乖其所之、因旧範、以窺機、風馳電掣、攻其無備、出其不意、先討三韓、更建府任那、以再復先規、或賁渤海之不貢、為師旅屯營之地、常驍商舶、而至于上海及香港、探索夷情、殊馭加三韓之士兵、而誅寇、如鷹鷂之逐鳥雀、跨駛巨艦、蹂躪百蠻、卷席宇內、以華變夷、令天之所覆、地之所載、殊方絕域、普冒皇化矣、(裁厥力)書云、功崇惟志、業廣維勤、不可不勵也、夫國之大事、在祀与戎、故播長計、原於旧式、大興祭祀、搜繳弊害、悉艾夷焉、(裁厥力)蓋謂慶長朝鮮之夜、兵卒滯淹于彼土、而弄之、流入皇國、三百年于茲、嚮者、豐臣氏及大猷公兩時、雖有一旦敷祭、不行于此者、(世力)不深慮舒究故也、其後絕無明禁、沿々習弊、一日熾乎一日、今弄之者、居于十八、其害不啻田地也、皮革布帛、金銀銅鉄、藤蓆人工等係無用之新物、而鑄銷必用之貴物、豈可不悲歎哉、且此物元來出于西荒蠻奴之地、故毀之也、無誅逐薛諫之、貴賤主客之別、相對恣喫焉、蓋蠻奴之常、而高獸之態也、(裁厥力)居于皇國孔讓之風、固雖非孔讓義行之君子可弄者、賤氓頭夫之態、漸移于高貴、勢至于難制也、無他、士氣放惰、無廉恥、不知不讓、陷弊風耳、即今欲絕之者、不可急、而可嚴、譬自今年十有二歲男女、始加禁令、逾齡每午點檢之、若有犯禁者、刑焉、寬其期、而不責旧染、嚴其令、而防未先、且梅先非、革弊者實之、則五十年之後、必絕於其根矣、不則當為後世鴉片之煤灼与、念茲在茲、西土之覆轍、豈可不慎哉、(裁厥力)

夫冠袍、在位之服也、無位者無法服、故折衷古樣、而更制法服、或以色分等、或以制正位、表具容儀、裏要節儉、

原 前王之法服、復君子國之寶、(禮力)以制止潛上濫奢矣、(禮力)者
雖無位武夫及工商、皆冒烏帽、服法服、服制有數、曰水干上下、曰直垂上下、曰布直垂上下、大紋一名曰素襖上下、曰小素袍上下、曰十德小袴、曰肩衣四幅袴等也、烏帽有新古奢家之折形、其變不可勝算也、故今略之、雖在田園戰爭之風、不敢去孔服、古之制也、故斃死士、咸為子路矣、脫帽斃頭、固深愧之、嘗覺今人脫帽露精也、無帽者、士民也、故有黎民黔首之名、然而今不啻無帽、却却頭髮、非忠臣孝子之風、且女子亦出門、必據蔽其面、雖市女賤、不敢顯面、古之風也、今也不然、如使四百年前之人見今世、當痛死耳、臣帽藍裙上世、角裙海外、世世冷汗、露背披髮、蓋自古亂世余風、習為恒爾、百官戴帽、服色有制、今却中國如此、恐稟相風之侮嘲乎、(禮力)不可不復古焉、或書云、後世明帝、已敕僕士、欲令華府制武家法服、將命因月于時幕府獻衣業喪之、而須鬼朋矣、嗟乎也、(禮力)呼命也、靜言思禮之稱稱有標也、(禮力)機咸復千古、拋治延喜、天曆、興復屯倉不動倉于諸國、而儲蓄凶荒軍旅之變災、或設平之署、播常平法、以巨艦運米穀、則糴糶之權在上、以是足制博徒、更革鑄貨幣、為純金純銀、以示信天下矣、于時卜 皇宮於恢濶之地
平安京也、在四方山岳也、桓武天皇延曆十三年定、詔曰、山背國、山河帶帶、自然作城、宜改為山城國也、如斯以險隘之地、作 皇都、蓋有故矣、從是以前、蝦夷大叛、官軍屢不利、至田村將軍、始奏獲、世應如斯、故古卜除要地、以為 皇居、亦一時之軍策也、雖然非永世可定、帝都之真地也、上古神武天皇都於橿原、中古蘇我、府於鎌倉、及近古豐臣氏於浪花、源君於江門、孝懷瀾之地也、草創大業之蹟、掃于一途、況中古逆流起也、未得一 神器不動也、自宇治賴多之險無惡乎、山城之固不可犯、不可為戰場、如有要則池時更占、無德何憑焉、(禮力)帝都 自浪華城 遷
幸新宮、所從之將卒、右之躋之、掃其土也、於是興復大學寮暨國學校、傍講武練兵、宜明國體、革學風矣、(禮力)大學令
經周易、尚書、周禮、禮記、毛詩、春秋孔氏傳、各為一經、孝經、論語、學者兼習之、凡教授正業、周易鄭玄、毛詩、尚書孔安國鄭玄註、左傳服虔杜預註、孝經孔安國鄭玄註、論語鄭玄何晏註、令矣如此、後世 法良如等之
學流而入 皇國、今略其說者、不鈔、亦一嘆而已、不可改矣、(禮力) 或矯 崇神

天皇臣下觀察三道之例、或每三年若五年、令大將軍巡觀諸國海岸耳。往古、天皇親帥兵征不庭、不則皇子皇后代之、是以王室在嚴、固勿論也。夫將軍者大任、在軍中則有君命所不受、而大權所歸也。故昔者不委之臣下、皇族任焉、後世以臣下任之、而大權移于下、遂武家跋扈於天下、而開霸業、是自然之勢也。於是、皇室衰微、滋究矣。由是觀之、王室興廢、在武否与、故將軍者必以、皇族可任也。斷而欲勿密臣下矣。

而異其度、輪環述職、(各力) 万機之暇、駕竜蹄、帶兵杖、帥皇子親諸王及三台九卿雲閣、併在 京武士等、以催蒐苗獮狩鷹犬、所謂拋朝田從獸夕獵起禽之國風、如弓場殿騎射相撲、亦復古一皆撰 烈祖之德行、遠三風十愆、使不殺 神武、永赫々千万世、則可謂反本復始之美効、盛德大業具備、一定不易、万世不拔之天功至焉、是臣積年所以禱恢復之大意矣、雖然轆軻亡賴、未成一二、破産離國、於今四年、辛肉白骨、可謂奇偶、智略不如亮望肺腑遊説、不及蘇張舌頭、毀瓦画墁、為彼舟身、潛流四方雖不堪匪石匪席之慷慨、然匹夫小醜、不能奮飛、悲哉、故不顧納約自牖之非礼、欲誓神明以為 公陳誠意、將震動天地矣、書不尽言、言不盡意、加之不学無術、寡聞短才、固昧文章、意之不達、章句不成、請 公憐顧、宜垂 英察焉、兢兢業々再拜稽首、失敬死罪、

文久革命初稿日

加多志登天、世爾揚可称之、大鉞、君賀力丹、如何伝余良武、舟等作、霖止為弓大王乎、奉弼、大丈夫乃君、三冬尽、春西為礼婆、国原者、霞立古免海原波鷗立堂津、可愛国、邦見万志乍、秋去者、八束農稻能穗耳出天、曾遠守流盧酒、露雞佐波、尊岐御衣二掛里劍、例母畏已、高殿從、民乃竈邇、餉焚、賑昆見備敵、朝田丹、鹿踐与之、夕狩耳、鳥路立、懸万久母、文邇恐志天皇母、弓箭搔負百多良須、八十伴男毛、帶刀裳、仕奉呂比、馬弁天、宇佗乃大野二、御狩志志、其大御代爾、梓弓、引廻弓与、其大美世耳、御執酒、弓弭振起之、宇多能二、美加理勢之世邇、挽回之弓余侯ノ生父和泉此書ヲ見テ(久光公此書ヲ見シヤ否ヤ、恐クハ見サリシナラム、小松・大久保・中山等ハ見タルナラン) 深ク嘉賞シ、大久保利濟ヲ以テ応接セシメラレシカハ、國臣己力意ヲ口述シケルニ、利濟感シテ、来春ハ和泉上京シテ一挙セントノ志アリト密ニ語レリ、其旨趣ヲ聞ニ、國臣力志意ト暗合セリ、去ルニ臨ミテ、利濟贖トシテ金十(當時門喧ヲハ誤ナラム、兩ト云フヘキナリ) 円ヲ贈レリ、実ハ此時向田邸ニテ薩士数人ト会シケルニ、即今天下ノ時勢ニ応シテ、如何スヘキトノ論ヲ發シケルハ、國臣己力意ハ是ナリト、自著ノ培覆論ヲ出シ示ス、

王室ヲ培ヒ幕府ヲ覆ヘストノ趣ナリ、見ル人其卓偉ニ歎服ス、後天下ニ伝ヘテ、會津藩人トイヘトモ、其志ヲ感セシトカヤ、扱肥後ニ還リ、松村カ家ニ入シカトモ、薩藩上京ノ一挙ヲ語ラサリシニ、阿蘇大宮司惟治漏聞大成ニ告シカハ、甚不平シテ、國臣ニ足下等ヲ舍スモ、カ、ル大事ヲ聞テ、夫ニ応センカ為ナルハ既ニ知レル処也、然ルニ如何ナル心ニテ匿セルヤト責シニ、貴家ハ浪士ノ群聚スル故ニ、漏泄ノ恐レアレハ黙シヌト謝シケリ、既ニシテ久留米ニ至リ、薩ノ賜金ヲ尽シテ、高山彦九郎正之ノ墓前ニ石燈ヲ建タリ、此時、安積良貞(武力)カ旅費ニ窮シ、佩刀マテモ沽却セシヲ見テ、携ヘテ潛ニ本藩ニ還リ、刀ヲ買ヒテ与ヘナトスル間ニ、歳暮テ文久二年トナリ、和泉發途ノ期ニ及フト聞キ、發シテ秋月ニ趣キ、海賀宮門直求カ幽閉セラレシヲ訪ヒ、勸メテ脱走セシメ、豊後ニ入り、小河一敏カ家ニ到リ、相伴ヒテ大坂ニ上リケリ、此前後國臣ト一敏・綏猷等カ鼓舞ニテ、大坂ニ会スル志士三百人ニ及ヒ、島津氏ノ至ルヲ俟チ、入洛シテ事ヲ擧ケントス、國臣先入京シテ、曇華院ノ候人吉田玄蕃重義ニ就テ密奏ヲ托ス、其文ニ云、

謹テ奉密奏候、當時天下ノ形勢變々トシテ、黠夷外ヨ

リ逼リ、(烟々丸)詔々タル大姦内ニ誇リ、其機ノ不安事、譬ハ人体ニ癰疽ノ両病ヲ醸スカ如ク、実ニ国体ノ存亡、命脈ノ断続此時ニ有之候ハ、今更申上候迄モ無御座、即觀覽ノ通ニ御座候、然上当月ニテ、(殿丸)華庫塚ノ三津開港ノ期約満候由、若此三ヶ所開港ニ相成候ヘハ、例ノ商館ト号シ、城郭様ノ物ヲ製造シ、群虜ヲ屯セシメ、軍艦ヲ繫キ、砲台ヲ構ヘ、水陸ヲ要塞スルニ至リ、神州断々ノ象ニテ、譬ヘハ竜蛇ノ胴中ヲ裁切セラル、如(中斷丸)ク、首尾自ラ卒然、応接ノ道運ヒ難ク、乍恐 鳳關ノ御危難累卵ヨリモ甚シク、万一及其期候テハ、外寇攘掃ノ策可施術計無之、手ヲ東左枉蟹文ノ風ニ交シ、乍居腥羶ノ正朔ヲ奉スルノ外ニ処置無之儀ハ、鏡影ヨリハ(明丸)朗ニ御座候、右ニ付両三年前ヨリ誠ニ心配仕、是非トモ当春迄ニハ、義旗決挙不仕候テハ不相成候ヘトモ、義徒烏合計ニテハ、僅數百人ノ事ニテ、志ヲ不遂而已ナラス、却テ後害ヲ引出シ候様ニ至リ可申ニ付、是非ニ大諸侯ヲ頼マスシテハ、迎モ不叶事ト因循仕居候内、(和宮)皇妹様ニハ関東御降嫁ニ相成、恐多クモ、去冬幕庁ニ於テ、国学者共ニ申付、忌々鋪御旧例ヲモ取調候趣、(マ)(當時專ラ唱ヘタル御讓位或ハ御遷行云々ノ説ナラン)相成

候事、何時暴虎馮河ノ儀ニ至リ候モ難計、彼是以天下有志ノ者、扼腕憤激仕、義氣十分ニ震立機節相頭候付、已去年十二月一書ヲ携へ、薩州ノ関所ヲ犯シ、鹿兒島府ニ入込申候処、一藩案内奮起仕居申候故、即一封ヲ

修理大夫ノ実父島津和泉ニ奉リ申候、其頃同藩ニテ、(茂久) 当春修理大夫出府ノ処ヲ延引ニテ、当秋ニモ相成勢ニ

御座候処、俄ニ其後事改リ、修理大夫ノ名代トシテ、和泉出府ト申事ニ決定シ、則此節上京ノ儀ニ至リ申候、

如是藩ノ一國挙テ勤王ノ儀相決、西海・山陽・南海ノ有志輩如斯奮起、或ハ亡命脱藩シテ上坂仕リ、京攝へ

潜伏仕者モ数多有之、実ニ止ルニ不可止勢ニテ、必死確決ヲ以テ、是非共此度大挙シテ、恢復ノ基ヲ開キ候

含ニ御座候(義拳録参考スヘシ)、斯テ人氣奮立ノ大機會、是迄未有所ニシテ、千万世ノ一時ニ御座候、若此

機會ヲハツレ候テハ、臍ヲ嚙トモ其詮、決テ不可再来一機ニ御座候、一旦如此決発仕候上ハ、悠々不斷ノ処

置ニ至リ候心遣ヒハ毛頭無之候ヘトモ、同シクハ決拳仕候中ニモ、上策ニ出候ヘハ、勞セシテ其功十分ニ

御座候、若下策ニ落候ヘハ、勞シテ無効而已ナラス、却テ後害ヲ醸シ候儀モ可有之故、乍恐神武不思議ノ

叡断ヲ以テ、第一上策ニ出候様ニ被為有御座度、一着ニ手ヲ下シ候処ノ三策試ニ左ニ認候テ、奉備 天覽候、宜敷聖裁奉懇願候、

上策

一 島津和泉滞坂中綸命下リ、直ニ華城ヲ拔、彦城ヲ火シ、

二 條ノ城ヲ屠リ、同時一勢ヲ率テ、和泉ヲ將帥トシテ上京、幕吏ヲ追払ヒ、粟田宮ノ幽閉ヲ解奉リ、参廷ノ

上、聖駕ヲ奉シ、蹕ヲ華城ニ奉遷、皇威ヲ大ニ張り、七道ノ諸藩ニ命ヲ賜ヒ、陛下親シク兵衆ヲ率ヒ賜テ、

直ニ函嶺ヲ暫シ行宮トシタマヒ、幕府ノ科ヲ正シ、即前非ヲ悔ヒ、罪ヲ謝スル時ハ官職ヲ剝キ爵禄ヲ削テ、

諸侯ノ列ニ加へ、若シ命ニ叛キ候時ハ、速ニ征伐スルモノ第一上策トス(此策當時有志人ノ専ラ唱フル処ナリキ)

中策

一 和泉出伏之上綸命下リ上京、直ニ幕吏ヲ払ヒ、粟田宮ノ幽閉ヲ解シ、二條城ヲ拔テ是ニ寄り、大ニ皇命ヲ四

方ニ下シ、義侯ヲ募リ、其後華城ヲ拔テ、大駕ヲ遷シ奉リテ、幕罪ヲ正ス、是ヲ中策トス、

下策

一 和泉出京、陽明家へ参殿ノ上、漸ク決議ニテ幕吏ヲ攘

ヒテ、粟田宮ノ幽閉ヲ解キ、二條ノ城ヲ拔テ、是ニヨリ、官軍ヲ募テ皇威ヲ張テ、幕罪ヲ正シ、華城ヲ拔テ尊攘ヲ議スル者ヲ下策トス(中下ノ二ツ行ハレタリ)、右三策ノ外、凡公武御合体、夷狄掃除〔掃〕ト申候趣、根元姑息平穩ヲ好ミ、不断隘慮ノ胸臆ヨリ出ル処ニテ、假令事行レ候トモ、十分ノ落着ハ無寬束、六大州ノ末マテモ 皇威ヲ輝シ、万々歳神州安全之基ハ開ケ間敷候、御合体之機會(ハ)是已五ヶ年以前有之、即宗族ニモ尾・水・越、外侯ニモ土・因・薩ノ如英傑俊才之面々、之ヲ謀ルト雖モ、整ハサリシ故轍ニテ、其後益衰弱窮シタル幕府ニ、攘夷ノ策ハ古今愚策ニテ、決シテ行ハレ間鋪候、誠如此醜虜ト親睦仕居候幕府へ御合体ノ儀ハ、乍恐矢張外夷御合体御同様ニテ、自今三ヶ年モ過候中ニハ、乍居腥羶之属国ニ成来候ハ必然ノ儀ト奉存候、此度ハ一際拔群ノ 叡断ヲ以テ、海内蒼生ノ弊心一洗憤発候様、 聖志ヲ不被為属候テハ、 皇邦ノ存亡、乍恐国体之安危此一挙ニ御座候、何卒一等ノ上策ニ出候様、神速ニ天決奉仰願候、誠惶頓首敬白、

文久二年四月八日

筑前浪士平野二郎國臣

此書、終ニ九重ノ天ニ達シ、後大原左衛門督勅使トシテ

関東ニ下向セラレシ日、此奏中ノ説ヲモ採用セラレシトカヤ、是ヨリ平野二郎ノ名益顯レタリ、藩主筑前中將〔後參〕関東下向ト聞ヘケレハ、國臣薩人伊牟田尚平〔尚ハ正〕永頼ヲ携ヘテ往向ヒ、四月十三日播磨ノ大藏公ニテ、己力意ヲ述シ書ヲ捧ケテ後、客店ニ就キ、置酒シテ熟睡セシニ、永頼ハ犯禁セシモノナレハ、薩人跡ヲ追来リ、二人トモ〔稱セテ〕レタルハ此所ニアラスニ縛セシカトモ、國臣ハ彼ニ関係セサレハ、中將ノ旅寓ニ送レリ、此時中將宿疾疾シ帰国シテ療養セントセラル、即國臣力縛ヲ解キ、衣服ヲ与ヘ、駕ノ側ニ扈從セシメラレシニ復上書ス(事實旧邦秘録參看)、其尾ニ云、

御帰城早速断然ト御決着ニテ、御国中一統人氣奮立候様、事態逐一御触達被遊、時勢ニ応シ勤王ノ儀公然ト御詢、御隣国迄モ相響候程ニ有御座度、假令其段関東ニ相聞ヘ候トモ、僅ニ百余輩ノ浪士、浪華ニ潜伏、日々京攝往来仕候ヲサヘ、捕押得不申位ニ衰弱ノ幕威ニテ、討手差向ノ儀ハ勿論、手強キ譴責モ有之間鋪、万一討手差向候含有之候テモ、朝敵ニ罷成候儀ハ、路頭愚夫頑民マテ不好事ニ御座候ヘハ、決シテ御敵対申上候者ハ有御座間鋪、若又夫ヲ承諾仕、討手ニ罷越候トモ、固ヨリ名義ノ不分暗將ニ御座候ヘハ、恐ル、ニ不

足者ニ御座候、殊ニ断然ト勤王被為詢候時ハ、御隣藩迄其風ニ掃シ、是ニハ張弩ノ勢ニ相成、彼ニハ落胆消魂仕、手ヲ束ネテ罪ヲ謝シ候外、更ニ処置ハ有御座間鋪候、ヨシヤ利害ハ差置候テモ、当日当然ノ御忠務ニ御座候ヘハ、必天地神明ノ擁護モ可有御座候、就テハ肥後・豊後・岡藩等モ、去冬来密ニ義ヲ詢、熊藩ニテハ長岡・佐渡・米田監物等其巨魁ニ御座候、岡藩ニテハ中川土佐(久懸)・小河彌右衛門魁ニ御座候、今九州ニテ、此両藩ハ無疑勤王ノ萌御座候故、爰ニテハ迂直ノ策ヲ以、先両藩ニ御使者ヲ被遣、此方様ヨリ御誘ヒ被遊候ハ、水火ノ湿燥ニ從ヒ候如ク、必一諾ニテ異儀有御座間鋪、抽三藩御合体ノ上、米・柳其外小藩御催促被遊候ハ、弥増勢ニ随ヒ機ニ応シ、大概西国ハ不日ニ御同意可仕、其上ニテハ山陽・南海等御誘ヒ被遊、御出京御座候ハ、則迂直先之道ニモ叶ヒ、所謂始メハ処女ノ如ク、後ハ発シテ脱兎ノ勢有之、却テ今日ノ御引返シハ深謀遠慮ノ様ニ成行、第一天朝ヘノ御忠節拔群ニテ、御家ノ御名誉莫大ト奉存候、彌其儀御決定御座候ハ、不肖ノ私ニハ御座候ヘトモ、直様上京仕、緝紳家取結、隣国御誘ヒ、御勤王被為在候様ニトノ綸命

被為下候様取計、綸書ハ永ク御家ニ相納リ、九州勤王ノ巨魁ト御成被遊候様、身命ヲカケテ周旋可仕、左候ハ、唯今薩州第一着ノ勲功ヨリモ、却テ被為勝候様成行可申候、何卒御国威天下第一ニ相輝候様有御座度奉存候、總シテ、兵ハ拙速ヲ貴ヒ申候ヘハ、已ニ龍光公ニモ被仰置候通り、草履片足下駄片足ニテ不足(マ、(折九)ヒニテモ、神速ナルニ功多キ者ニ御座候、凡事ニハ機ト形ト勢ト三ツ必有之者ニ御座候、勢ニ從ヒ候ヘハ、勞モナク功モナキトノコトニ御座候、形チ顯レ候テ事ヲ成シ候ヘハ、勢ト相追フテ是又功少ナク候、所詮機ヲ見テ先制スルニシクハ無御座候、兎角一家ヨリハ一國、小藩ヨリハ大藩ホト、万事整兼遅々延々ニ相成候ハ、自然ノ勢ニ御座候ヘハ、格別ノ御英断不被為在候テハ、人ノ後ヘニ御附被遊、勞シテ功ナキニ至リ可申哉、何卒々々御着城ヨリ廿日限り、御供人数御精選御再発被遊候様奉仰願上候、

赤馬關ニ達セラレシニ、藩ヨリ洋製ノ船迎トシテ来レリ、(國)國臣ニ其船ヲ見ヨト命セラレケレハ、上船セシニ、忽捕吏君命ナリトテ縛セントス、國臣從容トシテ、余モ君命ニテ船ヲ見ルナリトテ、委細ニ視畢リテ縛ニ就シカハ、

本藩ニ押送シテ、獄ニ下サレケルニ（此論當時評論喧シ）

年老し親の歎きやいかならん

身は世の為と思ひかへしも

又獄の壁板ニアヤツリ、合箱ノ底ニ紙捻ヲハリテ弾シテ、元ヨリ獄ニスマフ身ノ詫シトイフモ愚ナリ、悲シトイフモ余リアリ、楽シトイヒテ止ナマシト謡ヒシニ、獄中ハ音ヲ許サストテ、其器ヲ収メラレシカハ、

（忍び音とカ）
忍にと思ひしことのねを高め

いとむつかしく成にけるかな

トヨメリ、其後読書カ筆墨カ其一ヲ許サレナハ、毎日ノ午食ヲ止ラル、トモ憾ナシト乞ヒケレトモ、許シナケレハ紙捻ヲ以テ文字ヲ製シテ、紙ニ糊シテ、（筆志カ）盡忠録二巻・（行カ）制蠻礎策・體勢辨・征寇説・囹圄集・神武必勝論（書名）各一卷ヲ著ス、其製巧ミニシテ、其字雅ナリ、必勝論ノ尾ニ、

君が代の安けかりなは兼てより

身は花守となりけんものを

獄中一冊ノ書ヲモ参考セスシテ、其論説古今和漢ニ涉リテ謬誤ナシ、見ル人其記性博識ニ驚ク、（三年ノ撰乎）明ル文久二年三月免サレテ徒罪方屬吏ニ命セラル、五月保国策一篇ヲ邦

君ニ献ス、其略ニ云上策ハ、

京師播紳家御取結被遊被仰立候様ハ、畿内ノ中枢要ノ地ヲ選ミ、砲台少々御築立、鳳關御守衛被遊度、就右東西両端ニ懸候テハ、二ツナカラ全カラサル御座候ヘハ、是迄受持来ノ長崎守衛ハ、肥前ニ一手請持被仰付度、同家ハ領国ノ儀ニ御座候ヘハ、無道^{（尊也）}処ニ御座候、元来長崎ハ唐人和蘭陀等商船不法有之節、鎮西ノ為ニハ御座候ヘトモ、已前ノ如ク異船彼港ニノミ入津仕候時ハ、同断ノ鎮武^{（鎮）}ニテ、神州一体ノ風声ニモ係リ、一家ヨリハ両家ト入念候上ニモ、入念嚴重ニ守衛仕候儀勿論ニ御座候処、近年ノ如ク畿内近海ニ碇泊シ、或ハ松前ニ来リ、或ハ東武内海ニ乗入、異人共府内徘徊ヲモ仕候程ノ事ニ御座候ヘハ、長崎ハ実ニ商舶輻湊ノ一小港ニ御座候ハ、仮令長崎一円掠奪セラレ候トモ、深ク皇国ノ傷ミト相成候場所ニモ無之、守衛ノ儀ハ、肥前一手ニテモ十分ニ御座候間、同シクハ是迄勤王ノ志被為在候驗ニ、畿内ニテ一ヶ所守衛受持被仰付候ハ、一國ノ全力ヲ以、皇朝御守衛ニ被為竭度旨被仰立候ハ、必勅許ニ相成可申候、然ルニ長崎御守衛ノ儀ハ、御先代様ヨリ二百余年来御受持来ニテ、他藩ニテ江戸

府内御役持等ニ比較仕候へハ、格別御規模ニ被為在候へハ、今日此形勢ニ至リ候テハ、左程御大切ノ御場所共難申、タトヒ長崎一円丈夫ニ被為衛留候テモ、屹度神州ノ御為ト申程ノ功ニモ無之、誰為ニ御国力ヲ御費シ被遊候ヤ、古来英雄豪傑ノ上ニテモ御覽被遊候へ、織田公・豊臣公等モ、皆皇威ヲ借テ大業ヲモ被立候事ニ御座候、非常ノ時節ニ御座候へハ、非常ノ御処置ヲ以テ、同シクハ畿内ノ地ニ、長崎御入費丈御打替御尽力被為在候ハ、外ニハ一際勤王ノ御廉モ立、内ニハ薩長其上勤王ノ志アル諸藩自ラ合体連衡無疑、然ル時外力ハ他藩ノ侮ヲモ禦キ、永世保国ノ大助ニモ罷成、此先弥増京都ノ御請モ宜シク、三全無失ノ良策カト奉存上候、中策ハ、

元来御当国ハ、御高前ヨリハ御小国ニテ、御藩中ノ拜知高ヨリ、士卒ノ人数等、現実五十万石ノ御振廻シハ無之、乍恐一國独立ニテ、天下横行ハ勿論、無危難ト申程ノ御国勢ハ先無覺束相見ヘ申候へハ、是非トモ両三藩御親睦連衡不被為在シテハ、他邦ノ侮慢モ難計、幸ニ薩州ハ君侯御生国ニテ、順聖公御以来(順聖公御以来ニ非ス、順聖公ハ殊更御睦シク、事大小トナク御談合ア

リシ御事実ハ、斉彬公史ニ詳ナリ) 深キ御親ミニ被為在候処、近来何ト欺御双方御疎遠ノ様ニ奉窺、如何ノ御訳合ニ御座候ヤト、密ニ奉敷息候、薩州ノ儀ハ、古来天下ノ強国、殊ニ今度ノ儀魁ニテ、外ニ肩ヲ並ヘ候国無之、同邦トタニ能々御親ミ被遊候へハ、中津・久留米等ニモ御親縁被為在候へハ、御合体ノ計ヒハ、如何程モ可有御座、右薩米津ト相合セテ、四藩親睦連衡相整候へハ、他藩ヨリノ覬覦侮慢ノ念ハ絶テ起リ申間鋪候、是又国ヲ固クスルノ一長計ニ御座候、

七月、同藩ノ石井仙次郎廣郷ト共ニ、国家ノ為ニ尽力セヨトノ藩命ヲ受ク、上京ス、然レトモ國臣ハ別ニ中国辺ニ用事アレハ、京都ニテ出逢ントテ、先ニ国ヲ出タリ、其時草香江水際ト改称シテ、地行三番丁ノ家ヲ出ルトキ、(兼ノ誤平)海山に潜みし童も時を得て

けふは雲るに立登るなり

此歌短冊ニ書テ残シタレハ、其家ニ伝ヘテ秘藏スル処トナレリ、入京シテ自述ノ国体弁ヲ學習院ニ献ル、是ヨリ先ニ、朝廷国事懸リヲ置キタマヒシカトモ、議員ノ撰ヒ未タ精シカラサリシ故ニ、久坂玄瑞通武・轟武兵衛寛(嵐カ)敏、国事局員ハ公卿士庶ノ分チナク賢明ヲ撰ヒ給ヘト建

言シケルニ、八月十六日 朝廷ヨリ國臣ヲ召シテ、學習院出仕ヲ命シ、因事掛下局ヲ督セシメ給ヘリ、國臣即チ同志ト共ニ尊攘ノ大事ヲ決議シ、親征ノ盛挙ヲ贊成セントス、此時 天皇 神武天皇ノ陵ヲ拜シ給ヒ、春日山ニ駐驛シテ、親征ヲ議セントノ 勅ヲ下シ給フ、國臣モ榮進シテ大ニ志ヲ得シニ、中山侍從大和ニ走リテ兵ヲ挙シト聞ヘシカハ、國臣ヲ遣シテ鎮撫セシメ給フ、至リテ其暴挙ヲ制シケレトモ、既ニ戰ヲ交ヘケレハ、説諭モ行ハレスシテ帰京セシニ、朝議大ニ變シ、長門中將ノ堺町門ノ警衛ヲ罷メ、其藩士ノ入洛ヲ禁シ給ヒケレハ、其罷メラレシ輩、三條中納言等七人ヲ奉シテ國ニ還ル、國臣上疏シテ、其七人及ヒ長門中將ヲ寬典ニ処セラレト請ヘトモ用キラレス、學習院ノ官員モ散去リケレハ、國臣モ身ヲ引テ、木屋街ノ山中成太郎カ家ニ寓シケルカ、或夜幕吏新選組ノ輩ヲ遣シテ襲ヒ捕ヘントスルニ、國臣ハ山中ト共ニ酒樓ニ遊ヒテ在ラサレハ、捕手徒ニ還レリ、國臣婦リテ余登樓スルコト數度ニシテ損ナラサルハ無リシカ、今度ノミハ益ヲ得タリト笑ヒケリ、其後比喜多琴五郎盛徳カ庶兄海野貞藏高鞆後復比喜多氏ハ、勤王ノ意深ケレハ、暫ク比喜多カ家ニ潛居シタレトモ、幕吏ノ搜索嚴シケレ

ハ、一日廣郷カ寓居ニ來リ、己カ意ノ達セサルヲ語り、又足下ニハ藩ノ為ニカヲ尽サレト懇切ニ説諭シ去リシカ、終ニ僕熊藏ト阿波ノ長曾我部太七郎盛澄ヲ隨ヘ、筑前樓井大宮司帰國スト唱ヘテ、八月廿六日比喜多カ家ニ、

心ゆく頓てみなから蒞棄ん

ほこらはほこれ鬼のしこ草

ト書置タリ、夫ヨリ但馬朝來郡竹田村太田六右衛門正直カ宅ニ暫ク居テ、同志ヲ募リ、又佐々木將監ト称シ、九月周防ノ三田尻ニ下リ、三條前中納言ヲ奉シ、兵ヲ挙テ、吉野ノ義徒ニ応援セント勸メケレトモ肯允ナシ、澤前主水正是宣憲ヲ聞テ密ニ云、義徒ノ斃ル、ヲ余所ニ見ルニ忍ヒサレハ、余脱走セントアリシカハ、奉シテ將トセント決議シ、國臣ハ本國ノ老友朋友ニ書ヲ贈リテ決死ノ意ヲ告タリ、其書ニ云、

衍九

從三田尻一輪啓上仕候、益御泰然奉恐悦候、二私儀去々月廿六日京都ヲ發シ、但州へ罷下り候処、又々京町奉行ヨリ同心其外共十人計リ探索ニ入込候処、為知候者有之、去月廿日ノ夜出立、山越ニ播州へ出、当所へ罷下り申候、尤兼テ当所ニ下り候儀ハ、決策モ有之、旁右ノ通ニ御座候、此方ニテハ、三條公ヲ初御脱走ノ

七卿方ニモ追々拜謁、且長門守殿ニモ拜謁、山口ニ三條公ヨリ被命候御用ニテ、御馬拝借罷越、家老増田正・清水清太郎等へモ追々出會仕候、最早此方ノ都合モ大概相調候ニ付、不日ニ但州へ罷歸リ、義兵ヲ挙、大和ノ応援天下ノ大挙ヲ促シ待候節ニ御座候、此事ハ多端ニテ難尽筆紙、中旬迄ニハ必御耳ニ入候儀可有御座、就テハ熊藏儀却テ邪魔ト存候御暇ヲ遣シ指返シ申候、永々付添心ヲ添吳候付、今日迄召連候ヘトモ、大事ノ場ニ臨ミ候テハ入用無之、且親父力心配其身ノ不本意ト存、右ノ通ニ御座候、親元へ御返シ可被下候、東西奔走仕候儀ハ、此者ヨリ可申上候、最早此期ニ臨ミ、天朝ノ御為一命ヲ抛候上ハ、再拜顔之儀無覺束、万一天運強候ハ、采幣ヲ執テ拜顔可仕候、唯々正名公行ヲ以テ、天下後世ニ鄙名ヲ輝シ候ヲ御歎被下、是迄年來我侭不孝之罪ハ山々御免可被下候、此後之模様ハ実功可奉入御覽候、恐惶敬白、

十月朔日

平野二郎國臣

尊大人様

左ノ尺牘ハ、國臣友人ニ贈ル処ノ書ナリ、蓋シ該書ハ郷里ノ生父へ寄書ト同日ナラン、仍テ茲ニ参考ノ為ニ掲載ス、

各居御壯健奉賀候、扱テ天下ノ形勢ハ定テ御承知可被成、如何因循被成候哉以下數字ハ、臣子之所忍ニテハ有之間敷ト存候、抑モ君臣ハ天下ノ公道ニシテ、主従ハ後世之私事歎ト發明仕候、六親反而大孝顯レ、大道廢レテ仁義アルモノニ御座候、天朝立テ各藩立、神州有テ而シテ各藩アリ、奚ゾ其末ニ泥ミテ、其基本ヲ援ケサランヤ、今日ノ急務ハ〇ノ一ツニアリ、鬼神モ避

之ト言ハスヤ、区々トシテ徒ニ鎚銖ノ小計ヲ為スハ小人ナリ、愚俗ナリ、試ニ豪傑ノ実効ヲ見給フヘシ、不日ニ一軍ノ兵勢ヲ挙ケ動カシ、天下ノ耳目ヲ驚カシテ可入貴覽候、能ク目ヲ拭ヒ、耳ヲ洗ツテ、嚮フ十五日ヲ待給フ可シ、再會難期、匆々頓首、

亥十月朔日

防州三田尻ヨリ

平野次郎

國臣花押

建部武彦殿(自題)慶応元年賜死

鷹取碩庵殿(為雄)同死刑

小田部龍右衛門殿(為弘)現今生存

戸田六郎殿

中村哲藏殿(敬信)同死刑

其外福岡英雄

御中

大君に捧けまつりし我いのち

今こそすつる時は来にけり 大中臣國臣

淺香一索茂徳・月形洗蔵詳等ニ贈リシ書ノ尾ニ、

今しはしまてや都の花紅葉

御幸ある世となさて止むへき

又小田部龍右衛門為雄・戸田六郎茂弘・中村哲蔵敬信ニハ、

大王に捧けあまし、我命

今こそ捨る時は来にけれ

ト書送レリ、^{マ、(宣憲)マ、}澤氏ニ夜ニ乗シテ出賜ヘト約シテ、國臣

同藩ノ藤四郎茂親等ト旅装シテ、其寓居ノ招賢閣ノ下ニ

待シニ、寂然トシテ音ナシ、止メラレシカト各心ヲ痛メ

シニ、閣上ニ二三人ノ足音シテ徘徊スルカ如シ、國臣即

七尺ノ屏風モ跳ラハナトカ踰ヘサラン、羅綾ノ袂モ牽カ

ハナトカ断レサラント、古曲ヲ謡ヒシニ、國臣ノ在ルヲ

知リテ窓格ヲ放シテ出ラレシカハ、國臣・茂親及ヒ同藩

ノ堀六郎義則・仙田淡三郎正弘、秋月ノ戸原卯橘繼明、

長門ノ白石廉作^(資敏)・小田村信一^(敏)・南八郎^(河上正義)・和田小傳次等数

人随行シ、船ニ駕シテ去ル、長人驚キ船ヲ馳セテ追ハシ

メケレトモ及フ事能ハス、既ニシテ播磨ニ至リシニ、吉

野ノ義徒潰ヘヌト聞ヘケレハ、散去テ後挙ヲ期セントイ

フ人モ有ケレトモ、國臣既ニ一決シヌレハ、今更止ルヘ

キニアラス、別策ヲ施サントテ上陸シ、但馬ニ入り、荒

川主計ヲ遣シテ、出石ノ仙石讚岐守ニ澤主水正入京シテ、

三條卿等及ヒ毛利家ノ冤ヲ訴ヘント志シ、先家臣ヲ上洛

セシメテ情実ヲ探ラシメ、其報ヲ待テ、銀山ニ在ル從者

ニハ妄動ヲ禁シタレトモ、事由ヲ審ニセス、嫌疑アラン

コトヲ恐ル、カ故ニ告ト云ハシメシニ、仙石氏主計ヲ捕

ヘテ幕府ニ報セラレヌ、澤氏ノ從者是ヲ聞テ、銀山代官

川上猪太郎カ解舍ヲ襲ヒ、金穀ヲ取テ軍用ニ供ス、而シ

テ京都ニ迫リ、幕吏ヲ払ヒ、攘夷ノ挙ヲナサントテ檄文

ヲ廻ラシ、幕府攘夷ノ詔ヲ奉セス、守護職松平肥後守

等、詔ヲ矯メテ正義ノ公卿ヲ斥ケ、親兵ヲ解キテ、主上

ハ賊中ニ孤立シテ壅蔽セラレ給ヘリ、此時ニ当リテ男子

タル者身ヲ抛チ、力ヲ戮セテ、速ニ奸賊ヲ誅シ、外夷ヲ

払ハスハ有ヘカラスト告タリケレハ、土人群起シ、且水

戸・長門等脱藩ノ志士来聚シテ、近畿大ニ動揺ス、幕吏

驚キ、出石・姫路・龍野・豊岡等ノ諸藩ニ命シテ攻撃シ

ム、國臣參謀トナリ、澤氏ヲ奉シテ(兵庫縣)養父郡妙見山ニ據リテ拒戦シタルニ、烏合ノ土人大敵ニ恐怖シテ散潰シ、或ハ反応ス、國臣等挺身格闘シテ、各攻兵ヲ斃シケルニ、銃丸國臣カ腰骨ニ中リ、且終ニ支フヘカラスト覚リテ、歌ヲ詠シテ云、

世の中はよしあし引の山桜

ちるこそ花の心なりけれ

即、澤氏ヲ勸メテ走ラシメケレハ、小松ノ田岡新三郎・出石ノ高橋甲太郎等ヲ随ヘテ伊豫ニ赴カレタリ、十月十三日軍敗レケレハ、戸原・小田村・南・和田及ヒ長門ノ久留新三郎・肥田左衛門・西村清太郎・伊藤三郎(恒徳)・下瀬猛彦・井關秀太郎(金國)・長野衛助等ハ、妙見山中ニテ戦没シ、或ハ割腹ス、長曾我部ト薩摩ノ美玉三平親輔、但馬ノ中原太郎・中條右京等ハ、追兵ノ為ニ殲サレ、太田正道ト因幡ノ大村辰之助・横田友次郎(増之)、膳所ノ本田素行等ハ虜トナル(美玉三平戦死)、國臣ハ主水正既ニ脱セラレシヲ見テ西ニ走リシニ、豊岡藩人ニ追ハレ、同十五日竟ニ朝來(兵庫縣)郡綱場村ノ船中ニテ捕ヘラレ、京師ニ護送シ、六角ノ獄ニ下サレケリ、創少シ愈ケレハ、神皇正統記ヲ講シテ幽鬱ヲ遣ル、同獄ノ志士是ヲ聞テ感慨セサル者ナシ(平野

獄中に死ス)、又自國論ヲ著ス、明歳長門藩人君側ノ悪ヲ弘ハントテ、禁闕ニ迫リシカハ、防兵火ヲ放チ、京師過半其災ニ罹ル、幕吏此機会ニ乘シテ獄ヲ破ル者アランコトヲ恐レ、獄中ノ志士三十二人ヲ斬ル、國臣筆ヲ乞ヒテ、憂國十年東走西馳成否任天魂魄歸地

見よや人嵐の庭の紅葉は

何れ一葉も散らずやはある

ト書テ、禁闕ノ方ニ向ヒ再拜拍手シ、從容トシテ刑ニ就ク、時ニ元治元年甲子七月廿日、享年三十七也、此時骨立肉脱シ鬚髮皆白ク、恰モ老叟ノ如シ、只眼光耿々トシテ人ヲ射ルノミ、是數年ノ憂苦血液枯燥シ、肺脾凋傷ノ致ス処ナリ、國臣幼年ヨリ父ニ使仗縛縛ノ術ト拳法ヲ學ヒ、其濫奥ヲ究メ、杖ニ係ル古今ノ事實ヲ編輯シテ一書トセリ、其他劍銃弓馬ニ至ル迄能ク其意ヲ獲テ、手能是ニ応ス、藩學訓導正木善大夫昌陽ハ、國臣カ竹馬ノ友ナリ、其生徒ノ為ニ連夜講書スル側ニ座シテ聽畢リ、疑難ヲ討論シテ午夜ニ至ル事三年怠ラス、又青柳彦次郎種春光國學、龜井鐵次郎鉄力儒學ノ講説ヲ聽キ、雅楽ヲ富永辰十郎謙ニ學フ、其勉強人ニ過絶シ、夜以テ日ニ繼ク、書ヲ讀ミ文ヲ作ルコト、スヘテ専師ナクシテ自得ニ出ル

コト多シ、然レトモ富永カ教誨樂ニ止ラサルヲ感シ、其死スルニ及ヒ、國臣石ニテ洗手盆ヲ製シ、

世の中の人數らしく成ぬるハ

大人の教によりてなりけり

ト題シテ其墓側ニ置ケリ、國臣志氣倜儻識量卓絶、細行ニ拘ハラズ、志ス処必成サレハ止マス、西鄙ノ一銃手ニシテ、朝廷ノ陵夷ヲ傷ミ、霸府盛大ニシテ、其命令天下ニ行ハル、ノ日、既ニ其輔クルニ足ラサルヲ知り、王室ヲ恢復シテ典礼ヲ起シ、太平ヲ致サント欲シ、妻子ヲ棄テ、四方ニ流寓シ、寒暑ヲ犯シ辛酸ヲ忍ヒ、百挫スレトモ少モ其志ヲ屈セス、一日モ尊王ノ大義ヲ忘ル、事ナシ、年末タ強仕ニ滿タスシテ儉子ノ手ニ死シ、其志遂ケサレトモ其忠胆義心上下ニ克孚シテ、婦女童兒トイヘトモ平野二郎ヲ知ラサルハナシ、明治一新ノ 聖代ニ及ヒ、藩主長溥卿、國臣カ夙ニ 皇室ノ衰替ヲ復セントテ、東西ニ奔走シ尽力苦身セシヲ感シ、京都靈山ニ諸藩ノ志士ト同シク、石ニ國臣カ姓名ヲ題シテ建テラレ、又本國千代松原ニモ碑ヲ設ケテ、二所トモニ祭典ヲ命シ、其族人ニ永世毎年白銀二十枚ヲ与ヘテ、其家祭ノ資ニ充シメラル、澤宣嘉長崎府知事ト成テ下向セラレ、國臣カ義拳ノ

志ヲ遂ケサリシハ遺憾ニ堪ヘストテ、其家ニ香花ノ料ヲ与ヘラル、明治四年七月藩知事長知、國臣カ勤王誠忠ヲ嘉シ、特別ヲ以テ小金丸家ニ留メシ子小金丸六平太種二ヲ士族トシ、其世禄ニ四口月俸ト米七石余ヲ賜ヒ、國臣カ繼トシ、種ニカ家禄ハ其表弟秀島種三ニ与ヘテ、小金丸ノ後トセラル、其後 朝廷ヨリ旧藩愆期シテ、与ヘシ禄ハ皆收公シ給ヒケレハ、種ニモ禄ヲ失ヒシニ、県令澤簡徳上書シテ、國臣カ嗣ハ他ニ比スヘカラサル旨ヲ、再(マ)マテ分疏シケレハ、復種二ニノミ原禄ヲ賜ヒタリ、

國臣ハ誠カ外族ナリ、故ニ行状ハ其自語ル処ヲ主トシ、且其家ニ存セル遺書及ヒ其兄弟朋友ノ見聞セシト、馬場徳次郎文英カ撰ヒシ平野國臣傳等ヲ併セ取リテ獻スルコト右ノ如シ、或説ニ鎮西ノ士民國臣ニ從学スルモノ多シ、又米國拒絶防禦ノ方略ヲ幕府ニ獻シテ、其嘉賞銀若干ヲ受タリトイヘトモ、共ニ無キ事也、又元治元年二月十八日刑ニ就ク、年四十三、一説ニハ死スル時三十九トアリ、共ニ誤ナリ、又國臣等刑ニ就クノ日、雷雨晦冥咫尺ヲ弁セス、暴風屋ヲ破リ樹ヲ拔キ、震動詰旦ニ及フ、京師ノ士民皆曰、飛竜天ニ登ルトアリ、是雲井ニ立登ルノ歌ニ応セシ一話柄ナリ、然レトモ國

臣カ対門ノ親友小田部為雄ハ藩邸ニ在リテ、此日天王山ノ戦状ヲ探ル為ニ趣キテ、帰路鳥羽ニ及ヒシニ、獄中ノ志士刑ニ死セシヲ聞テ、涙ヲ垂レテ京ヲ望メハ、延燒尚盛ニシテ炎焰空ニ滿テリ、日ヲ終ルマテ雷雨アリシヲ知ラスト云、又前ニ載セシ管見策ハ、馬場文英カ國臣自筆ヲ得テ、臨摹セシトイフヲ借リテ写セリ、然ルニ國臣カ寄遇セシ松村古文カ子秀實ハ、其稿ニ關係セシトキク、其說ニ回天管見策ハ元俗文長篇ナリ、真木保臣カ清川八郎カ改作セシナラン歟ト、

國臣カ討幕議九重ノ天ニ達セシハ、既ニ前ニ記シタリシカ、脱稿ノ後三條西公ノ行状ヲ見ル事ヲ得テ、乙覽ヲ經シテ確知シヌ、其榮幸伝ヘスンハ有ヘカラス、故ニ其文ヲ抄シテ附載ス、曰、

公諱季知、字子迪、家称三條西、文久二年十二月、補國事局議員、既而帝一日召見公等議員数人、親下勅語曰、朕視幕府所為、入則奏攘夷、出則締外交、言行背馳、事多出於欺罔、以此涉数月、國家必瓦解、朕雖憂憤之、抑而不發焉者、蓋有旨也、然近時國憲日顛墜、庶民苦塗炭、朕不忍拱手座視、曩者平野國臣奏討幕議、朕秘之胸臆、以至今日、幕府益違戾詔勅、欲以逞私權、由是觀之、國

家命脈、宗廟祭祀、殆將絕、豈拱手座視之秋哉、乃欲親率六師討攘内害外患、朕意所斯、期力在國是確立國民協和也爾、汝等竭股肱力、以副朕意、公俯伏對日、陛下宸憂非一日、臣等不堪慚懼、雖然臣齡已踰五旬、老悞何能、仆而後止矣、是臣之微衷也、臣若有保余齡、鞠躬尽力、敢不副宸慮、帝再下勅語曰、朕不渝命、汝等勿敢渝、公於是與國事局諸員、議論問難、日謀皇憲振張、

蒲生重章カ近世偉人傳ニ云、嗚呼若与國臣同時経艱楚西郷公、生逢遭於郵隆之世、陞高位、居顯職、則向艱楚瀕死之苦、亦可以償焉、而如國臣・月照、或斃于姦鋒之下、或与汨羅之鬼為友、豈不哀哉、抑苦節之士、生際今日之郵隆、而猶沈淪乎泥塗者、亦不勝数、而當時國臣諸子之所愧齒者、往々取貴顯、其是亦有不可以已者歟、

坂谷素曰、苦節如平野子、亦古今之所罕、読其伝、想其志、実不堪慷慨、抑亦彼一時、此一時、方今尊王愛國之道、果何在焉、不可不深慮熟講也、

川田剛曰、慷慨激烈、近古少比、今読三策、生氣凜々、使人毛髮森然上豎、

莊司晋太郎カ愛國民権家列傳ニ云、或人ノ曰、高杉晋作春風、武市半平太小楯、坂本龍馬直柔、久坂義助通武、

平野二郎ノ諸士幸ニシテ明治ノ今日ニ存セハ、高杉ハ陸軍大將、坂本ハ海軍大將、武市ハ司法卿、久坂ハ文部卿、平野ハ内務卿ノ任ニ当ル必矣ト、

明治十五年國臣ヲ追慕スル、

等正三位東久世氏ニ乞ヒテ、國臣カ碑文ヲ撰ハシメ、石ニ刻シテ^石ニ建テリ、同十一月廿三日志士大会シテ祭典ヲ行ヒ、且石津發^國カ此志士傳ノ國臣ノ事跡ヲ記述セシト、碑文ヲ併セテ小冊トシテ上木シ、同好ニ頒チタリ、

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

文久元年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」の記載あり
(紙数九十五枚)〕

目録

- 文久元年六月給地高員数総
- 島津周防(久光公旧名)山田壮右衛門ニ与ル書第一
- 全上第二
- 全上第三
- 全上第四
- 全上第五
- 黒田長溥公山田壮右衛門へ賜書

山田英齊(壮右衛門)書翰

真宗ノ延蔓ヲ嚴誡ス(佐土原藩注意)

在邸水戸脱藩士鈴木岸二氏ノ書翰

竹下清右衛門小松帯刀へ与フ書

堀仲左衛門意見書

森清蔵外一名田中河内介ニ与ル書

忠義公中山實善ヲ上京セシメ御剣ヲ献シ及ヒ建言ノ詞

中山實善上京日記抄

当時ノ形勢

道島正亮建言

芝藩邸焼亡(安田助左衛門日記鈔)

伊牟田尚平建言

参考 大久保利通日記抄

当時藩情概略(編年雜錄鈔)

柴山良助蒸氣船伝習意見書

軍事ニ関スル市來廣貫意見建言

以上二十四条

四六一 文久元年六月給地高員数総(御前帳鈔)

給地高四拾八万四千九百六拾六石七斗八升五勺式才

内

式百七石式斗三升三合四勺壹才

(薄上様高懸出米ノ通懸)
右壹行前々ヨリ出米御免

定出米

真米壹万九千五百五拾六石式斗三升六合

赤米壹万九千五百五拾六石式斗三升六合

賦米

真米五千三百三拾四石六斗三升五合

三口

合真赤四万四千四百四拾七石壹斗壹合

鹿兒島諸士并寺院高

高三拾五万九千七百四拾壹石八升三合四勺三才

三州郷士高

(合ニ外城土著士ノ通懸)
高拾貳万五千貳百貳拾五石七斗壹合九才

同六百七拾石

右御仏餉高

同八百石九升六合四勺貳才

(薄上様高ヲ藩庁買上ケタル通懸)
右御買入高

同千八拾九石四斗貳升七合七勺四才

(故アリテ藩庁引上ケタル通懸)
右上地高

本琉球高拾貳万四千貳百三石七斗九勺四才

(前記出米)
但高壹石八升壹合

定出米七千六百三拾貳石六斗七合

賦米千三拾六石五斗三升八合

二口合出米八千六百六拾九石式升五合

右本払帳ヨリ書拔、御前帳ニ備フ云々、

四六二 島津周防 (久光公旧名) 山田壮右衛門二

与ル書第一

先月十七日之細書篤ト致拜見候、御参府一条此節迄ハ
三ヶ月御延ノ方ニ御決定相成、御願書御差出之処、早

速御付札ヲ以御願通被仰出候、

(後心) 太守様ハ勿論、拙者初御役々別テ致安心候、偏ニ

(信懸) 南部様被遊御世話候故ノ御事ト難有奉存上之折、御礼

宜敷被申上給度候、

(長懸) 筑前様ニモ御参府御早日御承知之由、先度カノ御方ヨ

リ被仰下候ニ付、御参府ノ上ハ

南部様被仰談、御都合向猶又ヨロシキ様御取計被成下

度奉願候、其節ハ貴殿モ自ら參上ニテ、細事被申上候

儀ト相考申候、表達テ御参府御猶予被仰出候様、精々

取計有之度義ト存申候、

一御月延御願濟ニ付テハ、御參詣其外御出之儀、且御乘馬並御鎗術等御庭内ノ分ハ、思召次第ニテ御宜敷候得共、御乘馬ニテ御出又ハ御慰事御出候義ハ、今暫ク御見合之方ニ被申越候ニ付、則其段申上候処、別テ御悦

ノ事ニ候、就テハ則今日御忌日故、福昌寺迄被遊御仏詣、近日中磯ヘモ御乘輿ニテ御出之思召ニ候、

一右御願濟ニ付テハ、筑前様 南部様ハ勿論、

久世候又ハ去方等ヘ御謝礼之義、委曲被申越、一々致

承知候、脇坂侯ノ義モ同断致承知候、

一御參府御遅引之訳、

天璋院様ヘ申上不相成候テハ御不都合之事故、細書被

相認、南部様ヘモ御内見ニ入レ、小ノ島ヘ被相渡、

同人ヨリ 御城ヘ申上相成候由ニテ、小ノ島ヘノ文ノ

写被差遣、篤ト致披見候、且又

公方様 天璋院様ヘ、御内々御献上物並御局初ヘ遣シ

物等、御側役方ヘ被申越候書面モ致披見候、別テノ御

都合ノヨシ恐悦ノ事ニ候、

一井上^(二作)一条委細相心得申候、最早願次(何事乎、知ルニ由

ナシ)取揚無之向ニ、其許御家老合被居候由、

一奥御右筆中村氏ヘ、御先代様御同様御内々御申込之

一条、細々被申越致承知候、イツレ右通之御手数モ有之候方、可然相考申候、何分宜敷様被取計ニテ可有之候、

一七月廿四日御日付ニテ、筑前ヨリ御直書被成下致拜

見候処、彼御方御參府御早メ御承知被遊候由、決テ

南部様ヨリ 久世候ヘ被仰込候御訳合モ有之候ニ付、

夫故ノ事ト御考被遊候段被仰下候、右之御端書ニ左之

通、

有村親並兄弟共、今以御城下ニ居り候哉、当時之処

ハ同人共子細ハ無之候ヘトモ、公刃之御響合モ御

座候事故、島々ヘノ勤向等被仰付、不殘引越居候ヘ

ハ、猶更御都合可然奉存候、万一老中相尋候節、島

々ヘ遣置候ト申候ヘハ、至テ御都合可然奉存候ヘト

モ、又思召モ可有之之心付候間、内々申上置候、

右通被仰下候ニ付、日置申談、先度猶其許町奉行ヨリ、

有村家内人数・役名・歳付等、委細相記可差出旨、御

留守居致承知候節、独身之御届相成候(旧慣手段)御届

書写(送ス)差上、右通之事御座候間、有村親兄弟ノ

儀ハ、先御沙汰ナシニ被成下度、乍併思召次第ト御返

答申上置候処、右通之手数ニ相成居候ヘハ、ヨロシク

ト又々返書被成下候、カノ者共只今之処ハ先平穩之向
ニ候ヘトモ、右様島方杯へ被差遣候時宜ニ相成候ハ、
又々混雜モ難計相考候ニ付、右通御返答申上候事ニ候、
御參府之上ハ、御咄モ可被為在候ニ付、為心得申遣置
候、且又

筑前様御參府御早目ニ付テハ、第一此御方様ノ御訳合
故ト奉存候ニ付、

茂久公太守様ヨリモ御直書ヲ以テ、猶又御頼被仰進、御錢別

トシテ御品々被進候方可宜ト内膳へ申談、其通被進候、

拙者ヨリモ同様進上イタシ候御品々ノ儀ハ、御側役方

ヨリ申越ニテ可有之候、尤右通之御事故、御參府ノ上

ハ、思召被相伺、早御暇被 仰出候へハ、御仕合ノ御

事ニモ被為在候ハ、去方等へ御手入等、此御方ヨリ

被成進候方可宜敷哉ト、鳥津左衛門日置杯へモ申談候間、貴殿其

趣意被相含、中村氏へ内話被致候義ハ、考次第ノ事ニ

候、自ラ 南部様思召モ可被為在哉ト奉存候、

一彦根動静ノ義、京都ヨリ聞合申越候大意、

筑前様へモ申上越候ニ付、御參府ノ上御沙汰モ可有之

候間、心得之為申遣候、

一去ル八日、筑前之者三人飛脚ノ由ニテ爰許へ参り、日

置方へ書付差出候一条ニ付テハ、(佐兵衛)蓑田方へ委曲申越相

成候積ニ候間、細事ハ蓑田ヨリ可被承答ニ候ヘトモ、

大意申述候、此節

筑前様御參府御早目ニ付テハ、定テ奸人ノ計策ニテ、

御參府之上ハ、御隠居被仰出候事ニテハ有之間敷哉ト

懸念申上、カノ方有志之面々申談、名代使トシテ差越

候間、何卒(戊午ノ疑獄ニ関シ、幕府ハ退隠ヲ促サムトスル

説アリタリ)

(茂久公)太守様ヨリ、御參府御猶予ノ方ニ御取計被成下度、尤

細事ハ口上ニテモ可申上段、書記有之候ニ付、産物方

(各札明)御裁許掛梁瀬源之進被差出、成行御尋相成候、且御參

府之儀ハ、 南部様ヨリ被仰進候御意味合之御事モ有

之候間、何モ懸念申上候訳ニハ有之間敷旨申聞候処、

其義ハ安心イタシ候由、乍併外ニ段々不容易事共申出、

何分御立後ニ相成候ハ、混雜之儀到来イタシ候ハ、

案中之由候ニ付、何卒此

御方様ヨリ御使ニテモ被差遣、右之趣意

筑前様へ被仰進被下度段申出候ニ付、段々及吟味候処、

イツレ不輕事柄ニ付テハ、

筑前様御存不被遊候テハ相濟間敷、乍併初テ御目通申

上候者ヲ被差遣候テモ、却テ御都合之程如何ト申談、此節御留守中同志之者共申合、精々取鎮可致、

筑前様へ御使ノ処ハ、初テノ者被差出候テハ、御都合

向却テ如何ニ付、貴殿之事申聞、当分出府之事候ニ付、

御参府之上貴殿ヨリ申上ニ相成候様被仰遣候間、致安

心可罷帰ト申聞、漸々致承服罷帰候、就テハ乍大義、

御参府之上ハ御都合ヲ以、不悪御聞取被遊候様可被申

上候、拙者ハ初之程致推量候者、(信順、八戸藩志)南部様ヨリ(広周、

老出侯へ、久世黒田長傳)

筑前様ニハ御近国故、爰許人氣ノ次第、御案内モ可被

為在ト被遊御内話候由候へハ、其段彼御方へモ被仰遣

候ニ付、筑前様ニモ猶又為御聞合、御手許ヨリ態ト

右様ノ者ヲ被差出ニテハ有之間敷哉ト、疑惑イタシ候

へトモ、段々重役ノ事御政事向杯申出候ニ付テハ、右

様ノ事ニテモ有之間敷、何分イツ方モ(當時浪士)一名有志中ト申者、

困リタル者ニ御座候、先ハ右御内用答旁此段申入候、

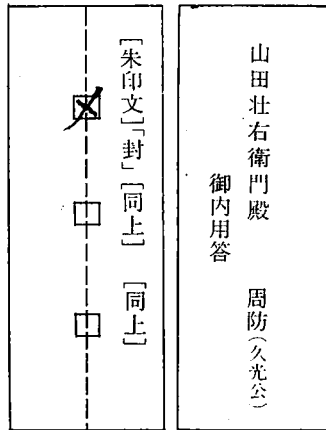
以上、

八月廿日認

尚々、表達テ御猶予被仰出候処、精々可被取計候、

(何等ノ事申知ルニ由ナシ)筑前之一条モ不容易義ニテ、此以後モ右様之者、爰

許へ差越候モ難計、別テ懸念之事ニ候、毎モナカラ大乱筆御推覽可給候、以上、



四六三 全上第二

去ル三日ノ書状廿五日相達、致披見候、然ハ御参府一

条御都合能相成候、以後之趣共細々御申越得其意申候、

筑前様御参府之上、猶又 南部様被仰談、ヨロシク御

取計被遊候思召之由、難有奉承知候、

一筑前様ヨリ去ル六日ノ御書十三日相届致拜見候処、八

月廿二日御発駕ノ 思召ニ被為入候処、御疝邪ノ御容

体ニテ被遊御延引候段被仰下、且御別紙ヲ以少々御混

雑ノ義御到来ノ由、細々被仰下奉驚入候、(何等ノ事申知ルニ由ナシ)南部様へ

モ右之趣被仰進候由、定テ貴殿ニモ承知被致候筈ト存
申候、先便粗申越候通、爰許へ筑前御家臣三人差越
願立候一条、筑前様達御聴、爰許ニテ申出候成行、
決テ間違ノ事モ可有之ト御推量被遊候ニ付、委曲可申
上旨被仰下候、就テハ御同人様御参府ノ上、貴殿ヨリ
被申上候様申越相成候筈候処、右通最早御聞通相成候
ニ付テハ、細事書面ニテハ解兼候義モ有之候ニ付、御
手許ヨリ御不快御見舞旁御使トシテ、伊集院周八、去
ル十八日、爰元出立候テ、筑前へ被差越候、未帰着無
之候ニ付、彼御方御都合向不相分、如何ノ御模様ニ被
為在候哉ト致懸念候、右次第故、南部様御談合ニ相成
候御都合、迎モ御出来被遊間敷候間、此上ハ御一人様
ニテ、(マ)御参府御猶予被仰出候様、御世話被成進
度、偏ニ奉願候間、貴殿参上候折、右ノ趣宜敷被申上
度ト相考申候、

一 彦根婦女一条、(宮女)天璋院付老女(事出考フヘシ)
一 小野島へ細々申合被置候由得其意候、
(水谷浪士三十七人來郎ヲ云)
一 今般浪人共推参ノ義、存外ノ事ニテ驚入申候、其表一

統心配ノ程致遠察候、右ニ付貴殿南部様へ参上御相
談被申上、御同人様ヨリ(広周、老中)久世候へ被仰込候御事共、
御家老方ヨリハ何共不申來候得共、定テ現事ノ成行ニ

テ、外ニ入組ノ訳ハ無之故ノ義ト相考候へトモ、久
世候ノ御返答振且去方ノ口氣等、内分承度事ニ御座候、
(奥右筆等ノ一書)何分ニモ不容易時節、油断難致事ニ御座候、殊ニ彦根
ノ人氣、此一条ヨリ如何有之候半ト懸念ノ至ニ候、浪
(十七)人共ニモ平穩ニ本国々へ御引渡相成候へハ、ヨロシク
候得共、彼者共申立候趣ヲ以推量イタシ候へハ、此モ
至極ノ難事ト相考申候、

一 山崎拾義ニ付、別紙ヲ以細々被申越得其意候、筑前
様ヨリ未何共不被仰越候、若右様候儀致承知候ハ、
ヨロシキ様御答申上候含候、

一 町田へ被申越候其表御門御取締ノ一条承届候、同人ヨ
(内應)リ委曲可申越候、先ハ右旁以乱毫申越候、以上、

九月廿七日

(島津久光)
周防

山田壮右衛門殿
(為正)

御内用答

尚々爰許先ハ無相替事候、可被心易候、以上、

四六四 全上第三

十月廿一日之御内用事篤ト致披見候、先以於其許
御惣方様御揃御機嫌能恐悦奉存候、然ハ御参府一条、

此節ハ御内願通被 仰出、

太守様ハ勿論、拙者ニ於テモ別テ難有、大安心イタシ

候、日置初モ同様ノ事ニ候、就テハ右御手続之次第細

々被申越得其意申候、南部様偏ニ御差ハマリ被遊御

世話候故之義ト、不殘難有奉存候、御礼別段申上候ヘ

トモ、猶又貴殿ヨリモ御取成ヨロシク頼入申候、

一久世候ヘ被進物ノ義モ細々可申越尤ニ候、其通御運ヒ

ニ相成候、中村氏ヘ被道物ノ義モ可被致承知候、

一同月廿六日之御内用事モ篤ト致披見候、日置出府之義

ニ付巨細被申越得其意申候、明廿七日御帰殿之苦候間、

其上被仰付筋ニ候、

右ニ付南部様思召之処、且其許吟味之趣、伊集院次

左衛門ヨリ委細承申候、御尤之義ニ相考申候、

一南部様ヘ御謝礼之義ニ付、細々被申越趣尤之次第ニ候、

御側役方ヘモ被申越候由、直記ヨリ承リ申候、委細直

記ヨリ申越ニテ可有之候、

一久世候ヘ貴殿御内使者之義ニ付、

聆徳院様ヘ願之趣有之由、願意御聞濟相成、万事御都

合能相運ヒ候段被申越、得其意候、御同人様ヘ御礼之

義、今般拙者ヨリ寒中御機嫌伺サシ上候間、其副書ニ

右之段申上越候、

一浪人一条之義、先書申越趣有之候処、貴殿内存ノ次第

委曲被申越、尤之次第ニ候、此節伊集院ヨリ細々承、

御届書並ニ水戸様御方ヘ引合之書面等致熟覽候、何分

先方ヘ御引戻之処、六ヶ敷義ト相見得申候、誠ニ困リ

入候事ニ候、

一筑前様御事、先日被遊御発駕候由、伊集院次左衛門ヨ

リ承リ候、此節飛脚ノ者モ申出候由、未彼御方ヨリ何共

不被仰越候、人氣等モ静リ候儀ニテ、能キ御都合ト奉

存候、就テハ、今般之御礼事差迫申候間、御着之上、

貴殿ヨリ差上給度頼入申候、先ハ御内用答迄大乱筆ヲ

以申越候、以上、

十一月廿六日認 周 防

山田壮右衛門殿

御内用答

尚々爰許何モ無相替候、明日御帰殿之筈ニ候、此節

之一条貴殿大骨折之義、日置・町田杯咄承申候、且

其御屋敷中御取締向之義、今般日置出府之節被仰越、

御内定ニ候、以上、

四六五 全上第四

昨日申後レ候ニ付、以書面申入候、御参府一条モ、公

辺御都合向聞合有之度候、秋ニ相成候方、別テ宜敷ト

相考申候、且 筑前侯拙者心底御疑念不被為在様、偏

ニ相頼申候、寒天之砌、殊ニ大事之御用向心配之儀致

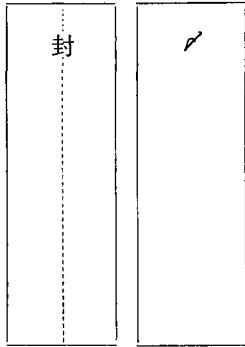
推察候、乍併道中筋之懸念外人相考候ハ、過慮之様

相考申候、夫トテモ用心被致度儀ニ候、出府之上吉左

右偏ニ待入候、以上、

十一月廿六日 防州

壮右衛門殿



四六六 全上第五

大坂ヨリ書状去ル廿五日相達、篤ト致披見候、寒天之

御道中無恙着坂致大慶候、

一 筑前表之儀巨細御申越、御都合向別テヨロシク候由、

頓ト致安心候、御封事御差出候儀ハ、先御見合ノ段細

々尊慮之趣御尤之次第ニ候、御返簡モ被成下致拜見候、

重畳御入念之御趣意、殊ニ御品迄モ被成下難有奉存候、

水府一条御懸念之段御尤之儀ニ候、且 太守様御側向

人柄ノ事迄モ被仰下、旁難有致承知候、其中好便モ有

之候ハ、貴殿ヨリモ御礼申上給度頼存申候、

一 御参府一条モ、筑前侯ノ尊慮御尤ト奉存候、貴殿出

立前ハ、秋迄御延引之御都合事、状ヲ以申遣候ヘトモ、

其後日置杯申談、イツレ御定例通御参府之方、可然ト

決定イタシ、最早御日限モ被 仰出候、多分承知可被

致候、就テハ去方聞合ニモ及申間敷候、

一 堀何某之儀モ、其後日置申談、御内用ニテ罷下り候様、

急飛脚御差立候、最早其許出立之筈ト相考申候(過激ノ

徒鎮撫ノ為メナリシト大久保利通日記参看)、此一条ニハ少

々入組候事モ有之候ヘトモ、無事ニ相成申候、(谷村・

兒玉・岸良杯、当分ハ穩ノ模様ニテ、旁仕合ノ事ニ御

座候、其許ニテモ、堀外ニ田中・有村俊齋ナト、申者

共モ有之由ニ候ヘトモ、多分堀出立ニ相成候ハ、先

ハ静リ可申敷、若イカ、ノ次第共相聞得候ハ、早速御申越旨可有之候、

一御金繰ノ一条日置へ申遣、カノ方ヨリ委細承申候、御献金三万両ノ御内定ニテ、其許御家老へ問合相成申候、定テ御承知之答ト相考申候、貴殿ニモ御発駕前御下、細直ニ演達有之度段、尤之儀被存候、イツレ右通無之候テハ相済間敷候、其外巨細之儀ハ、日置方ヨリ可被申越候、先ハ右旁申入度、如此御座候、猶下着之上細事可承候、取込大乱筆ヨロシク見分可給候、以上、

十二月廿七日認メ

尚々其許御下部家内へ、御内々御金拝領可被仰付トノ事ニテ、町田ヨリ極内申越候通、嫌疑不相成様取計可被致候、爰許新納氏モ御供並諸掛御免ニテ、川上式部(久美)へ代リ被仰付、為御心得申遣候、以上、

山田壮右衛門殿
御内用向御答
周防

此御書旨ヲ以テ、当時公ノ深旨ヲ知ルノ一端トス、石室秘稿及

ヒ大久保利通日記等参照スヘシ、

「朱印文」
「緘」

四六七 黒田長溥公山田壮右衛門へ賜書

去十八日之封之物致披見候、今日ニ飛脚着相成大トリ

込、入用計認遣候、

一 〇〇ル封之物遣候事、間ニ逢候由、委細承知都合ヨリ

致安心候、

一 南部心願之事致承知候、何卒一ヶ条ナリ共出来候様存

候、段々其方モ働候事ト存候、

一 芝焼失氣之毒之事候、右ニ付南部ヨリノ取扱其方へ咄

候由ニ付、徳壽院初小ノ島・花川初惣女中へ、此方ヨ

リ被下金取計、都合百九拾二両取替置候ヨシ承知イタ

シ候、事々急ニ取計都合モヨク安心イタシ候、右様之

事ハ、延引イタシ候テハ難有味ウスク、早速ニ被下大

ニ安心イタシ候、然シ其方心配ハ察シ申候、右金子御

戻シハ、早速山城へ内話イタシ居候、同人モ早春ニ出

府ニ付、其上ニテ御戻シ候テ可然申付置候、只今ト申テハ久野一角モ留守ニ付、埒明不申旨、右之通ニ申付置候間、左様承知可致候、山城モ右取計至極宜敷ト申居候、右安心ノタメ、誠以大乱書如此候、頓首、

十二月廿四日

尚々飛脚段々延引、先日ヨリ認置候書状モ遣シ候、以上、

内用

平安直披

斯書ハ、黒田長薄公カ山田壮右衛門へ与ヘラレタルモノニテ、本書山田力家ニ蔵ス、前記久光公ノ御書ニ対セラレタルモノナルカ故、茲ニ記シテ参考ニ供ス、

四六八 山田英齊壮右衛門書翰

其後ハ御疎遠罷過申候、先々御堅勝被成御座、奉珍重候、然ハ過刻ハ御手帖被下忝致拜見候、少々時候ニ御當之由、定テ当分之事ト奉存候ヘトモ、加様揃兼候時季ニ御座候間、随分御保養被成度、呉々モ奉存候、下拙モ翔鳳丸ヨリ帰京被仰付、明廿日出帆之賦ニ御座候、(飛鳥)急々之事ニテ緩々御咄モ出来兼、(情カ)残情千万御座候、シ

カシ此度ハ格別隙取候義ニモ有之間敷相考申候間、兎角罷下候上ニ、何カト御咄申上候、折角時下無御痛様被成度候、此旨勿々如斯御座候、可悦、

九月十九日

英齊

於々久良閣下

四六九 真宗ノ延蔓ヲ敵誅ス(佐土原藩注意)

(西寺佐土原ニ在リ)宗稱寺・蓮光寺住職交代之節、密ニ大目付宅(全藩)へ召呼、口達申渡之御趣意、御本家様御代々一向宗御禁止候処、密々致信向、剩旅僧等引入法談聴聞相弘、御国政ノ妨相成、御取締嚴密御手ヲ被召付儀ニ付、御当国之儀モ御禁止可被為在筈之処、

御先代様深思召之訳有之、二ヶ寺被建置、当時ニ至リ致繁立候儀、偏

御先代様御恩沢候、然ハ御本家御領内へ為法談罷下候旅僧等、参宿之節忍セ置、辺路之案内亦ハ引入候致手伝候テハ、誠不忠至極ニ付、

御先代様被建置候御由緒之訳ヲ奉忘却、不審之旅僧等参宿之節ハ、不入込様致理解、其上不聞入候敷、又ハ引入之致手伝候者被見及候者留置、隱密方横目へ内密

可致引合、左候得ハ奉対

御先代様御報恩之一筋、且ハ御本家様御都合別段之御事候、右次第御隠密之儀ニ付、親子兄弟内縁之者タリトモ、一切口外致間敷、万一両寺ヨリ相洩候聞得モ候ハ、被為取置候儀モ可有之、別テ大切成訊柄ニ付、厚其意ヲ合忠誠ヲ可尽、尤モ右之御趣意ハ臨終ニ至、相続之後住へ屹ト可致口授候、以上、

右之通此節淡路守様ヨリ御書取ヲ以テ、猶又隠密兩寺へ仰渡相成候旨及御掛合候ニ付、右御書付之写宗(鹿兒島)

門方へ被相下候ニ付、見置候様御家老座書役上村休介ヲ以テ、致承知候旨記置事、

西八月

四七〇 在邸水戸脱藩士鈴木岸二氏ノ書翰

一書呈上致候、打絶へ御容子モ不伺候処、皆々様御揃御壯健ニ被為渡候哉、陰然奉伺候、毎度御厚情ニ預リ居、出立之節委細御嘶モ不致、昨年已来之始末カラモ御察之通り、御海怨之品モ可有御座候へトモ、此義幾重ニモ御宥免奉願候、随テ拙者共義当分無事ニ罷在候間、御安心可被下候、扱薩州家遊説之義委シク筆紙ニ

難述、大略左ニ申上候、

一我等申立之義ニ付、薩家国許へ急飛ヲ以テ相連ヒ、城(安田カ)己ノ口実ニシテ據者又據シ下ハ勿論琉球等之詰合迄モ手広ク評議相懸候処、議論区々彼是日間取レ、此方ヨリモ度々催促致候処、去六月ニ相成、重役共列席ニテ申聞候ハ、此度国許ヨリ申来候ニハ、各方国元へ御出ニ相成、其筋ノ役々御面会之上ナラテハ、評決ニモ及兼候事故、兎ニ角国許へ御出ニ致度、左候ハ、国許ヨリ蒸氣船呼寄、早速御送可申ト被申候、仍テ此方答ニ曰、我々共御国許へ罷越候ハ、志願之義速ニ御評決ニ相成候哉、役人曰、其儀ハ何共申不参候へトモ、各方御申立ノ義ハ至極御尤ニテ、当家ニテ不成トハ御答モ出来兼候義ニオイテ、不出来トハ不為申、追々申上候通りニテ御案可被下候、右ニ付一同相談之上、此方答

御申聞之趣、無據義ト御察申候、依テハ我等一同之趣意、此御地ニテ御尽力無之処、御国許へ罷越候テモ、早速御取用ニ不相成、永々御厄介而已相成候ハ、天下之誹モ如何、且ハ元主君へ対シ不相濟、旁以テ我々ノ進退此ニ困リ候間、御門外相願度、左候へハ此迄之処逐一元主君へ申立、夫々所刑相受候心得ニ御座候、

何卒我等後世名分之相立候様御取扱願度候、尚又志願之義、弥御明晰ノ上ニハ、御取用被下候様嚴敷申述、別紙書付差出候処、役人共委細承知致候趣承り、公辺へモ伺之上被送返、七月中駒込長局へ御指置ニ相成候、尤我等一同自訴致候心得ニテ、兼テ認メ持參之書付大監へ指シ出候処、早速可達

御聴トノ申聞有之、其後ハ只今以何等之沙汰無之候、長局ハ五局ニ相成居申候、其一番ニハ吉成・林・鳥居・芹澤・横山・小野・根本・服部右八人、小野氏ハ七月十八日、コロリ之病症ニテ相果申候、二番ニハ小河・菅谷・菊池・鯉淵・掛札・岩谷右七人之内菅谷ハ一番へ參候、三番柳・竹内・桑谷・宮本・富田・大越・横山右七人、桑谷ハ去ル九月交死、富田ハ去年九月中ヨリ中風ニテ、去ル七月十九日死去、四番栗田・中野・山田・大森・中村・鈴木・黒澤・粕屋右八人、中野ハ長病ニテ当五月中死去、五番太幸・下野・井坂・中田・和智・市毛・小沼・鯉淵直衛門、太宰ハ嫌疑モ御座候間、竹林虎太郎ト申居候、右八人之内、井坂ハ当六月中病死、右何レモ大病之砌、宿下リノ義精々申立候へトモ、一向相濟不申、実ニ歎ケ敷事ニ御座候、何分御

察可被下候、尤小野氏ハ江戸表ニ間柄有之候付、弥大病ニ及ヒ、宿下リ相濟、御用長屋ニテ間柄へ御渡ニ相成候、扱此節ハ麻疹麻疹大流行、余病モ数多有之由、我等局ニテ鳥居氏流行引受候処、存之外輕ク御座候、其外二番ニ一人、三番ニ一人、四番ニ兼用致候モノ五人程、五番ニ一人、一番ニ三人、先ツ指当リ病人ニハ甚タ差支申候、

一 二 三番ハ江戸御先手方ニテ警衛致居、然ル処追々馴合、近頃ハ用事モ少々ハ相足リ、当局ヨリ二三ハ八音信尋候事モ相成申候、四五ハ御国先手方故何レニモ六ケ敷、是へハ往復モ不相成候得共、永キ内ニハ何トカ致方モ可有之候、

一 我々処置之儀モ、七月中ハ専ラ沙汰モ御座候処、此節交代先鋒登リ候上ハ、此先何ツト申目当モ無之、夫ニ付テハ山吹之花尽花室ト相成、此先如何可致ト実ニ指支、尤是迄ハ少々ツ、持合モ有之、夫彼ニテ取計ヒ居候へトモ、最早頓ト払地、此儀何卒御尽力被下候様相願度、尤当局計ニハ無之、二三へモ配分ニ相成候様致度、何分御計策之程偏ニ奉願候、御運ヒノ義吉成氏へ御託シニ相成候ハ、無相違相届候間、左様御承知可

被下候、尚此地之模様等委細ノ義ハ、吉氏ヨリ御承知
被下候様奉願候、万々申上度義御座候へトモ、先ツハ

大概得貴意候、返ス〜モ山吹之義偏ニ奉願候、頓首、

(文久二年)

八月七日認

(根本新平)

岸 信蔵 実ハ

(田元新助)

雷震 大兄

鈴木 貞介

(敏氏実弟慶応二年八月十五日
京都ニオイテ病死)

(白水藩服部惣所蔵)

此書本藩ニハ伝ハラス、徳川家、本藩ニ伝ハラサル所以ハ、当時

秘密ナリシ故乎、将タ江戸邸藩庁ノ帳簿其他ノ書類ト共ニ、慶応

(安田助左衛門カ記ニ概略ヲ記ス)

丁卯十二月焼亡セシ乎、水戸家ニ於テモ二三ノ同書アルモ誤写

乎、少シク異同アリシヲ、服部氏校考其正シキヲ撰レタリト、則

チ是ナリ、書加ヘタルハ敏氏ノ手ニナレルモノナリ、○服部悌三

郎ハ敏氏ノ弟ナリト、旧藩へ返附云々、久光公山田壮右衛門へ与

ル書ニ、当時藩情ノ概要ヲ記サレタリ、参看、

四七一 竹下清右衛門小松帯刀へ与フ書

一筆啓上仕候、甚寒之御御座候へトモ、弥以御安泰被

成御座恐悦奉存候、次ニ私事無異儀、(日本制始ノ局ナリ)稲佐製鉄所へ滯

宿仕居申候間、乍恐貴意易思召可被下候、扱製鉄所一

覽仕申候処、兼テ御沙汰ノ通段々便利之器械有之、大

ニ感心仕、一言半句モ無御座候、(鹿兒島市)兎角集成館ニモ同様

便利ノ器械無之候テハ、良全之御道具ハ出来不申、只
日数相込無益ノ雑用入重候迄ニテ、実ニ不相濟事ト奉

存候、ストームハーマル始、集成館へ必用ノ器械丈ハ、

是非御注文相成度、為御見合爰許へ御取寄相成候器械、

銘々ノ直段取調方近藤氏へ頼入置申候、(参右衛門行蔵)尤宇宿ハ銅庫

(汽船ノ釜)一件ニテ、此迄蘭人へ心易罷成候ニ付、明

後日ハ八木・宇宿・私三人ダスコイト部屋工罷越、(新平玄悦)緩

々質問、尚亦器械直段ノ儀モ承筈御座候、最初ハ過分

ノ御入価ニ可及相考申候処、追々見馴レ、職人共ニモ

直賦為仕、又役所ノ口振り承リ候へハ、余リ過分ノ事

ニモ被聞不申、何分両三日中ニハ懺成事相分可申、大

概ノ御入価ニ候ハ、是非御注文相成様奉願合御座候

間、左様思召可被下候、

一反射炉ノ儀段々手ヲ付申候処、分兼申候、

公辺ヨリ御頼入ニテ、インゲニユールト申ケル器械、

向ハ勿論製作物ノ儀ハ、都テ心得罷在候役目ノ者、来

二月頃渡着之筈御座候、此者へ質問可然トノ事ニテ、

此節ハ不相分残念奉存候へ共、致方無御座候、(釜蓋炉)高竈ハ

兎哉角相分可申、折角質問仕掛ノ事ニ御座候、此者大

概ヤリ付可申被考申候、イツレ反射炉ヲ開立候ニハ、

第一高竈根本ニ御座候ニ付、大ニ楽罷在候、此ニテ過分鉄出来候ヘハ、爰許ヘ御差出過分ノ利益相違無之、当分舶来ノ鑄鉄地カネ払底、日本産ニテハ用立不申、無抛器械ヘ鑄立有之候、舶来ノ品打崩シ、地カネニ相用甚紛多事ニ御座候、是非高竈ハヤリ付良鉄出来候様、精勤仕度存候間、左様御待可被下候、

一 承知仕候短銃探索仕申候処、数多御望候ヘトモ、貴公様御取寄被成候筒外ニ、別段能キ短筒無御座候、右同品ニテ余程小振鍍金ニテ、立派成ル銃一挺御座候間、取入置申候、又矢張六孔仕掛同断ニテ、筒長サ二尺計、格別矢利キ宜敷キ小銃一挺有之、取入置申候、此者鉄地色付迄ニ御座候、罷帰候砌越可申候、扱段々質間イタシ度義共御座候ヘトモ、当分入津ノ異船少ナク、適々罷居候者ハ蘭人始商人縁^{マ(縁カ)}ニテ、少シ組入候儀ハ存不申候ニ付、先高竈ノ儀並器械銘々直段相分候ハ、一先罷戻、何篇奉得御差図、来春右博識ノ蘭人参候上、又々出崎仕度奉存候、幸廿日過ニハ天祐丸出船ノ都合御座候間、此ヨリ罷帰申度、折角埒明申事ニ御座候、何分不都合不相成様御取計畫被下度、偏ニ奉願候、先ハ寒中御伺、且右形行為可申上如是御座候、恐惶謹言、

西十二月十四日

小松帶刀様

竹下清右衛門^(冠カ)

竹下ハ當時集成館係員ニシテ、専ラ大小砲鑄造ヲ掌レリ、故ニ新式ノ製造伝習ノ為メ長崎ニ出、和蘭人ニ就テ伝習セリ、

四七二 堀仲左衛門意見書

一 當時天下之形勢内外危急之御時節、殊ニ昨春不良之御一条モ有之候付、来戌年

御參勤之儀不容易御場合之事御座候、就テハ非常之節御動揺無之様、御手当ハ在之度儀ト、愚存之形行左ニ相記候、

一 御通中御宿割成丈六七里之間ニテ、

御立御刻限六ツ半時ト被定置、七ツ半時ニハ是非御泊之駅迄 御着相成度儀ニ御座候、

七

一 御供廻リノ事、

御定式外ニ

御小姓与 八拾人

足 輕 三拾人

右中小姓ノ名目ニテ、人柄御吟味之上御供被仰付度、

右人数ニ拾人宛四組ニ分ケ、仮令ハ甲乙丙丁ノ次序ヲ

以御供并不寝番ヲ輪番イタシ、甲乙五拾人

御駕之左右ニ透間ナク必至ト奉警衛、御供相動、丙二

十人、

御立刻限半時前 御先キニ発足、中途非常ヲ戒メ、山

林或ハ道橋ニ氣ヲ配リ、

御本陣之場所ハ、尚以相探之地形案内等微細ニ熟廻イ

タシ置、即晩不寝番相動、丁二拾人ハ 御立刻限一時

後レ発足、

御跡警衛候様、

是ハ御警固ナラン、先ツ非番ニテ休息ノ姿ナリ、

右ノ通ニテ、翌日甲丙へ替リ、乙丁ニ替リ、日々繰廻

候様、右ノ内八人ハ御供目付之場ニテ、屹ト人柄御吟

味ノ上被仰付、一組兩人ツ、什長ノ場ニテ指揮イタシ

候様被仰付度候、

但足輕三拾人ハ拾人ツ、三組ニ分チ、御先二拾人・

御供四拾人・御跡二拾人へ被召附度、尤御先キ不

寝之番ノ義ハ、式拾人二組ニ分チ、夜半代リニイ

タシ、足輕ノ義モ右ニ準シ、夜半代リニテ、夜廻

等嚴重行届候様、

十四

一酒食等猥ニ不相用、万端相慎候様一身以下徒ト仰渡被

置度候、

十二

一急変之節ハ、

御本陣へ両貝相凶次第第二ハ早く駆付、其々之役場ヨリ

可得差凶旨仰渡被置度候、

但右目役之儀ハ、御本陣番足輕之内、人柄慥成者へ

四人計被定置度候、左候テ当番御供目付差凶ニ可

任候、

十

一万一出火騒動之節ハ、惣御供中少モ動揺不致、一同除

火ニ心ヲ不懸、御本陣四方ヲ奉警固、仮令近隣ニ延燒

イタシ候向モ、可成

御動座不被為在、上下整肅イタシ、不為得止事之御時

宜ニ被為臨候節ハ、御側廻リハ勿論御供人数前後ニ

必至ト被召列、御迦相成度、手広之要地へ御布屋ニ

テモ一旦御扣相成、其俟御供之人数ハ奉警衛、大抵沈

火相成候ハ、依時宜御本陣不時御手当相成候様、諸

役場都合無滞致弁別、早々 御立被為 調候様、其職ヲ旨トイタシ候様、兼テ下知号令行届、混雜不致様御治定有之度候事、

十一

一夜廻足輕等急ト心ヲ用、無油断忍廻リ等イタシ候様、若違変之廉見請候節ハ、当番所御供目付へ直ニ注進イタシ、差図ニ可任旨兼テ被 仰付置度候、

四

一御供目付兩人宛、是非御番相番彼は氣ヲ付、指揮イタシ候様有之度候、

五

一御発駕前、他所向取訓候者人計被差出、中途駅々風説（本ノマ、頭カ）ハ勿論、虚实分明ニ聞合、以飛脚 御道中先へ申上候様、尤足輕慥成者兩人モ被召付度候、

六

一御先荷・御跡荷成丈天祐丸ヨリ被差廻度候、御発駕当日出帆、小倉辺へ相廻居、大坂迄船路御差廻之御品積止、小倉 御出立後七日計見合居出帆、江戸之様相廻居候様、尤 御滞府中ハ滞船被仰付候へハ、急變之御用ニ相立可申候、

一御供人数被相重儀ニ付テハ、荷物成丈輕弁（臣）ニ被仰付、

当用之品計陸地相廻、其余ハ天祐丸ヨリ御差廻被下度義ニ御座候、

九

一重人数之義モ多人数之事ニテ、諸弘等自分ニテハ混雜可致候間、御物御取替ニテ、大弘ヒ被成度候様有御座度候、

十三

一御発駕前後ニ守衛人数五六拾人モ被差立度、

但本文人数来春守衛方代合被仰付、

御立前後ニ被差立候テモ可然義ニ御座候、

三

一奥御小姓是迄ハ拾四人ニテ相済来候へトモ、此節柄ノ事ニモ御座候付、外ニ七八人モ被相重、御番方七人ツ、式組、御供方八人壹組都合ニ分チ、御供方八人ノ内ヨリ兩人宛繰廻、御番相動候へハ、九人ツ、ニ相成候間、其内式ツニ分チ、夜半代リニ不寝之番相動候様可被仰付哉、尤御番方非番人数兩人計ツ、ハ御供相動候様、

二

一御小納戸老入ツ、ハ御供相動候様被仰付、如何可有御座哉、

堀ハ此書ヲ久光公ニ呈シタリト云フ、公ハ直ニ藩吏ニ渡サレ、尚詳議スヘキ旨命セラレタリト云、

四七三 森清蔵外一名田中河内介ニ与ル書

猶々本文岡本某(有馬新七変名)云々ノ儀、戊午秋九月初旬関東ヨリ

上京、同月十一日関東ハ差急キ罷下候者ト被仰上被

下候ハ、大概(近衛忠勝)前左府公思召寄可被為在ト奉存候

間、此段モ奉申上候、

一筆奉呈仕候、未緩々不奉得拜顔候ヘトモ、先以弥御

安体可被成御座、珍重之御儀奉恭慶候、然ハ輕忽ノ挙

動思召ノ程モ如何ト奉存候ヘトモ、兼テ御芳名伝承仕

居、且去春弊藩ヨリ是枝龍右衛門上京(貞至)(庚申ノ春井伊直

弼ヲ刺サント上京ヲ云)仕候砌、奉拜顔候儀共親敷承リ、

不堪仰慕之至、依テ心緒発露仕候、抑当時天下之形勢

志士不堪憂憤ハ申上候迄無之、諸藩モ往々望観之為体

実以不堪長大息、勤 王有志之諸侯モ無之候テハ塗墨

不判然ナリ候ヘトモ、何分時勢ヲ見合、断然義旗ノ魁

ヲナシ候人無之候半、只今之勢ニ候ハ、内患外憂追

日差迫リ、遂ニ名分大義地ニ墮可申、小生等モ去ル戊
午年ヨリ頗ル奔走周旋仕候ヘトモ、何事モ不相調、殊
(成就院忍色)二月照和尚ヨリモ、乍恐

御宸慮之程モ奉潜聞居、徒ニ月日ヲ過了仕居候義、不
得止義トハ乍申、

御宸慮之程モ奉恐入悲痛仕実ニ不忍、徒ニ望観弊藩之
義モ、寡君ハ志モ有之候ヘトモ、何分旧来之余習尽ク

不除去、政府偷安之徒等決断無之、加之有志之者ヲ他

邦へ差出候義ヲ忌諱シ(寺田屋事件ハ此結果ナリ)(事实如斯)、頗ル有志ノ者ハ皆

以拱手罷在候外無之、種々尽力仕候ヘトモ、所詮難相

行旁志情御察可被下候、依之近比奉恐入候ヘトモ、有

馬新七ト申者戊午秋九月上京、其節ハ岡本某ト変名、
(正義)

度々関東へ往来、越・長・因・水等ノ有志ニモ深く結

ヒ、諸藩之事情ニ通候者ニテ、右之親ハ四郎兵衛(正直)(郁

姫君方ニ付ケ人御広鋪番頭職)ト申者ニテ、陽明殿御室(忠

君御方御附ニテ、多年上京仕居候テ、陽明殿ニモ御存

知被為在候者ニ御座候、尤新七儀モ変名岡本某ト申処

ハ、前左府公達貴聞居候訳合モ御座候故、右之者ヲ表

向ハ錦屋敷詰ト申処ニテ、前左府公ヨリ御用被仰渡、
(四条錦小路ニ在リ)

被為召呼御召使被下候様有之候ハ、他ニ嫌疑モ無之、

御用立可申敷ト乍恐奉存候間、何卒中山公ヨリ(忠能公) 陽明

家前左府公へ窃ニ被仰上被下、右新七事御用有之候間、
早々罷登候様、陽明家ヨリ弊藩へ被仰下候様、相成

ル御都合共被為出來者ニ候ハ、難有奉存候、

一前文之儀被為出來、弊藩へ御用被仰下候義相調候ハ、

表向寡君へ陽明殿ヨリ被仰下、右之諸大夫敷又ハ尊

公様ヨリニテモ、窃ニ新七方へ箇様之御用被仰渡候趣、

御申越被下度奉願候、無左候テハ政府之輩如何様之謀

計ヲ以テ、新七儀不罷登様可致モ難測奉存候、右御状

被下候ハ、右ニテ彼等欺罔之策不相調所置有之候ニ

付、何分宜敷奉伏願候、小生等越分冒進奉恐入候ヘト

モ、兎角非常之御時節、不得止処ヨリ右之通申居候、

何卒不悪様御汲受可被下、爰許へ罷居候テハ、何事モ

手ノ延候儀ハ無御座、前文新七被為召呼候義御都合出

來候ハ、其上ハ彼諸所へ奔走周旋仕候テ、諸藩モ動

キ付キ可申敷ト奉存候、此旨一同之至願ニ御座候間、

宜敷御周旋被成下度奉願候、恐惶謹言、

西十月九日

森 清 藏

堀之内正右衛門

田中河内介様(家徳)

奉玉机下

此書翰先大父君代書(新七ヲ云)

不肖孫 有馬求内

斯書ハ伏見大黒寺ニ藏ス、其前有馬カ家ニアリシヲ、孫有馬求内

寺納シタリシト云、

四七四 忠義公中山實善ヲ上京セシメ、御劔ヲ献

シ及ヒ建言ノ詞

年ころ夷船ともこゝかしこにまいきて、なにとなく天
の下穩ならず、

みかともかれこれことはかり給ひて、

おほみこゝろなやまし給ふ事のいとかしこけれハ、ま

つうかゝおもふことのかきりふりはへまおしたてま

つらんとて、文久元年十一月九日の日、中山實善(俗稱 尚之介)

に申へきさまをつふさにいひふくめて、都にそのほせ

ける、されは左のおほひまうちきみ忠照公の御許にと

て、父君(久光公)よりの御文まいらせらる、同じ月の廿六日と

いふに、

近衛殿にまいりたりけれハ、大納言殿(忠興公男)にも出給

ひて御対面たまはる、父君よりの御ふみまるらせ、

勅命
おほせこと承おきし、

みハかしもこたひ奉るへく、またいひやりしことの、

おち条々つはらかにまおしければ、みなきこしめし、

入都（礼カ）さんとゆゑありて、こもり給ふ程なれハ、奏し

玉ふ（御謹慎中ナレハナリ）ことかなはずとて、議奏正親町三條實美卿（愛カ）におほ

せて、

御佩たてまつらせまおしあけつる事をも奏させ玉ひけ

れハ、

叡感ましく即てやかて 父君をマ、まほしくカめしふして

おほしめせと、幕府のおきていとおこそかなるおりな

れハ、とみに召のほせ玉ふことも、

大御心になはせ給ふに、

叡感のあまり 父君と御名、茂久公とにひそかにおほみうたを

下し賜らんとて、十二月の十あまり一日の夜實善を召

て、大益とと大納言殿ならひ居玉ひてくたし賜けれハ、

あくる十二日都を立て、をなし月の廿四日といふ日に

くたり着すれと、かたしけなくかしこければ、やかて

おかみおさめまつりぬ、されハ世にありかたきことの

かきりなれハ、永く子孫うみのこに伝へんとてひめ置にこ

そ、あなかしこ、

修理大夫從四位下行左近衛少將源朝臣（茂久）

（島津久光公実紀にて補註）

四七五 中山實善上京日記抄

十一月廿四日 晴初雪

晚伏見へ上陸、直様御屋敷へ差越、有川藤、左衛門御長

屋へ參、京地模様共粗承り、茶・多葉粉共吞暫ク相咄、

人足手当トモ被致呉、跡ヨリ人相付可遣呉トノ事ニテ、

直ニ打立、京へ差急キ差越候、尤有川氏下人案内ニカ

シ被呉候訳大ニ仕合也、鴨川へ出候処ニテ夜明、京御

屋敷へハ六ツ半比着也、直ニ松崎彦兵衛殿居宅へ參り、

形行申述尚模様共細々承届旁仕合也、朝飯トモ被差出

候、御長屋モ八番へ肝煎被呉候、直ニ横田鹿一郎殿ト

申御留守居付役ヲ、今大路刑部権少輔殿所へ參モラヒ、

陽明御殿御目見ノ御都合共被致呉候処、左府公櫻木

ニハ御普請ニテ、御下御屋敷へ御引移中、殊ニ今日ハ

脇方へ被為成候付、イツレ明朝達 貴庁其上此方ヨリ

返答可申越ト、今大路返答ニテ候由、七後横田參り返

答也、

一夜ニ入横田鹿一郎殿入来、酒肴トモ差出候、

一酒貳升・肴籠一

右松崎氏ヨリ被贈候、

一朝夕賄ハ御屋敷近所仕出屋へ申付、朝昼夕差出候、

同廿六日 晴夕刻雨模様

一未明起上リ仕舞方イタシ候、四時分ヨリ相仕舞、九前ニ

横田鹿一郎殿同伴、拙者ニハ駕籠（乗込）二人合羽籠ハ無之候、

錦御屋敷ヲ出、近衛御殿へ参、殿、御取次ヨリ案内

ニテ、溜之間ト申所へ案内、茶・多葉粉盆出ル、暫アリ

テ諸大夫御逢可申上候間、此方へト案内有之候ニ付、

参候処、弁之間ト申所へ案内相扣候処、今大路刑部權

少輔殿被出挨拶也、此方ヨリモ挨拶申述、御書持参仕

候ニ付、アナタヨリ御上可被下段申入候処、承知ニテ

直ニ被差上候、

一八過ヨリ奥へ罷通候様御用人案内（林日向介）ニテ、跡ヨリ

参候処、大納言様御居間へ被、召出（八輩敷）、是非共御膝

元迄参候様度々被仰下事ニテ、スート進出候処、御国

許御左右被聞召上、且以、御目錄御手自御渡被下候付

頂キ、御次へ相下拜見、再ヒ召出、又々最前之通、御

前へ被召出、御手自頂戴物、被仰付候、夫ヨリ亦奥ノ

御方へ罷通候様案内ニテ罷出候処、左府様へ、御目

見被、仰付、直ニ是へト御沙汰御座候へトモ、先、御

口上ノ趣申上畢テ、自分ノ御礼モ申上候処、是非々々

ト被仰付、直ニ、御膝元迄参上、段々御意頂キ、同拜

領物、御手自被、仰付退出、於、扣席御料理御酒御取

肴等頂戴仕、

一左府公、御前ヨリ相下候ト、直様又々、大納言様御前

へ再被、召出、初テノ事ニテ遠慮致ト相見得候、是非

膝元へ寄レトノ御意ニテ、御茶（遠慮）へ被、仰出、

頂キ候御菓子モ頂戴、丁度夜入時分御暇仕、扣席へ退

座仕候、

一右府公御前ハ七時分ヨリ斜陽時分迄、段々、御咄モ頂

キ候、左候テ、御座相下、御次迄参候処、御直ニ御

呼被返候ニ付、直様罷出候処、御手自御包物拜領仕

候、左候テ、御前相下候処、又々、御呼被返候付、罷出

候処、臣ヨリ進上仕候御着代之御礼ト被仰候テ、最前

ハ見事ノ着忝ナイト、御意頂戴、実ニ恐入驚入事也、

一綴子 壱本宛

一氷砂糖 壱捲宛

一御肴料 千疋宛

右太守様ヨリ被進候、

一御着代 五百疋宛

進上 臣ヨリ

右取仕立方都テ御留守居方へ相頼候、

一御扣席御用人林日向介殿ヨリ、

一白銀 式両宛

一真綿 壹台宛

右

左府様 大納言様ヨリ、

右之通拝領被 仰付候俣演舌也、 御品明日可差廻卜

ノ事也、

一最前 大納言様於 御前拝領、

太守様へノ御目錄ハ、

一御烏帽子 一(4)

一御狩衣 一領

一御掛物 一幅

右之通也、

一御肴代 五百足

是ハ別ニ御渡也、

一御両所様トモ親次左衛門ニハ、如何ト 御意頂キ候、

当分江戸ノ段申上候事、

同廿七日 晴

一早朝起上、

一今日ハ諸司代へ不參候テ不叶事有之、九時分ヨリ錦ヲ(備忘通)

出、カゴニテ昨日通差越候、

一袖島 式端

一御肴代 千足

右諸司代へ 太守様ヨリ、

一絞西洋布 式端

一金子 三百足

右御用人取次和田大助へ拙者ヨリ相贈ル、

八時分過錦へ帰ル、

一昨日於 陽明御殿、頂キ候 太守様へノ御目錄御品相

廻候、

蔭山伊勢助

林日向介

今大路圖書介

右御用人三人ヨリ拙者名宛ニテ參候、

一今晚ハ御国元極々急キ飛脚差立候、

右足輕一人ハ、今度召連候高崎十太郎ト申者、大坂へ

岸良氏へ相付有之ニ付、是ヲ遣ス、一人ハ当御屋敷詰(參一節)

交代前大山平藏ト申者へ申付、四ツ前ニ当地出発罷出

候、

(舟巻)

一 真之丞殿ニモ早々京地へ被罷登候様、今曉申遣候、此方都合最早支障モ無之候故申遣候也、

一 今曉ハ伊勢勘兵衛殿入来、飛脚御用封等被致呉候、酒

共差出候、

一 今朝ハ松崎氏ヨリ志ニテ豚汁壺鍋被遣呉候、

同廿八日 晴

一 六ツ過起上り候、

一 朝伊勢氏・横田氏入来、近衛御殿ヨリ退参候節、御

取看等入帰候器ヲ、今日御留守居方ヨリ返シモラヒ候、

一 昼御留守居方へ参候御劍拜見仕候、御柄糸等相フルヒ

候付、御柄卷替等今日田畑へ申付候、

一 御殿御座拜見仕候、

表御座拾畳、御次拾畳、裏御座有、

一 近衛御殿ヨリ先日頂戴仕候御品、

一 白銀 式兩宛

一 真綿 三把宛

右御使ヲ以、御用人蔭山伊勢介殿・林日向介殿・今大

路圖書殿三人ヨリ奉札ニテ才領付、所謂中小姓体之人

也、持参也、イセ氏ニ相頼返一言認貫候、御使へ白銀

一 兩、人足へ兩人相中へ白銀一兩差遣候、

一 右御使へ段々咄共イタシ承候処、已ニ昨日モ 大納言

様御参内有之候由承り候(内密建言、此時 観覽ニ供セラ

レシナラン)

一 暮過、横田鹿一郎殿入来、只今諸司代御用人和田翁介

ヨリ明後朔日拙者宅へ参度、尤主人ヨリ内命有之ヨシ

被申聞、差支無之段申入置候、

十二月八日 雪余程積り候

一 早朝起上相仕舞、中村氏へ駕ゴニテ差越候、九ツ時分

帰ル、

一 御劍、此節御柄初メ取直シ方取掛居候処、今日自 陽

明御殿持参候様、昨日今大路ヨリ申参候トテ、伊勢氏

持参被罷出候処、先ツ其俣ニテ 大納言御受取置被遊、

明日御献劍被遊候トノ御事ノ由、伊勢氏被罷帰御左右

奉伺候(齊彬公史参看)

一 右受 御台等ハ、カノ御方ニテ御取仕立可被遊トノ御

事ノ由、今大路ヨリ申聞候由也、

同九日 雪後晴雨

一 四ツ後松崎氏へ参ル、今日伊勢氏ヲ陽明御殿へ遣ス、

一 七半過、

来ル十一日

御返答被

仰出候付、午刻後参

殿可被致候、以上、

十二月九日

中山尚之介(美善)

来ル十一日

御返答被

仰出候間、参

殿可仕旨被

仰下様奉承知候、此旨御請如此御座候、以上、

月 日

中山尚之介

今大路民部権少輔様

右横田氏へ相頼認被呉候、

同十一日 晴

一四ツ後ヨリ伊勢氏同伴、近衛御殿へ参 殿、御吸物

御酒・御菓子等頂キ候、夜ニ入時分ヨリ 御目見、

両御所様御一緒ニ被仰付候、

(久光公)和泉様御両所様ヨリ被品被進候、

一御書御返書

(忠親)右前左府様ヨリ

太守様へ

一御書一通平

大臣大納言様ノ御書 和泉様へ(此御書見ルコトヲ得

ス、惜ムヘシ)

一御庭拜見被仰付候、

一御縁女様御事ハ、御年ハ御十七之筋ニ御仰出ニ相成候(美八十九)

様、左府様ヨリ遠藤御取次ニテ奉承知候事、

一四ツ前帰宅、夫ヨリ仕廻方取掛候、

同十四日 西風

一昼後迄矢張日様モ順風、迎モ明日迄モ埒明候模様無之

候ニ付、風ト打立乗舟、厄ヶ崎迄夜五ツ時分着、河内(兵庫島)

屋ト申所へ立寄、人足手当共イタシ、無程打立、西ノ(同上)

宮兵庫大蔵谷ニテ夜明候、

但西之宮ヨリ早馬、兵庫ヨリイソジカゴヘモ同様、(同上)

右室粉稱中山業善日記 国立国会図書館蔵にて補註

四七六 当時ノ形勢(編年雑録鈔)

前文略ス、和宮降嫁ノ事ニシテ、若シ成ラハ外事ノ措置唯我方寸ノ中ニ在リ、何ソ患ルニ足ラン、今謹テ承諾シ、其期ニ至リ之ヲ延ルハ易々タルノミト、遂ニ老

中連署シテ誓書ヲ上ル、十月二十日和宮京師ヲ発シ、
一説ニ木曾路、御旅行ト云フ十一月十五日江戸ニ至リ、清水邸ニ入御、
 年賀使廣橋光成・坊城俊克二卿其他公卿扈從ス、嚮ニ
 老中等ノ誓書ヲ上ルヤ、未タ降ノ期ヲ定メス、酒井忠
信義 叔旨ヲ矯メテ和宮ヲ欺キ、主上トノ間ヲ離隔シ、
 駒從ヲ具シテ遽其期ヲ定メ(三浦書翰參看)、以テ主上
 ヲ要ス、是ニ於テ、別ニ臨テ 主上ニ謁スルヲ得ス、
 是其名降嫁ニシテ実ハ強奪ナリ、主上之ヲ如何トモス
 ル能ハス、是ヨリ天下有志ノ徒慨然益勤王ノ志ヲ堅フ
 ス、嚮キニ直弼(并伊)ノ斃ル、ヤ、幕議漸ク革ル所アラント
 ス、而モ信正相繼テ其路ニ当リ、么麼羸弱ノ幕主ヲ擁
(安藤)シテ威福ヲ縱ニシ、暴逆苛辣夷ニ直弼ノ罪惡ニ浮リ、
(マ)是ニ於テ外夷益猖獗王室愈孤立ス、諸士勤王ヲ唱フル
 者海内ニ瀰満ス、然レトモ六十余州ノ侯伯、首トシテ
 之カ処置ヲナス者ナシ、独島津和泉公修理大夫忠義公ノ
実父三郎久光公之
 ヲ患ヒ、士氣ヲ振作シテ、以テ名分ノ在ル所ヲ明ニセ
 ント欲ス、是月近衛忠熙ニ頼テ密書ヲ 朝廷ニ上リ、
 藩兵ヲ出シテ 輦下ヲ守護シ、勅旨ヲ貫徹セント請フ
(齊彬公密勅ヲ奉セラレタル以来、有志者ノ主論トナレリ、大
久保日記參看)、櫻田ノ變未タ起ラサルニ当リ、薩ノ有

志輩屢々事ヲ挙ケントス、時ニ西郷、僧月照ノ事ニ座
(隆盛)シテ幕府ノ嫌疑ヲ受ケ、六年ノ流罪ニ処セラレテ、薩
(地名)ノ平ニハ米良助右衛門・税所喜三左衛門・道島五郎兵
(舊地名)衛・篠原冬一郎、關牟田ニハ田中謙助・山口仲吾・重
(正義)久直齊、上加治屋町ニハ有馬新七・岩元勇助・樺山三
(鹿兒島市)圓、下加治屋町ニハ大久保一蔵・福島矢三太・村田新
(利通)八、西郷信吾・大山吉太・大山彌助・鈴木勇右衛門・
(鹿兒島市)鈴木源五左衛門・同昌之助、高見馬場ニハ黒田嘉右衛
(兼徳)門・橋口傳蔵・柴山愛次郎・柴山良助・橋口壯助、二
(道隆)本松馬場ニハ大山格之助・岩元六右衛門、樋之口ニハ
(久吉)黒田了介・永吉小藤次、中福良ニハ赤山靱負・島津左
(新蔵旧名)衛門弟桂小吉郎・森山棠園・同新五左衛門、馬乘馬場
(鹿兒島市)ニハ椎原與三次・椎原権兵衛、高麗町ニハ吉井幸輔・
(舊)奈良原喜左衛門・同幸五郎・海江田武次・有村甲蔵、
(榮吉)江夏仲左衛門・神宮司助左衛門・野津七左衛門・野津
(稱之(職名)七次・高島清右衛門・高島鞆之助・山口金之進、上荒
(昭光)田ニハ仁禮平助・中原尚助・赤塚源六・高木三次・永
(景紀(地)旧名)山彌一郎・永山休清・原田仁右衛門、上之園ニハ三島
(萬吉)彌兵衛・弟子丸龍助・伊集院直右衛門・柴山龍五郎等
(通稱旧名)数百人、皆慷慨悲壯ノ士、居常幕府横逆ヲ憤リ、事宜

二因リ直ニ突出セントシ、或ハ密ニ之レガ用意ヲ為ス
時ニ弟子丸ニ島、伊集院、柴山等ハ刀柄ニ牛革ヲ衣セ、十七八節ノ長柄ト成シ、類ニ突出ラ候テ居レリト云フ、森山堂園家素ヨ
 リ豪富為ニ船舶ヲ修メ、日州此事ヤ三島・伊集院細島ニ備ヘ、記ニモ定テ寛ヘアルヘシモ、備ニ臨ニ事ニ臨テ將ニ発セントス
記ニモ定テ寛ヘアルヘシ、備ニ臨ニ事ニ臨テ將ニ発セントス、備ニ臨ニ事ニ臨テ將ニ発セントス、備ニ臨ニ事ニ臨テ將ニ発セントス
雜録ニ在リ、左ニテ（以上記ス処ノ事實及ヒヒ人名等誤多シ、註シテ弁覽ニ供ス）

一薩州藩士大久保一藏・中山忠左衛門、京都陽明家近衛密奏ノ書、
（利通）（仲ノ親）（家書）

一今度中山殿ヲ以御内情奉伺候処、献芹ノ微旨上達、不容易御賜物且前左府様ヨリ御内達ノ旨、大納言様御内書御拝領物被仰付、実ニ武門ノ冥加不過之奉恐入候、依之某内々使者差立候間、篤ト左ノ趣相合厚御礼取束可言上、左候テ御縁談ノ一条御請御礼可奉申上候、
（高橋院殿）

一天朝ノ御危殆実ニ燒眉ノ急ニシテ、被為惱 叙慮候御儀、此節中山詳細ノ御左右ニテ、悲涙泣涕ニ不堪次第二候、

和宮様御下向ニ付、被為仰合候御内策モ被為在候御事ニ御座候得共、是ハ決シテ頼ニ不相成事ニ有之、マシテヤ能々幕府ノ事情熟察イタシ候ニ、如何様小人俗吏タリ共、当今ニ至天下ノ人心名分ヲ明カニシ、

天朝ヲ重シ幕府ニ背キ、判然タル形勢ハ既ニ一昨年上已一挙已來、異人殺害、水府ノ混雜、其外浪人奔走等ノ次第ニテ、詰ル処無事ニ不相濟、一身ノ疾痛ニ成ルトイフ事十分觀察致シ、表ハ無美ノ勢ヲ張り、内ニ深淵薄氷ノ恐ヲ懷キ候儀按中ニ可有之、然ハ苟且偷安ノ情ヲ以天下國家ノ傾覆ハ少シモ憂トセス、栄利ヲ不失覚悟ノミニテ、明白ノ事ハ如何ニモアレ、今日々々ノ全キ計宮イタシ候儀ニ有之、右具眼ノ者ヨリ論候ヘハ、

彼長久ヲ計候事ハ、國ト身ヲ亡スモノ、危謀ニテ、少シク天下國家ノ上ニ心ヲ用ヒ、衆慮ノ向フ所ヲ取り、新鋪ヲ用候ヘハ、徳川家ノ興復隨テ一身ノ榮耀無疑候ヘトモ、和漢古今衰世ニ當ツテ、國ヲ乱ス賊臣ノ蹤跡ハ、一轍ナル訳ニ候、依之彼ヲ考フルニ、和宮様ヲ無理ニ申降シ奉候ハ、一朝一夕ノ奸巧ニ無之、御下向被為成候上ハ、掌中ノ者ニテ中々 勅意ヲ恐レ、処置ヲ改候ハ思不寄事ニテ、此上如何様ノ邪謀奉施候モ難計至憂此事ニ候、論シ奉申上モ恐多候ヘトモ、不謂ノ秘策モ有之、段々承及決テ実説ニ可有之哉、タトヒ其説ナクトモ、察セスハ不可有之時節ト奉存候、万一彼ニ先セラレ制ヲ受候テハ、主客ノ勢ト相成、嚙臍ノ患不久儀

天朝ヲ重シ幕府ニ背キ、判然タル形勢ハ既ニ一昨年上已一挙已來、異人殺害、水府ノ混雜、其外浪人奔走等ノ次第ニテ、詰ル処無事ニ不相濟、一身ノ疾痛ニ成ルトイフ事十分觀察致シ、表ハ無美ノ勢ヲ張り、内ニ深淵薄氷ノ恐ヲ懷キ候儀按中ニ可有之、然ハ苟且偷安ノ情ヲ以天下國家ノ傾覆ハ少シモ憂トセス、栄利ヲ不失覚悟ノミニテ、明白ノ事ハ如何ニモアレ、今日々々ノ全キ計宮イタシ候儀ニ有之、右具眼ノ者ヨリ論候ヘハ、彼長久ヲ計候事ハ、國ト身ヲ亡スモノ、危謀ニテ、少シク天下國家ノ上ニ心ヲ用ヒ、衆慮ノ向フ所ヲ取り、新鋪ヲ用候ヘハ、徳川家ノ興復隨テ一身ノ榮耀無疑候ヘトモ、和漢古今衰世ニ當ツテ、國ヲ乱ス賊臣ノ蹤跡ハ、一轍ナル訳ニ候、依之彼ヲ考フルニ、和宮様ヲ無理ニ申降シ奉候ハ、一朝一夕ノ奸巧ニ無之、御下向被為成候上ハ、掌中ノ者ニテ中々 勅意ヲ恐レ、処置ヲ改候ハ思不寄事ニテ、此上如何様ノ邪謀奉施候モ難計至憂此事ニ候、論シ奉申上モ恐多候ヘトモ、不謂ノ秘策モ有之、段々承及決テ実説ニ可有之哉、タトヒ其説ナクトモ、察セスハ不可有之時節ト奉存候、万一彼ニ先セラレ制ヲ受候テハ、主客ノ勢ト相成、嚙臍ノ患不久儀

ト奉恐惶候、

一御ニ挙相成候儀、得ト熟思致シ申サハ、毛ヲ動スト申
訳ニシテ、国家ノ重事ハ勿論、天朝ノ御安危ニ関係イ
タシ候御儀、誠ニ不輕次第奉恐入候ヘトモ、前条ノ通
危急ノ御時節ニ付テハ、不被為得止御時宜ニ候間、不
肖ノ我等タリトモ、苟モ王臣トシテ難奉忍候ニ寄り

皇国復古ノ大業被為在度奉誠願候ニ付テハ、京地十分
ノ御守護不相備候ハテハ、仮令非常ノ 聖断被為在候
テモ、戊午ノ覆轍ヲ蹈候様ニテハ、却テ奉増御難題甚
奉恐入候ニ付、発拳ノ上ハ必勝ノ利ヲ謀リ、興復無疑
ノ算ヲ尽シ、其上ノ所ハ臨機応変ノ処置ニ出候様有之
度奉存候、我等不智短才ニシテ、深謀遠慮モ無之、如
茲大事始終ノ得失ヲ謀ルニ、其術ニ乏シク候ヘトモ、
内策ノ次第左ノ通ニ候、

一供人数五百人余ヲ召連、不日ニ上京可仕候事、

但陸行ニテハ急速ノ間ニ合兼候間、(川内也)久見崎又ハ阿久

根ヨリ天祐丸ニ乗船可致、左候ヘハ京地ニ到着イ

タシ候人数ノ儀ハ、一組六十人ニシテ四組二百四

十人、外ニ廿長二十四人、組頭兩人、側役兩人、

上下二十人、平均シテ八十人、次定ニ方、側向三十

人、同表方十八人、足輕四十人マテ大凡見賦リ、

帶刀已上五百五十人余ニ相及候、

一当地出足兩日ヲ置、守衛人数五組三百人出立申付、(町田久成、岩下方平率ル所)

又兩日ヲ置、四組二百四十人同断、小倉・下關迄迄
出張為致置候事、

但天祐丸大坂着ノ上ハ、則小倉・下ノ關迄差出、本

文出張ノ人数操廻シ令上坂、且兼テ用意致シ置候
下關粮米(白石正一郎日記参看)、右人数所々ニ積

廻シ可申、尤兩度ノ運送五日ヲ不出シテ、其上ハ

大坂碇泊非常ニ備置候事、

一人數大凡上京ノ上、組頭一人ハ三組百八十人ヲ召付、

江戸表芝邸為警衛差出候事、

一上京ノ上、陽明家ハ參殿得ト建議ノ上、御内意奉伺、

其上乍恐滞京守護可仕旨ノ 勅諭ヲ被下、偕右ノ通御

守護十分相備候上、非常ノ以

聖断表向関東ヘ 勅使被差立候趣ハ、一橋侯御大老ニ

出世相成候様、然テ尾藩・長藩・仙藩・因藩・土藩ヘ

別段

勅命被下度趣ハ、徳川家ヘ 詔ヲ被下候間、各談合ニ

及、皇国ノ御為ニ赤心ヲ尽シテ抽忠勤、万一違

勅ノ廉相頭候ハ、(為馬守) 国家ノ奸賊安藤速ニ可加誅伐旨被

成下度、左候へハ有志ノ諸藩致合従、勅

王ノ義拳無相違、其節ニ臨候へハ、勢ヒ難及故、幕役

共戦慄シテ

勅意ヲ奉シ奉ラスンハ無致方、万一不軌ヲ謀リ候ハ、

長藩其外水府諸浪人四方ニ蜂起シテ、(拳刃) 義応可致事按中

ノ勢ニ御座候、何レノ筋閑東ニ於テノ成敗相決シ可申

候、

一勅ヲ被下、(尚志) 即日九條殿御退職、(忠愍) 左府公閑白御帰職、

(尊徳法親王久邇宮朝彦親王御旧唱) 青蓮院宮様ノ御幽閉ヲ御解、万機ノ事無大小御談判被

為在候様被仰出度事ト奉存候(御補佐)

一右人数引連上京御守護仕候上ハ、要枢ノ場所・地面御

預リ被仰付度奉願候(御築地内六門ヲ云)

一当時種々ノ議論有之、此期ニ臨候上ハ、徳川家ヲ捨大

義ヲ唱へ、正々タル天下ノ義旗ヲ揚ケ、干戈ヲ用ルノ

論有之哉ニ候へトモ、夫ニテハ首尾ノ結リ甚難問ニ可

有之、畢竟罪ハ幕役ニ有之候故、真実 皇國復古ノ赤

心ヲ以テ、尽忠ノ者ニ候へハ、是非干戈ヲ不用、国体

ヲ不傷成就出来候様策ヲ立度、(弁形公) 勿論先々ヨリ徳川御扶

助、公義御合体之 叡意ニテ、先君ノ遺志モ其通ニ候

間、飽迄右ノ御趣意奉貫度ト奉存候(戊午ノ夏水戸へ下

賜ノ勅書)、乍然止事ヲ不被得儀到来ニ於テハ、不及是

非義ニ可有之奉存候(討幕詔勅申シ下シ云々)、

右之通概略之定策ニ候間、猶得ト形行建議ニ及候ハ、

御趣意モ可被為在候間、巨細奉伺候上万遍治定早々駈

下候ハ、夫ヲ期ニシ日限等可相決候、仰テ天時ヲ覽

ミ伏シテ人事ヲ索候ニ、不可疑ノ時機此一挙ニ可有之

候事、

吳々如何様トモ致度ハ十分ニ候へトモ、本文ノ次第

御察被下度候也(久光公御建言ハ中山殿ヨリ主上ニ奉呈

セラレタリト云)

一陽明家ヨリ右御返答

極密御申越ノ条々、実以肝要当然ノ儀、無左テハ後ニ

如何可相成モ難計、第一 皇國ノ安危ニ拘リ候義、実

以悲歎不過之、尤

(至尊) 上々モ其辺深御痛心被遊候事故、申出度ハ十分ニ候へ

トモ、九條閑白(尚志) 其余ニモ奸賊多端ノ事故、迎モ上ヨリ

被仰出候義ハ御六ヶ敷、中山大納言(金能)・正親町三條兩人

ニテ、

叡慮ヲ伺取計候義ハ所詮相成間敷、依テ正親町三條ニ

モ深心痛被致候様子、関白ニハ関東一体ノ了簡、且又夫々随從ノ人多端ニ候得ハ、迪モ迫リ候次第、仍テ何卒薩州・長藩・仙藩其志ノ向、諸藩幕府へ上書ニテ具ニ御申望、且又閣老ニモ、右ノ次第被束

叡慮ヲ被伺候事ニハ相成間敷哉、右ノ辺ニ相成候上ハ、兎モ角モ

勅諭被出候義ト察上候、何分公武奸賊ヲ退ケネハ

叡慮不被為安、何トモ恐入候事不悪御察覽頼入候也、

右薩藩ノ書ハ、最初十一月中旬頃、大久保一藏^{利通}・中山

中左衛門陽明家へ参殿、存念密奏ニ及候之処、御同家

ヨリ議奏衆ノ内正親町三條殿被召、御同卿ヨリ中山殿

ニモ被召度旨被申上候テ、御対談ノ上官武直掛合ハ不

相成候ニ付、岩倉少将^{眞徳}殿ヲ以テ所司代へ御問合ノ処、

差掛無拋事柄ハ御勝手ノ旨返答ニ付、夫ヨリ都テ御直

談ノ儀相始候事、以下略ス

四七七 道島正亮建言

此節国家危急ニ相迫リ、御鬱憂被為遊候間、銘々書付ヲ以テ御開慮可被遊旨趣、存慮之程可申上旨、御書取ヲ以テ被仰下候儀、寔ニ以テ恐入難有次第奉

存候、我等モ魯鈍短才何ノ思慮工風モ無御座候、却テ

御鬱苦ヲ増長ナサシムル其オソレ不少トイヘトモ、存

慮之趣不申上候ハ、臣子ノ道ニ背キ、又申上候ハ、却

テ庸才ヲ顯シ、魯鈍ノ生質明白ニ愧入惆悵仕候トイヘ

トモ、止事ヲ不得、不顧死罪存慮之趣左ニ奉申上候、

願クハ御英断被遊候ハ、天下ノ危急ニ御座候ハ申

迄モ無御座候、夷蛮ノ賊ニテ御座候半、去ル丑年ノ度

英断有之候ハ、是程ノ恥辱ハ有御座マシク処ニ、将

軍家柔弱ニシテ征夷ノ任ヲ失ヒ、剩諸侯牧伯モ天下昇

平ノ地ニ浴シ、大義ヲ失スルトイフ事ハ何事ソヤ、

朝廷ハ夷賊輕蔑大ナル日本ノ恥辱ナル事ヲ、疾ク御英

断アリテ、

勅命モ下リ御製モ度々御座候、

綸言汗ノ如シト申ニ、將軍ヲ初メ諸侯牧伯^{勅也}連動ノ罪実

ニ死ニ当リ可申候、諸侯方タママ数代大国ヲ領シ、妻

子ヲ養育スルハ、日本ヲ擁護スル藩屏ノ任ニ可有御座

候、外夷ノ憂無之天下大ニ乱レ、王制モ不行時ハ、諸侯

国々ニ割拠スルノ処置モ可有御座候ヘトモ、此節夷蛮

掠侵スルカ如キ、是程輕蔑セラル、トイフ事ハ、和漢共

ニ無之、唐宋末世ノ衰ヘタル書ヲ見テサへ、日本ヨリ

齒切スルニ、今現在是程ノ輕侮ヲ受ケナカラ、恥ヲ忍テ憤激スルコト不能、タマタマ世界随一ト呼レシ神武ノ国ニ生レ、人臣ノ任ヲ尽シ、国恩ヲ報シ奉ルヘキニ、將軍ハ征夷ノ大任ヲ失ヒ、諸侯牧伯ハ大義ヲ不知、雞犬サヘ我境界ヲ侵サル、時ハ大ニ憤戦ス、シカルヲ況ヤ吾人トシテ身ヲ致シテ命ヲ奉スル事不能ハ、実ニ雞犬ニモ劣リ、辱カシキ事ニアラスヤ、早々天下ノ人鼓ヲ鳴ラシ、征夷ノ任ヲ西ノ丸ニ押卸シ、外ニ其任ニ当ル人ヲ撰挙シ、天下ニ大義ヲ建、夷蛮ヲ征スルヲ任トスル時ハ、天下一洗シ日本ノ武威再ヒ起ルヘシ、ケ様ノ大義ヲ起ス人無之候トモ、願ハ君御一人ナリトモ、天下國家ノ為メニ夷蛮ヲ征スル大義ヲ御建、禁廷ニ奏議シ、死ヲ以テ御決意被遊候ヘカシ、左候ヘバ天下ノ人皆義旗ヲ荷フテ御陣ニ參スヘシ、是則數代大國ヲ領シ、臣子ヲ撫育シ玉フ御大任ナリ、然ル時ハ三ヶ國ノ士民皆大ニ義ニ勇ミ、一以テ百ニ当ルヘク、又大義ヲ建ルニ道アルヘシ、深ク御翫味遊ルヘシ、又國家危急ト申セハ未タ其大危有御座マシク候ヘトモ、當時ノ世態ヲ以テ密ニ勘考仕候時ハ、井伊カ殺害ニ遭ヒシ輩カ徒然ヲ報スル憂ヲ思召テ、御參勤アラント

スル時ハ仇ヲナスノ憂アリ、又參勤ナクンハ國難至ラントノ懼レアリ、進退既ニ危急ニ相迫リ候トノ思召モアランカ、是小義ニ移リ大義ノ御処置ニ無御座候、実ニ災ハ狐疑ヨリ生ルトハ此事ニ御座候、兵家第一ノ忌ム所ナリ、深ク其大本ヲ御勘考御座候ヘハ、井伊ハ天下ニ容レラレサル大賊ナリ、天下國家ノ為ニ天ヨリ死ニ処セラル、所ニシテ、天ヨリ殺害ナサレタルモノナリ、其訳ハ井伊ハ基天下ニ押出シテ、徳川家大老職ノ一ニシテ羽翼ノ臣ナリ、其羽翼ノ大任ヲ失ヒ、徳川征夷ノ任ヲ失シムルノミナラス、大ナル日本ノ恥ヲ起シ、オノレ又夷蛮ニ恐怖シ、彼ニオモネリ親ム大悪人ニシテ、実ニ國家ノ大賊ナリ、彼輩カ殺サ、ル時ハ、決テ井伊カ藩中ノ者必ス社稷ヲ重ンシ、奸悪ノ主ヲ廢シ、人臣ノ職ヲ守ルモノ可有御座候、是程ノ大悪人ヲ殺レタルトモ不顧、猶然ラスシテ仇ヲ報スル抔ト党ヲ樹ルトモ、天何ソ是ヲ容レン、所シテ然ヲ報スル誠忠ノ輩ナラハ、主人井伊カ奸悪ヲ顧ミ、決テ夷蛮ヲ討テ主人カ悪名ヲ雪クヘシ、其志ナク猶其惡ヲ助クトノ御疑念モ可有御座候ヘトモ、天何ソ是レヲ容レン、恐ル、ニ不足ナリ、然レトモ又不虞ノ備ナクンハ大事ヲ誤ルヘ

シ、此等ノ事ハ間ヲ以テ流言シ、名ヲ正サムシルカ、又ハ実意ヲ打明シ、説客ヲ以テ大義ヲ述テ、渠カ藩中ト共ニ夷蛮ヲ征スルカ、其外孫子ノ所謂静以出ノ計略幾等モアラン、兵ハ密ナルヲ以テ尊シト申ス事御翫味遊サルヘシ、願クハ君公仁徳ヲ行ヒ、天下ノ人ヲシテ実ニ服従スルノ御仁徳ヲ修メ玉ハ、天下ノ人ヲノツカラ簞食壺膳シテ、以テ君ヲ送迎シ奉ラン、此機會ヲ御失ヒ、天下ニ縱横スルノ志ヲ失ヒ玉ハ、決テ不^(禮)思儀ノ災難到来仕ルヘシ、先君貫明公・松齡公ノ如キ御德行ヲ視玉ヘ、和田・奈良原・田那邊・小笠原輩死ヲ以テ奉仕スル、是則眼前御德行ノ天下ニ溢レタルニアラスヤ、終日乾々トシテ仁徳ヲ御執行被遊候ハ、オノツカラ古代ノ風俗ニ一洗シ、国家危急ノ憂ヒ消滅仕ルヘシ、深ク御勘訂可被遊候、亦職掌ニ付、有志ノ輩深ク心ヲ用ヒサルカ如キ、憂ヲ思召シ、其非ヲ御化シ被遊候儀、是レ君ノ御職事ニシテ、実ニ御尤ニ奉存候、乍然君タル御人ノ臣ノ非ヲ鞭強スル時ハ、臣タル者ノ心ハ君ノ言蹟(勿謂我尊而傲賢慢士、勿謂我智而拒諫矜己)ニ遭フ事ヲ恐懼シ、却テ職

事ニ惑フ憂アラン、願クハ御身ノ德行ヲ御省察アリテ、我徳ノ薄キニヨリ、有職心ヲ不用ノ憂却テ不堪所ナリト、口ニ新ニ德行ヲ修メ玉ハ、却テ臣ヲ励スノ道行レ、令セスシテ言従フヘシ、兎角君ノ言行ニヨリ臣子ノ道行ハルヘシ、御身ヲ御責メ御勤被遊候ハ、オノツカラ其德行固天下ニ溢レ可申候、忠久公已來御在君ノ御言行ヲ視玉ヘ、手近ク申サハ泰清公・慈徳公ノ御言行ニ顯然タリ、又口牌ニモ夜ニ入御城下ヲ通ルハ、四ツ九ツニナリテモ、御城中ニ立木ニ御当リノ御声不絶、是ヲ聞テ惰夫モ志シヲ起シ、書ヲ読ミ武ヲ修シ、暫クニシテ休息イタシ候杯ト、于今奉感勝事ニ御座候、又君ハ天ナリ、有職ハ造作ナリ、造作ハ造作ノ任ヲ失ヒ、士農工商入京シテハ、春夏秋冬入京ニテ四季ヲ失フカ如シ、故ニ質素節儉ヲ以テ信実ニ御制度被遊候ハ、少シハ國中一洗スル事モ可有御座候、此節御書取御添書ニ、御家老衆ヨリ一洗セヨトノ御沙汰御座候、定テ御見居被成テノ御事ニ御座候半、此一洗スル儀ト輕々敷御事ニテハ有御座マシク、別テ重キ事ニテ如何可思召哉、務テ英雄ノ心ヲ攬ルノ御氣象ヲ御振起シ不被遊ハ、一洗スル事ハ実ニ不能儀ト奉存候、穴賢、

文久元年辛酉十一月二日 道島源五郎(正志)

記スル処感スヘキ論ニアラスト雖モ、当時意見ヲ述ル者続々タル中ニ、道島ハ一種ノ人物ナルカ故、巧拙ニ関セス志ノ好ミスヘキヲ以テ、茲ニ記ス、

四七八 芝藩邸焼亡 安田助左衛門日記鈔

文久元年十二月七日、

屋七ツ過 大奥ヨリ出火、 御殿廻御役座不残焼失、

長屋ハ銅御門脇二軒、南向屋敷不残、芝口三丁目鹿島濱迄打出シ、亀丸御屋敷御類焼、夜四ツ時分鎮火、誠

ニ言語ニ絶候次第第二候、

御姫様方暫時拙者御長屋へ御迦シ(ママ)、三田通御見物ニ被為入、御供揃高輪御屋敷へ御迦シ(ママ)、於御機嫌ハ少モ御差障不被為在候、

編者曰、焼亡ノ原因ハ当時種々ノ説アリ、石室秘稿中久光公親話記參看、其事実察スルニ足ル、

四七九 伊牟田尚平建言家記鈔

(米)「天下之形勢

當時外憂内患内外御多難之御時節、殊ニ昨春不良之御(松田事件ヲ云)

一条モ有之候付、」

来春

御参勤之義不容易場合之事御座候付、平常之

御参府ヨリ御供人数被相重、屹ト御手当有之度義、

(米)「候得共旁御都合等モ有之、格別士勢被召列義ハ不被成御出来候得共、兎角 義ハ勿論ニ」御座候間、

愚存之形行左ニ相記申候、

一御道中御宿割六七里ノ間ニテ、御立刻限六ツ半時ト被定置、黄昏迄ノ内ニテ是非御泊宿迄御着相成度候、

一御本陣へ御着ノ上ハ、混雜不致様御先番等ヨリ能ク都合可致置事、

一御小姓ノ義、(米)「是迄十四人ニ相済来候得ハ此節一今六人モ被相重都合廿一人ニ被仰付候ハ

、御番方二組、御供方一組都合七人ツ、三組二分、御供方七人之内ヨリ一人ツ、御番相勤候へハ、御番人数八人ツ、ニ相成候付、其内四人ツ、二ツ二分、夜半代リニ不寐番相勤候様可被仰付哉、

一御本亭番足輕二十六人計ツ、ハ被相重相勤、忍廻等無油断被仰付、火用心等氣ヲ付候様有之度候、

(米)「御番相勤候様、其内十三人ツ、不寐ノ番相勤、半時迄忍廻ニ無油断用心候様、若違変ノ廉モ有節ハ、当番御供目付へ致注進可順指揮可仰付哉、」

一御供目付兩人ツ、ハ泊番ニテ、彼是氣ヲ付指揮イタシ候様被仰付度候、

一御駕籠脇江、別段十人計御供御人撰ヲ以被仰付度候、

一御陸尺其外人足迄、御行列之分ハ此方御手人ニ被成度候(江戸政田屋人足及ヒ陸尺履ヒノ例アリシヲ云)

一御発駕一七日計前以他所向取馴候者兩人計被差立、中途駅々風説ニ聞合、虚実分明ノ義、早々以飛檄御道中

先江申上候様、足輕兩人計被召付度候、
(先)「守衛人数」

一御発駕前日二十人計被差立度、其内十人ハ諸郷ヨリニ撰(先)「御小姓与ノ内ヨリ御人撰ヲ以テ被仰付跡十人ハ諸郷ニテモ」テモ、又ハ足輕ニテモ可宜、極人柄御吟味ノ上ニテ被

仰付度、一日御跡ヨリモ同断被差立度候、

一御供人数荷物其外成丈輕弁(後)ニ被仰付度候、無抛当用ノ品計、外ハ蒸氣船ヨリ御差廻被下度候、

一御先御跡荷等都テ蒸氣船ヨリ被差廻度、尤蒸氣船ハ

御発駕当日出帆、小倉辺江相廻居、小倉御立後一日後レ出帆、大坂河口迄相廻居、浪花ヨリ御差廻ノ御荷物

モ候ハ、御積込相成度、大坂御出立後七日計ハ見合居出帆、江戸ノ様相廻度候、尤御滞府中ハ滞船被仰

付候ハ、尚以急變ノ御用ニ相立可申哉、

一酒・焼酎等猥ニ不相用、且万端相動候様被仰渡、又者

等ハ主人ヨリ屹ト可申付旨可被仰渡置度候、

「(先)「ヲノツカラ人々心得モ可有之候得共、多人數ノ事候付前以右ノ通被仰渡置度候、」

一自然出火・騒動等到来ノ節ハ、成丈御本亭

御廻シ無之様、乍然火相掛、御廻シ不相成候テ不叶節ハ此場所ト申義、御供目付・御小納戸ニ前以能ク相心得居、臨其節動揺不致、弥氣ヲ静堅固ニ守衛可致旨、

兼テ談合イタシ置度候、

一大坂御屋鋪外廻脇宿ハ、都テ御供宿相付度、尤

御滞留中夜廻等嚴重有之度候、
(先)「中小姓ノ場ニテ御供二十人計被相重度、御駕籠脇エ御供被仰付度候、右ニ付テハ屹ト人物御吟味ノ上被仰

付度候、左候テ一日十人ツ、隔番ニ御供被仰付、非番十人ハ御立御刻限半時前被差立、山林或ハ橋道等ニ氣

ヲ配リ、中途非常ヲ戒メ、御本陣ノ場所ハ尚以相探シ、

則晚不寐ノ番五人ツ、夜半替リニ被仰付、翌日御供イタシ日々繰廻候、其通相動候様可被仰付候、」

一粟田様御内

劍術師

長沼二通

英 殿 雄

一 中山様御内諸大夫

六位士

一 故粟田公御殿内

(是改柳右衛門、電八郎)
龍右衛門士噺

一 三條公御内

(物)
龍右衛門士噺

一 長州

田中河内助 (櫻歌)

三多美藏人

森寺因幡守 (常空)

雨森織部正 (兵輔)

北條瀬兵衛

田北多仲

本ノマ、
要洛

井上與四郎 (兼實)

周布政之助 (兼實)

栗原良藏 (栗原盛功、栗原良藏、栗原良藏)

坪井升筒

中村道太郎

桂小五郎 (桂小五郎、本名孝)

長州切レ
(元裏)
浦鞠負家来

白井小助 (繁行)

赤根武人 (真通)

秋良敦之助 (真通)

大楽源太郎

一 尾州

御側大家合卜上

一 越前

側用人上

一 肥前

一通

一 信州上田

松平伊賀守家来 (忠徳)

一 信州真田

田城在

一 肥後

牧崎

川尻近在

鷹匠小路

通り町

新町牢屋町

高瀬在下安楽寺村

上田帶刀 (篤庵)

田宮彌太郎 (篤庵)

中根鞆負 (八力)

三岡石二郎 (八力、由利公正)

村田己三郎 (氏名、氏名)

千壽才之助

長源 (一)

草場 (一、(精力)(盛力)、讓(佐助)トモ云フ)

常川才八郎 (吾号象出)

佐久間修理 (増美)

宮部鼎藏 (秀美)

永島三平 (篤庵)

轟武兵衛 (信通)

山田十郎 (信通)

末松孫太郎 (安明)

川上彦齋 (河)

松村大成 (至文)

同源藏

從四位

同 大真

阿蘇大宮司惟治

熊本内坪井山ぐる

今在河内

松田十助

(範義)
(信弘)

津田山三郎

山形典二郎

澤村尉左衛門

同 尉助

原田作助

神足十郎助

轟弟子

上松己八

徒ノ小姓

青木彦兵衛

黒瀬一郎助

魚住源次兵衛

一備中連島西ノ浦住

徳実

一美作州住軍学師豪傑

一播州姫路

三宅貞太郎

植原六郎右衛門

秋元正一郎

(安民)

呉服町

一江州八幡魚屋町

一播州林田藩中

一下ノ關

大高(重秋)又次郎

西川(吉輔)善六

大高與右衛門

上

白石正一郎

上

同 廉作

一備前岡山内山下住土肥家来

野呂久右衛門内

変名 平島后太郎

実名 宇野助太郎

一長州

家来

益田(親施)彈正

側用若附

長井(時應)雅楽

一土佐

山縣半藏(岩戸)藏

側用人

上 小南五郎右衛門

上 上橋詰明平

一伊豫宇和島

上 吉見(左膳)長左衛門

一江州

(柳)龍右衛門士噺

文久元年 (1861)

一 福山	当分国許	宇喜田一蕙 ^(可憐)	一 筑前	淺香市作 ^(無三)
	同 松庵	中村圓太 ^(無三)	一 江戸三番町	平野次郎 ^(無三)
	大島如平	秋山何某子	一 備後福山劍術師	斧太郎
	同 七左衛門	川崎加守	一 備前岡山藩	サブリ勇右衛門
	石川和助	下宮源吾	一 粟田公御内	池田某
	北 幸二	右人物不分	一 若州浪人	平馬小太郎
一 因州	用人	一 傳流	一 因州 水府人引合	谷森種松 ^(善臣)
	武文	シニヤ流	一 筑前 德實	國分主水 ^{文友}
	江戸夕田主居物頭	佐不理流	一 若州 參政	田村甚左衛門 ^(盲彦)
	三千石家老	一 傳流	一 因州 諸奉行本席	安達辰二郎
	家老根取役	シニヤ流	一 筑前 侍読	堀庄次郎 ^(無明)
	学者位久	一 傳流		
一 藝州	金子徳之助 ^(式部)			
一 周防へ夕村	池田兵庫之助 ^(式部)			
一 備後	山田郁之丞			
一 藝州	松本長兵衛			
一 土佐	岡田清			
一 筑前福岡	濱田守之丞			
	足輕			
	藤四郎			

一 梁州藩 (柳川藩) 上 長井雅楽 (時鷹)

上 立花伊岐 (香坂親雄)

一 筑州 上 十時攝津

一 筑州 直陳 上 月形到

中村圓太 (無二)

一 久留米 子息真木主馬

国元水天宮神主 牧和泉 (真木ノ誤) (辰臣)

一 下ノ關 吉

右新地ノ揚屋

一 長州 増田弾正家中 (益田親施)

永島へ参ル 小郡剛蔵

一 駿州 田中藩儒者

永島ヨリ聞所 吉野龍蔵 (天龍)

藤森蔵 (森助丸)

一 肥後 青木彦兵衛

大野鐵兵衛 (平野國臣)

一 京師 宮崎司殿

岡崎 木浦竹四郎

一 因幡 鳥取 安達静馬

一 筑後 (金谷ノミ) タチツヅ 水天宮神主 楨和泉守

一 筑前 子息主馬 マ、 有志津

平野次郎 (郎脱カ) 今八田中作八ト云太宰府神主

讚州 小野加賀守

一金比羅禁 榎井村 鹿島屋長次郎

燕石ト号

但多度津ノ医師 富山由章ヨリ聞所

一 福岡 海津幸一郎 (養) (養田惟實)

高取養羽

一 水府十四男 松平豊四郎殿

松原通新町

一 玉津島神主 千訓丹波

越前生唐橋殿座主 水島監物道信

京師寺町面今出

一 寺田 (田中河内介雅彦) 鍵屋庄兵衛 政美

臥龍銀主

一豊後竹田 小河彌右衛門
一岡ノ藩中 一敏

一豊前 小倉故家老 豊田勘介
一肥後 川上彦齋 (安明)

内坪井山ぐる居宅 大野鐵兵衛
上野賢吾

一但馬 トフミ 田路幾太郎
谷垣平一郎

酉三月十八日借入

一金五両

但大坂長清兵衛町玉造橋阿波屋藤兵衛ヨリ、

一江戸 伊勢屋四郎兵衛

水戸浪人金拾五万両貸シ候由ナリ、

一出雲国一宮 熊野大社大官司熊野別火弟

熊野小別火
意字淵 ヲウツネ

一長州萩藩 田中秦一郎

芳樹

山形 (眞) 半蔵 (実戸)

小國剛蔵 (眞)

小河彌右衛門 一敏

廣瀬健吉 重武

玉来之町松屋 矢野勘三郎

溝川 義和

加藤條之助

長家 小河悌三郎

一温 同睦四郎

一和

本書伊牟田カ家ニ蔵ス、書中重複錯雜ナルモ、本書ノマ、ニ膳
写ス、

四八〇 参考 大久保利通日記抄

文久元年辛酉十二月九日、

一今四時 泉公御登城罷出、田中一件其外申上ル田一件 (中脱)

ハ御許容、御前へ申上候様御沙汰ニ付申上候、

一七ツ後御馬御式日ニテ被遊御馬候、暮時分御引入、

一島津壬生馬宜敷御用見合ニテ今日被遊御覽候、御馬預

伊集院彌右門乗候、御用相成候可可申候方□、尚亦役々相揃吟

味ノ上申出候ヘハ、御厩ヘ御預ニテ、其通可仕旨承リ

候ニ付、奉伺候処、左様可致トノ御事ニ付、彌右衛門

ヘ其段申達置候、

一今晚泊大奥ヨリ御入被召候ニ付、御前ヘ罷出、色々

御咄等申上、四前下ル、則御寝、

全十一日

一今日四時出勤、四后重邸久光公御愁ヘ罷出段々相伺候、八過退出、

出殿ニテ小家小松ヘ差越、

順聖院様御言行録、伊集院仁左衛門碑銘著述、今藤新

右衛門伊集院碑銘分成功ヘ被仰付候、

右同断御記録奉行伊藤彦助、伊地知小十郎被仰付候、

茲ニ記シタルカ如ク、今藤ヘ命セラレタルモ成稿ニ至ラス、剩

ヘ参考書数多私宅ニ在リシヲ、丁丑ノ兵燹ニ罹レリト久光公

ノ御言三四十葉ノ草稿ヲ見タルコトアリシト云々、御親話記及

ヒ速記録第 号ニ記スカ如シイナ

十二月十六日

一八ツ後重邸ヘ参上、兩人首尾申上、且今日ハ 順聖院

様御忌日故御廟所ヘ参詣、心祈丹誠ヲ凝シ大事云々、

久光公 泉公ヘ奉願候処、別テ克御都合御深意段承知仕、感激

落涙嗚呼難尽言語、今夕御式夜ニテ罷出、小家小松ヘ参上、

談大事、

同

一四ツ時出勤、今晚宿衛小家、今日重邸事由知ルニ由ナシヘ参閣云々、嗚

呼々々、

以下記載ナシ

四八一 当時藩情概略 有馬新七記事抄

一十二月七日江戸芝御邸御焼失焼亡ノ事実ハ旧邦秘録文

久二年ノ部ニ詳記ス候段、同廿日到来候、依テ右ヲ口

実トシテ、堀次郎伊地知貞馨旧名、初堀仲左衛門・次

郎・小太郎、後伊地知家ヲ相続シテ宗之丞貞馨ト呼ヘリ等

之徒 御参府御延引之例之猶予、不断之処置可致毛難

測候ニ付、兎角此節ニ至候テハ決テ御猶予有之候テハ

不相済段、早々帯刀小松氏ヘ申入置候事、

一同廿五日大久保一蔵利通上京候、然処中山尚之助美善ヘ肥後水

俣ニテ行逢候由ニテ、又々罷帰、左候テ同廿八日一蔵

事上京候事、

中山儀 (渡平行安) 御劍一件首尾能相濟罷下候、尤 (茂公) 太守公へ御

冠御裝束拜領、和泉様ニモ御拜領物等有之、且中山フク

サ包奉護罷帰、右ハ牡丹之間へ、太守公御切封ニテ御

格護相成、御小納戸御小姓等へ、別テ大切ナル御品故、

出火等ノ節ハ、何分モ右之御品速ニ持出シ候様、被仰

渡候由ニ候、右ハ

勅書ナラントノ衆説モ有之候へトモ、右 御劍献上付、

歎感不少之趣杯

宸翰ヲ以被仰下候訳ニテ可有之(御劍献上及ヒ御建言ノ趣)

御満足御守護御依頼ノ趣ナリシト云、(尚之助) 中山へ 陽明家ヨ

リ、太守公ニハ何ヲ被遣候哉ト、(忠房公) 大納言様御尋被為

在候処、文武之修行仕候段御對奉申上候由、右等之御

對申上候へハ、ヤ、容易ニ別段勅

王云々之

勅書等被成下候儀ハ、有之間敷被察候事、 中山カ御

對甚其對ヲ失シ候、僅ニ兩三言ヲ以、略奉靖

宸慮候儀モ可有之、然上ハ追々之所ニ至候テハ、

勅書等之儀モ可有之儀ニテ候、

一同廿九日谷村愛之助江戸へ罷下候、尤去ル廿五日ニ又

々御小納戸見習被仰付候事、

一 壬戌正月八日飛脚到来ス、右ハ此節御焼失(御差扣書

旧邦秘録ニ記ス)ニ付、御差扣被仰上候処、一七日ニテ

相濟、且金子二万兩拜借被仰付候云々也、尤 御參府

之一件モ弥御延引之御模様喜入氏へ差越、主意篤ト申

入置候(事実旧邦秘録ニ記スカ如シ)

但堀次郎等ハ御焼失ハ不幸之幸ニテ、此ヲ以テ

御參府御延引ヲ可相謀トノ事ニテ候由(當時機密ノ

コトナリシ故、有馬等モ事実ヲ知サリシナラム)

一同十一日鈴木武五郎儀、御家流兵道被仰付置候ニ付、

不及日勤云々之趣蒙仰候、

右ハ鈴木ヲ中山等カ徒忌諱候ヨリ、右之通致処置候、

武五郎氣象宜敷、御小姓之風儀ヲ致振起度所存ニテ、

度々及議論候儀モ有之、旁彼等之所忌諱ニテ候、武五

郎漸ク廿歳、彼等ヲダニ不能容用、況ヤ於天下之英

傑乎、(中山ヲ忌

一流俗之輩我党ヲ誠忠派ト称シ、種々謗議ヲナシ、或ハ

チヨボクレ等ヲ作り、跡形モ無キ事ヲ造り立テ、且森

山新蔵ヲ悪ムコト甚シク、彼ヲ罪ニ処セムトノ巧ミモ

有之候(當時党派数多アリテ物議囂々タリ)

一 左衛門殿ヲ退職之儀ヲ甚悪シク申触シ候、彼ヲ退ケ小

刀清藤
松ヲ引出シタル杯ト申触シ候、高崎佐太郎頗ル有志之

人ニテ候処、右ヲ悪ミ石杯ヲナケ候者共有之、然処二

月十七日二六人(松方金次郎正義・山口金之進・奈良原喜
田名)八郎・川上助八郎・森岡善助等ノ数名ナリ)程不宜聞ヘノ

趣有之、何分申渡迄之間慎可罷在旨被仰渡候、此者有

村武次等略周旋有之候、○植村十蔵御徒目付ニテ候処、

虚言ヲ申候故吉井(友志)・有村同役ニテ候故、右ヲ面斥イタ

シ候、彼甚恐怖シ夫ヨリ上方(大坂辺)ノ浮説モ漸ク相止候体ニ

候、

二月廿日ニ菊地源吾(只今大島三右衛門ト改名
有之候(西郷隆盛變名))仕舞次第出立、

下ノ關辺ヘ御用有之候ニ付、差越候様被仰付候、此ハ

九州有志等之情実ヲ探索セム為ノ事ニテ可有之候、

(事實旧邦秘録ニ詳記ス)

四八二 柴山良助蒸氣船伝習意見書

蒸氣船ノ義ハ、当御時節柄大急用ノ御船、往々航海ノ

道相開ケ、洋人ニモ益リ候様修練不能成候テハ、不叶

儀ハ無申迄事ニ御座候処、此節蒸氣船ノ事承ルニ、未

タ何ノ矩則規方モ不相備、今日僥倖ヲ偷ミ、苟モ御用便ヲ

勤ル而已ニ被伺、誠ニ歎ケシキ次第奉存候、右モ畢竟其

職ニ堪候者ノ乏シキ故ニ可有之ハ勿論御座候ヘトモ、

其人ノ備ルヲ待テ後ハ申ニ不及義、今日ハ今日ノ人才

ヲ御撰任被為在候処專要ニテ、尤モ当分ノ処モ蒸氣船

方被召立、御船奉行初乘頭等ノ賦職モ相待候事ニ御座

候ヘトモ、乍恐愚存仕候ニ、其主裁本ノマモノ、混ト御信任ト

申義薄キ様奉存、就テハ当分蒸氣船方ノ人才承ルニ、

鎌田庄右衛門(請ノ候)ト申者一人ノ由御座候間、誠ニ人ノ乏シ

キ訳ニテモ、中々此者御船奉行ニ被為服、蒸氣船方ノ

總督ト申様ノモノ被命、船中ノ事ハ大小トナク一切御

任セラレ度義ト奉存候、当分ノ御仕向ニテハ、先ツ申

サハ御急務ノ御用筋敷主裁役ノ不任心
儀多々御座候由又上ノ御乗船トカ

申様ノ砌ハ、他役場ヨリ彼是ト差図ヲ得テ、本意ヲ背候

儀有之筋ニ被伺、ケ様御座候テハ、譬ヘ其道ニ上達仕

候者迄モ、十分ノ事ハ規則進兼可申ノ処、況シテ今日

不取習ノ者ハ、猶予狐疑イタシ、今日僥倖ニ因順候モ、

サスカ不可咎御場合ニモ相当リ可申奉存候、何レ其人

ヘ御撰任ノ上ハ、船中ノ事ハ大小トナク一切御任セ、

又船ノ規則ヲ相立候儀ト、恐多クモ上意迄モ、容易ニ

不被為絶程ノ嚴ナルモノニ無御座候テハ、規則相立候

詮有御座間敷奉存候、就テ余計ナル事迄申上様御座候

へトモ、(編島齊正)松平閑叟侯(佐賀老侯)或時蒸氣船へ御乗船ノ

砌リ、船將ノ手ヲ取テ船ノ上席ニ御導キ、陸地ニ在テハ我号令ヲ待ヘキ旨、船中ハ我モ船將ノ号令ニ従フト

被仰候事御座候テ、人伝ノ話ニ承リシ事ニテ、実否ノ程モ不被計義ナカラ、美談ノ御事ニ御座候、ケ様ノ儀

御賢明ニ奉対、不憚申上候様、殊ニ右様ノ処、自ラ深キ思召モ可被為在申上候ハ、素ヨリノ御事ナカラ、ケ

様ノ深キ思召モ御役場ニ依テハ、其深キ思召ノ義ヲ汲(誤カ)連過伝へ候様ノ義無之トモ、主裁役ノ者ハ格別御懸命

ヲ被下、船中ニケ様御座候テハ船中ノ事不相調而已ナラス、乍恐 御上ノ 御賢明ヲ欠候様ノ儀ニ差当リ、

甚以歎ケシキ儀ト奉存候間、進退黜陟賞罰ノ權ヲ給リ、混ト御任セ被遊度儀ト奉存候、此等ノ義存寄ノ俚不願

恐奉申上候 以下虫喰、

用捨

何分御斟酌被下、今日ハ今日ノ人ニシテ、一日片時モ

船中ノ規律・作法相立、僥倖ニ因順不仕様御処置被為

在度御儀ト奉歎願候、誠惶謹言、

四八三 軍事ニ関スル市來廣貫意見建言

方今天下ノ形勢不穩、実ニ治乱分別ノ境ニ御座候処、

今般以

御書取被

仰出ノ通、当時海内多難ノ折柄、御政体向万機被為苦尊慮候段、一草芥ニ等シキ微賤陋愚之私式ニ至迄、別テ

痛心縮眉仕罷在候、依之祖先以來譜代御恩徳ニ化浴仕候御報恩可仕ハ乍恐此時ト奉存、当分之職掌砲術館之

儀ニ付、兼テ相合罷在候廉不願恐、左条ヲ以奉言上候、一 当今ノ世態ニテ肝要ニ御世話可被為在儀ハ、御軍事ト

奉存候、右ハ甚多端ノ訳ニテ、其御根本ハ人心ノ奮起ヲ初ニシテ、富国強兵等ノ筋、尤モ重大多繁ノ事柄ニ

御座候へハ、先ツ其次ニ出候練兵之儀ノミ奉申上候、兵士教練之儀ハ、

(齊彬公)御先代様ノ御作法海内無比之御家流雖有之、和漢共ニ兵ハ時勢ニ依テ変革不仕候テ不叶モノニ御座候へハ、

(齊彬公)金剛定院様

順聖院様分テ御手ヲ被為付、

御家法ヲ御基本ニ被相据、西洋砲術被召加、大小之砲隊御大成御用ヒ相成、就中砲器御製造・砲台御造築等

之儀共、專西洋法ニ御則リ、御斟酌御用ヒノ訳御座候

付、御流儀砲術分テ御手ヲ被召付、殊ニ去ル寅正月(寛永二年)

順聖公御書取ヲ以、新納駿河(久仰)へ被

仰付候、御趣意ノ御旨薄々伝承仕候ニ、砲術御盛大被相開候御趣向詳ニ被載置、一同御国役大切ナル訳、誠

実ニ汲受出精仕候様ニトノ

御尊慮ヲ以テ、犬追物場ニオヒテ稽古被

仰付候旨モ被記置、尤犬追物場ハ、御家ニ付テハ、別

テ御大切ノ御場所故、ケ様之所ニテ平日稽古方被

仰付候へハ、衆人信服出精可仕トノ

思召ニテ、追々稽古被、仰付候、右ニ付乍恐愚考仕候

ニ、此涯当分之砲術館ヲ、演武館内弓場辺へ御引直相成

リ、多人數訓練之節ハ、弓場ヨリ犬追物場へ引続操練被

仰付候向ニ、御造立被為在度奉存候、書籍方之儀モ、

造士館近傍ニ御引直相成リ、和漢之兵書講習之館ニ被

仰付、造士館卜稍合併ノ向ニ御趣法相建、兵学研究被

仰付度奉存候、且犬追物場ノ儀ハ、重キ御場所之事故、

砲術稽古等被、仰付候テハ如何敷旨、駿河ヨリ為奉伺

趣モ有之哉ニ、其時分世評モ御座候へトモ、当分ノ世

勢ニテハ、砲術ヲ以軍備之基源ニ相建候ハ、和漢共同

様ニ可有御座、其長技ヲ以テ、国家重大之軍備ニ相用

候事、則今般被、仰出之通、時勢ニ依テ変革云々トノ

御意味合ニ相叶可申哉、尤古昔ハ弓ヲ以武器ノ長技ニ

仕リ、武士ヲ弓矢取身、又ハ弓馬之家トモ相唱、其長

タル処ハ數十歩ノ外ニ制禦スルノ利器ナル故ニ御座候

ハン、当今ニ相成候テハ数百千歩ノ外ニ、制禦スルノ

勢アルモノハ、銃砲ニ限り可申候間、其利用ヲ以テ、

兵器ノ最ニ相建候ハ勿論ノ事ト奉存候、依之

順聖公御趣意通、犬追物場ニオヒテ訓練又ハ犬追物同

様騎兵之操練モ被、仰付、時勢御相当ノ御処置ニ可有

御座候ニ付、騎操之師範者川上十郎右衛門ヲ初、馬術

師範之者へ被(川上外ニ師範三家アリ)

仰付可然ヤト奉存候、

且又去ル卯年比(安政元年)ニモ御座候半、磯永孫四郎并私奉、御

内命、演武館内弓場辺孔廟之側ニ、砲術館并ニ書籍方

御引直之絵図取立方、極内被

仰付候儀モ有之、右ヲ以奉恐察候ニ、

順聖公其御内慮被為在候御事ニ奉存候、何卒此涯御引

直有御座度御儀ト奉存候、

一右通御手厚被、仰出置候趣モ有之、加之去ル巳年比(安政四年)

至テハ、

御自身(舎形公)様風寒暑雨ヲ不被為厭御勉強被為在候、御次第

ハ一統奉伺候通ノ儀、夫ノミナラス砲台御築迄等造方其他

御軍備向、御盛大御世話被為在候御事蹟ハ、海内ハ勿

論海外諸蛮ニ至迄相轟候程之御事ニ御座候間、此後御

手当向并操練方等ノ儀共、都テ

順聖公御手ヲ被為付候通ニ追々御世話被為在候ハ、人

心之興起ハ素ヨリ、万端御遺漏ハ有御座間敷ト奉存候、

乍併今少シ御趣法御变革被為在度儀ト奉存候廉、愚考

之趣左条ニ奉言上候、

一 砲術調練ニ付テハ、不拘年輩前(才成ト通唱ス)髮取り候モノハ、都テ被

仰付来候ヘトモ、向後ハ二十歳位ヨリ稽古方被 仰付

度、長年ノモノハ四十歳位ヲ限り、稽古被 仰付度、

是迄稽古仕居候モノ、又ハ別段心掛ノ者ハ格別ニ御座

候、年若ノモノハ夫々学文劍槍等ノ芸術、只管研究不

仕候テハ不相濟事ニ御座候ヘハ、貴賤貧富ニ不拘造士

館へ入学被 仰付、困窮ノモノへハ御救助方御宛行等(貧士救助前ニ在ルヲ云)

ノ内ヨリ御扶持米被成下、二十歳被成下候者外御奉行

方其人之器量分限ニ応シ被 仰付、其節ヨリ砲術調練

方被 仰付、御軍賦ニ被召入度、且業合ノ儀ハ、大小砲

ノ放法隊列ノ變化等、号令ニ随ヒ運動不差支様練仕

候ヘハ、一統砲術者ニ不相成候テモ、決シテ差支無御

座候付、外勤被 仰付候節、四五ヶ月程モ混ト操練被

仰付候テ相濟可申哉ト奉存候、併人ニ依テ砲術館其他

砲術ニ関係ノ御奉公仕度懇望ノモノハ、志願通被

仰付度、

皇朝古昔之軍制延喜式軍防令等ニモ、二十歳或ハ二十

二歳ヨリ兵丁ニ用ルトモ有之、漢土古今ノ法モ、大方

ハ二十歳以上ヲ兵部ニ用ルトモ承及候、西洋各国ノ制

モ拾八歳、又ハ二十二歳ヨリ兵卒ニ用ルトモ相見ヘ居

申候、然ハ和漢蕃共二年若ノモノヲ兵部ニ用ルモノト

ハ、相見ヘ不申候間、御国ニオヒテモ、十八九歳以上

二十歳位ヨリ御軍賦ニ被召入度御儀ト奉存候、

一 練兵之法ハ、和漢蕃共ニ其法一ニシテ、其術異ル迄ノ

様奉存候、衆人ヲ統一シテ進退聚散ノ法ヲ教練仕ニハ、

先ツ第一ニ其長ナル人ヲ建、其人ニ生殺ノ全權ヲ掌ラ

シメ候儀、第一ノ事ト奉存候、因テ御枝属之御方へ御(公子ヲ云)

軍事總裁ノ任ヲ被命、御名代等ノ御役名ニテ教練之度

毎ニ御出席被成、随テ御軍役惣奉行等モ出席仕リ、大

調練等之節ハ、其御方

御名代ニ御出馬被成、諸將ニ御指揮或ハ賞罰嚴明御檢

查被成、万事実場ノ趣意御貫キ、御下知有御座度御儀
ト奉存候、御人体迄奉申上ハ、踰等之罪不輕、甚恐多
奉存候ヘトモ、當時ニテ御連枝ノ重キハ勿論、御器量

久治、茂久公卷

人望旁島津圖書殿御相当ノ任ト奉存候、将又御人数組
之儀ハ、御家法ニ被為則、夫ニ西洋銃砲隊ノ法ヲ御斟
酌被成、御国風ニ準シ候様御治定有御座度、左候テ兼
テ御先手御旗本等之人数急度被定置、平日其人教組之
俛教練仕リ、吉野原又ハ川尻砂揚場等ニテ、不時之調
練被相催、当分通毎月組之稽古等ハ御引取被 仰付、
可然ヤト奉存候、

鹿兒島市

一 大小砲之放法、又ハ銃陣之運動号令其他劍銃之操法等、
当分通西洋ノ挙動ニ拘泥仕居候テハ、教練之次第繁雜
冗長ニ有之候テハ、御国ノ人氣ニハ迎モ必兼候付、都テ
易簡ノ一種御国法ヲ御大成被召建候ハ人心納得、教練
モ最易ク、実用ニ取ツテモ可宜哉、今形蛮夷ノ挙動ニ
沈酔泥着仕居候テハ、衆人ヲ統合シ練達ノ期ハ無覚束
奉存候、私ニモ若年ノ砌ヨリ、只管西洋法ニ万端惑醉
仕候テ、最早拾七八ヶ年程モ相学候処、当今危急逼迫
之時態ニ相成、人心之和不和等彼是窃ニ勤考仕候ニ、
迎モ御国之人氣ニ必兼候段、少シク醒悟仕、有識ノ人

々々議論仕候ニ、弥其通ニ御座候間、何卒御国流和漢
洋之法御大成被召建度御事ト奉存候、

一 大小砲等御製造方御規則等ノ儀ハ、

順聖公御代追々被 仰出置、又ハ御世話被為在候通、是
丈ケハ西洋法ニ被基度御儀ト奉存候、乍併地理之險易
人心之和不和ハ勿論、大小輕重等ハ御国体ニ被応、御
斟酌ハ勿論ノ御事ニ御座候、右ニ付テハ去ル申秋集成
館御趣法向之儀奉言上置候間、此節ハ別段不奉申上候、
右ハ別テ奉恐入事柄勝ニ御座候ヘトモ、当分之職務
ニ相係訳御座候間、不顧恐奉言上候、誠惶誠恐謹言、

御徒目付

砲術書籍方掛

文久元年酉十一月四日 市來正右衛門廣貫四郎 旧名
右之通今度被 仰渡之趣ニ付相認、酉十一月五日御
側御用人龜山甚之丞ヲ以奉差上候事、